COBALT-SERIE

天使はうまく踊れない

若木未生

ハイスクール♥オーラバスター



集英社文庫

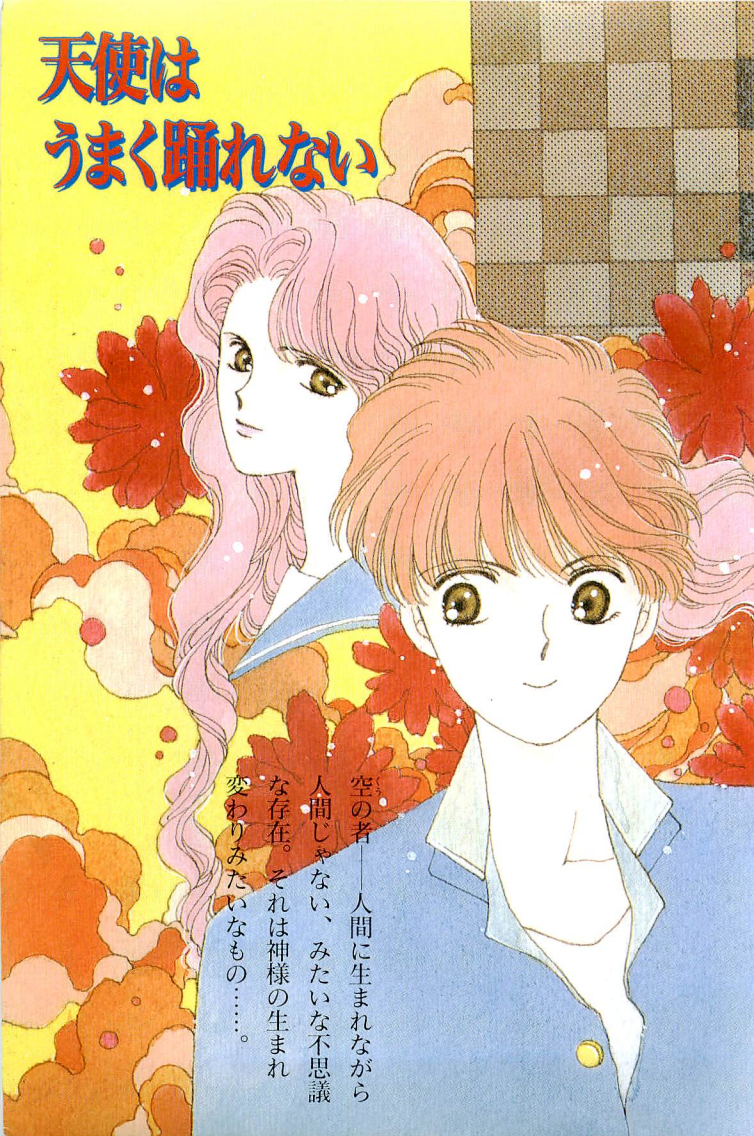
崎谷亮介、身長163cm。趣味、絵。好きなコ、約一名。ごくふつうの高一生。ただし、見えるはずのないものが見える、厄介な感覚強し。そんな彼の周りに、最近、妙になれなれしいヤツらが出没しはじめた。謎の転校生・諒。異様に態度のでかい美少女・冴子。街で遇然でくわした十九郎と希沙良。彼らの話を総合すると、〈妖の者〉とかいう怖〜いヤツらが、亮介に取り憑こうと狙ってるらしいのだ!!

恋気分いっぱいの夢♡小説誌！

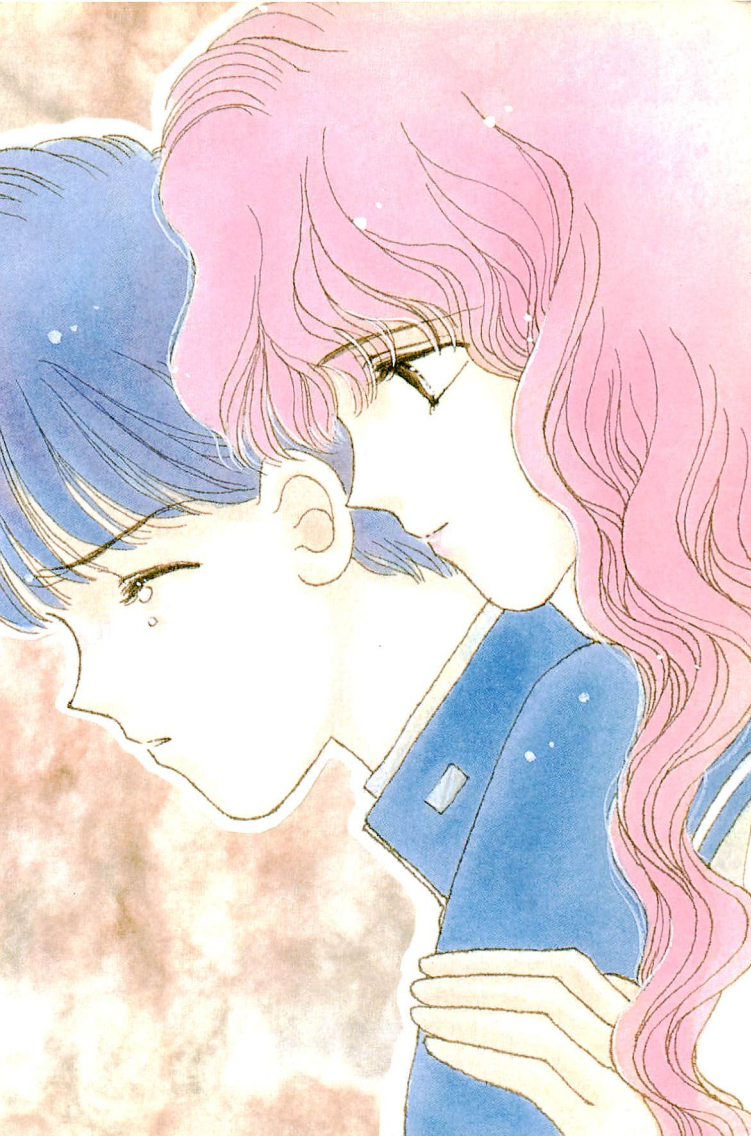
コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社

天使はうまく踊れない



空の者――人間に生まれながら人間じゃない、みたいな不思議な存在。それは神様の生まれ変わりみたいなもの……。





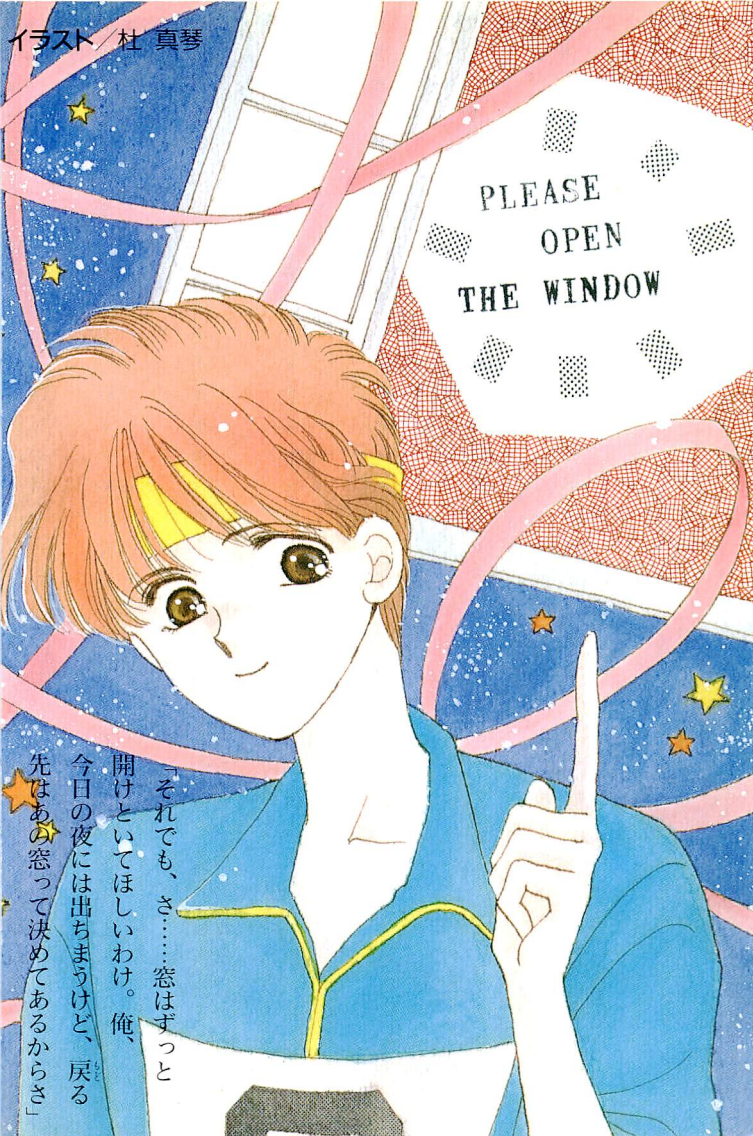
同じ目の高さで、諒が見ている。

「……ごめん」

冴子が、背後から、包むように手をまわした。あたたかい指。

「無茶するんだから……」

イラスト／杜 真琴


PLEASE
OPEN
THE WINDOW
それでも、さ……窓はずっと
開けといてほしいわけ。俺、
今日の夜には出ちまうけど、戻る
先はあの窓って決めてあるからさ」



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

天使はうまく踊れない

若木未生

集英社

目次

天使はうまく踊れない

序章　ファーストアクセス……12
1　事件は突然降ってくる……20
2　正体不明の転校少年……39
3　果たしてそこに理解は生まれたのか？……56
4　意表をついて絶体絶命……76
5　「彼女」……103
6　白昼堂々大乱闘……125
7　「彼」……148
8　ごめんなさい……172
9　夜の校舎を強行突破……193
10　レボリューション……212
終章　とりあえずグッドラック……239
あとがき……249

登場人物紹介



崎谷亮介

本編の主人公A。本人は普通の高校生のつもりだが、実は不思議な能力の持ち主。それが事件の発端に…。



神原亜衣

亮介の同級生。大人っぽくて気丈な美少女。結構プライドは高いが、亮介には気軽に声をかけてきて…。



水沢諒

本編の主人公B。お調子者だがどこか憎めない転校少年。亮介にまとわりつくのは、なにやらワケありで…。



七瀬冴子

正体不明の謎の美少女。亮介が〈狙われている〉のをいち早く警告する。諒とはどうも知り合いらしいが…。



里見十九郎（さとみじゅうくろう）

〈術者〉のひとり。街で偶然亮介と接触し、ガードをかってでる。沈着冷静な参謀型で希沙良のフォロー係。



和泉希沙良（いずみきさら）

十九郎のいとこで、やはり〈術者〉。奔放な性格だが、十九郎には逆らえない。術力はかなり強いが…。



斎伽忍（さいがしのぶ）

十九郎たち〈術者〉一族の総帥。超美形だが、謎も人一倍。事件の全貌を把握しているのは彼だけらしい…。

イラスト／杜　真琴

天使はうまく踊れない

序章　ファーストアクセス

秋も深まる十月末。

亮介の夜は、十一時からはじまる。

ごそごそと机の下からイラストボードをひきずり出し、机の周りの参考書をかきわけて、亮介はほっと息をついた。

部屋は十畳の洋間だ。崎谷家はひとり息子に甘い。テレビからオーディオからレーザーディスクから、高校生には分不相応な高級品が部屋を埋めている。なんたることか冷蔵庫まである。

これは息子を家庭から孤立させようという陰謀に違いない。

実際、一階の居間にいても成績と進路の話しか出ないものだから、亮介は出来るだけ自分の部屋に逃げることにしている。それでも、理解ある父（企業重役、五十二歳）と母（重役夫人、四十三歳）がいつドアを開けて励ましのお言葉をかけてくださるかわからないので、ふた

りが寝静まる十一時までは亮介は机の上に教科書とノートを広げておかねばならないのだった。悪いことに、この部屋には鍵だけはついていないのだ。

（やでやで……）

床に座りこんでボードを明かりにかざし、亮介は宙を仰いだ。

（青春がこんなにつまらなくてええのやろか……）

立ち上がる。背はそんなに高くない。そのうえに可愛らしい顔立ちをしているので、どうしても年より下に見られる。カワイイと言われて喜ぶ男がどこにおるか。

亮介は眼鏡を外して、椅子にかけ、色鉛筆をとった。

ボードには、少女の後ろ姿がぼかした色調で描いてあった。空の色がどうにも上手くはまらなくて、ここ数日これにかかりきりだ。

絵を描くのは、唯一の趣味だった。それなりに前向きな気分に、この時だけはなれるのだ。絵描きになりたい、なんて、親の前ではとても言えないけれど。

（言えないけどね――）

「あ。また暗くなってしまった」

亮介は頭を抱えた。

音をたてないように東向きの窓を開ける。

雲が少ない、いい天気だ。地上が明るいので完璧な星空は期待出来ないが。

わん、わんわん。
北側で、どこかの犬が吠えはじめた。
唸るように。
「？」
住宅街のこの辺では、犬を飼っている家は多い。それが、だんだん唱和しはじめた。
大騒ぎにはならないが、一様に低く唸っているのは妙だ。
（何だ？）
猫でもいるのかと思ったが、吠え声に畏怖する響きがある。なにか違う、と亮介は窓にとりついた。北側に首をねじまげる。
（しまった）
亮介は目を細めた。眼鏡をしていない。おかげで妙なものが見えてしまった。
ぼうっと白く光る、雲のような影。
それは一瞬でふわっと拡散し、その一部は蛍のように亮介の頬をかすめて飛んでいった。
そして、それが最初に見えた所——三軒くらい離れた家の屋根の上——を、ひょいと跳び越した人影があった。
ジョギングでもするような気軽さで屋根の上を駆けぬけて。
（忍者ハットリ君か？）

呆然と亮介は口をあけて、あらぬことを考えた。
シルエットからするに――少年だ。背は高いけれど。
とにかく尋常な事態じゃない。亮介は窓枠にしがみついて、身を乗り出した。
（普通なら落ちて死ぬって――え？）
「……!!」
空気が硬直した。
屋根の上を駆け抜けていた少年が、ぎょっとしたようにこっちを見たのだ。
見られた。目が合った。
遠かったけれど、くっきりとその目鼻立ちまで視野に灼きついて。
きっと相手も。
「――――」
亮介が息を詰めていると、少年はふと立ち止まった。
言葉の届く距離だ。
突然、彼は人好きのする笑みを浮かべて亮介に向かって手を振った。
「やっほーやっほー」
「へっ？」
反応が返せない。

「んじゃねっ」
少年はひらりとジーンズのジャケットをひるがえした。そのまま西の方角へ疾風の如く走り抜けていってしまう。亮介は口をあんぐりあけたまま、それをただ見送った。
（……楽しそうだ……）
ぼけっとそんなことを思ってから、亮介ははっと我に返ってぴしゃりと自分の頬を叩いた。

「もしもし？」
ジーンズのジャケットを放りだしながら、少年はコードをぐいと引っぱった。電話が遠い。
「もしもし！　俺だけど！」
受話器に向かって怒鳴る。が、すぐに相手が留守番電話だということに気づいた。少年はきりきりと歯を鳴らした。
発信音。
「……もしもし。どーせ居留守でしょ。今中野の部屋。んじゃ」
留守電にあたるのも空しいので、目一杯声を抑えた。切る音だけは盛大にかましてやる。
電話を放りだすと、少年は足で冷蔵庫を開けて缶コーヒーを取り出した。ほとんど使われない部屋なのに、冷蔵庫の中身はしっかり整っているあたりが嫌味だ。

「これだから金持ちは……」

二十畳のワンルームマンションをぐるりと見回して、彼は舌打ちした。ぽりぽりと頭をかく。

特に美形というわけではないが、人好きのする顔をしている。日に焼けて、すらりと背が高い。

少し長めの前髪をかきあげた時、足元の電話が鳴った。

「もしもしっ、待たされたっ」

受話器にとりつくなり、そうわめく。

『誰が？』

落ちつきはらった声が戻ってきた。

『誰が待たされたって？　詳しく聞きたいな、こちらとしても』

「あのー……」

『昼過ぎには東京に着くと、そう聞いた気がするけどね。まさかこちらの勘違いではないと思いたいが』

「予定は未定でしょっ」

少年はがあっと吠えた。

『諒――』

電話の相手は、若い男だ。妙に貫禄を感じさせる、透明な声。
『逆方向に乗ったことまでは一般的ミスとして素直に認めるとしても、博多に着くまで気がつかないというのはどう考えても普通じゃないよ』
「うるさいうるさいうるさいっ」
諒、と呼ばれた少年は、ぐしゃぐしゃと髪をかきまわした。
「だからあ、上野から最短距離を走ってきたんじゃないのよっ。誰にだって間違いはあるのだよ。ええい一生の不覚だっ。それより仕事の話をしよう仕事の」
『熱心なんだな』
電話の向こうで彼は軽く笑った。
次の瞬間、声の雰囲気がするりと切り替わる。
『では、仕事だ』
「――――」
諒は黙って目を細めた。
『転校先は吉祥寺の私立高陵高校――明日の八時半には事務室に顔を出すこと。制服は部屋に届いてる』
「イエッサー」
『マークするのは一年A組、崎谷亮介。写真は間に合わなかったが、会えばわかるだろう。感

覚の強い子だからね』
「亮介ね……了解」
　頭の中にその名を叩きこむ。
「かわいい子だといいなあ、ハンサム？」
『八十五点』
「うーん、もうひと声」
『こらこら』
　相手の台詞に微妙な笑みが甦る。
『そういうことだ。連絡を待つ。ただし時間帯を考慮すること』
「どう考慮しろってのよ、この道楽息子」
『何か言ったか？』
「いーえっ。以上了解しましたっ。ではまた」
　つけいる隙を与えず素早く電話を切ると、涼は缶コーヒーのプルトップを歯でこじあけた。窓のブラインドを上げると、月がわずかに欠けた姿で、ぼんやりと見えている。

1　事件は突然降ってくる

（誰にでも平等に朝は来るのだな……）

ふらふらする頭を押さえて、崎谷亮介はぼーっとしたまま中野駅の改札をくぐった。

前夜の屋根上ジョギング少年の謎について思索をめぐらせていたら、完全に寝そびれてしまった。多分、考えても仕方のないことなのだろうが。

学生服のポケットに定期を戻して息をつき、鞄を持ち直して目を上げて、それから亮介はべきっと凍りついた。

「あ、おはよう」

ホームに上がる階段の下で、同じクラスの神原亜衣は、そう言ってにっこり笑った。紺のブレザーがよく似合う。

「お……おはよっ」

か——っと頭に血が上った。呼吸が止まってしまった。なんとか平静を装いつつ……ひきつ

って答える。
「珍しいのね、今日は時間ギリギリ」
「やー……寝覚めが悪くて。亜……じゃない神原さんも」
「あたしのは要するに寝坊です」
「ま、似たようなもんだ……」
亮介が肩をすくめると、亜衣はそれだけでくすくす笑った。
「？　何？」
「……あ、ごめんね。なんか崎谷君、動作がかわいいんだもん」
「か、かわ……」
（こ、これは完全にオトコ扱いされとらんな……）
亮介はひそかにため息をついた。
そもそも亜衣は学年ではちょっとした有名人という大人びた美少女で、男子と気軽に話すタイプでもない。それが何の気まぐれか亮介に対しては屈託なく接してくれるので、少しは期待もしてみたの、だ、が――。
（要するにオトモダチ……）
亮介はのたのたと階段を上りはじめた。白いリボンでまとめた髪を揺らして、亜衣が隣に並ぶ。

「スポーツ大会、どうする？　崎谷君」
「どうするって……種目？」
横を見ると亜衣の笑顔があるというのは、実際かなり幸せかもしれない。まあいっか、と亮介は思い直した。
「サッカーかなあ。バスケもバレーも身長勝負でしょ」
「そんなに低くないでしょ？　あたしよりは高いもの」
「そーゆー問題ではないでしょーに」
「そうなの？」
「神原さんと勝負するわけじゃないでしょー」
亮介は苦笑した。頭が良くて気丈なタイプと思いきや、時々こういう妙に無邪気なところがあるから可愛い。
にしても、この身長百六十三センチは辛い。これでもカルシウム摂取に励んで事態の改善に努めてはいるのだが、どうも両親を見る限り、見通しは明るくない。
（う――む）
ついまた暗くなってしまう。亮介は眼鏡を指で押し上げた。
と。
階段を上りきるところで、突然誰かが下で叫んだ。

「ちょっと！　そこの背の低い学ラン少年！」
「？」
ぐさっとくる言葉だが、果たして自分のことだろう。亮介は亜衣と顔を見合わせ、それから振り向いた。
「そうそうそこの君よ、君だってのに！　ほら『え？』じゃないわよ、ちょっと大急ぎでここまで降りてきて！　早く！　早くってば！」
「――――」
振り向いて亮介は、その言葉の意味を考えるより先に、一瞬相手に見とれてしまった。怒鳴っているのは、ウェーブのかかった髪を背中まで伸ばしたセーラー服の少女だった。この辺では見かけない制服だ。
印象をひと言で言うと、紅蓮の炎。
違和感に錯覚を起こすほどの――美少女。
「なんでもいいから言うとおりにしなさいっ」
やけに迫力がある。通りがかる学生やサラリーマンがじろじろと彼女を見て行く。亮介は一歩下に降りた。
「あの」
言いかけた途端、背中にぞっと冷気が走った。

（やばいっ）

本能の教える危機感。

見えない手に、押された。

「え!?」

亜衣が叫んだ。

完璧にバランスが崩れた。スローモーションの感覚。これはもう——落ちるしかない。

（冗談っ！）

突きとばされた、と言っても多分誰も信じない。ということは亮介が足を踏み外した、ということになる訳で——。

ごろごろごろ、と亮介は階段の最上段から中途の踊り場まで、見事に転がり落ちた。

とっさに右手をかばったものの、なんたってコンクリだ。

「でえ——っ」

頬に地面が当たり、転落が止まった。亮介はほとんどヤケになって呻いた。

（みっともね——っ）

眼鏡がどこかへ吹っとんでしまった。もともと度は入っていないから、不自由はないのだが。

体を起こそうにも、背骨がいうことをきいてくれない。

「おいっ」
「大丈夫か」
サラリーマンのみなさんが声をかけてくださるのと、亜衣が階段を駆け降りてくるのはわかった。
（大丈夫じゃねーってっ）
「大丈夫です」
する、と亮介の首に細い腕がかかって、よいしょ、とその体を引き起こす。
（え？）
かがみこんで亮介を支えてくれたのは（見ようによっては抱きついているようにも見えるが）、先刻のセーラー服少女であった。
「は？」
「あたし知り合いですので、ちゃんと病院につれてきます」
見守る人々に、落ちつきはらってにっこり笑う。笑顔の威力か、人垣はぞろぞろ流れだした。亮介はもう一度、「は？」と繰り返した。
「だから言ったじゃないの！」
目が合うなり怒鳴られた。亮介はぎょっとして身をすくめた。
怒りが美しさに輪をかけて、凄絶になまめかしい。

「す、すみません」
「あたしに謝ってどーすんのよ」
「は、はあ」
「とりあえず、他人を巻き込まなかったのは誉めてあげるわ。さすがにそこまでは鈍くないみたいね。で、どこが痛いの？　背中？　はっきりしなさいよはっきり」
「背骨と膝っ……いててて」
ぐい、と彼女が亮介を抱き起こし、亮介は悲鳴を上げた。
わけがわからないまま、完全に圧倒されている。しかし一方で何か忘れているような気がして、亮介は視線を泳がせた。
（わっ）
――目の前に、亮介の鞄を抱えた亜衣が、ぽつねんとひとり立ち尽くしていた。
ばしっ。
セーラー服少女と亜衣の間に、一瞬だけ鋭い火花が散った。
「崎谷君」
心なしか亜衣の声が冷たい。
「あ、うん」
「あたし、先に行ってるんで」

どん、と鞄を置くと、亜衣はすたすたと階段を上がっていってしまった。ホームに電車が入り、階段を人波が流れて行く。

（え――？）

何も言えずに亜衣の背を見送って、亮介はぽかんと口を開けた。

（な、なんで……）

「動かないで！」

ぴしゃりと少女が言った。

「？」

彼女の手先に目をやって亮介は息を止めた。

したたかに打ちつけた左の膝の上に片手が置かれている。その手から、透明な気がたちのぼっているのが見えた。

かげろうに似ている。

錯覚かとも思ったが、ほとんど同時にすっと痛みがひいていき、亮介は唖然として相手の顔を見た。

少女はちらっと目を上げて、軽くウィンクした。

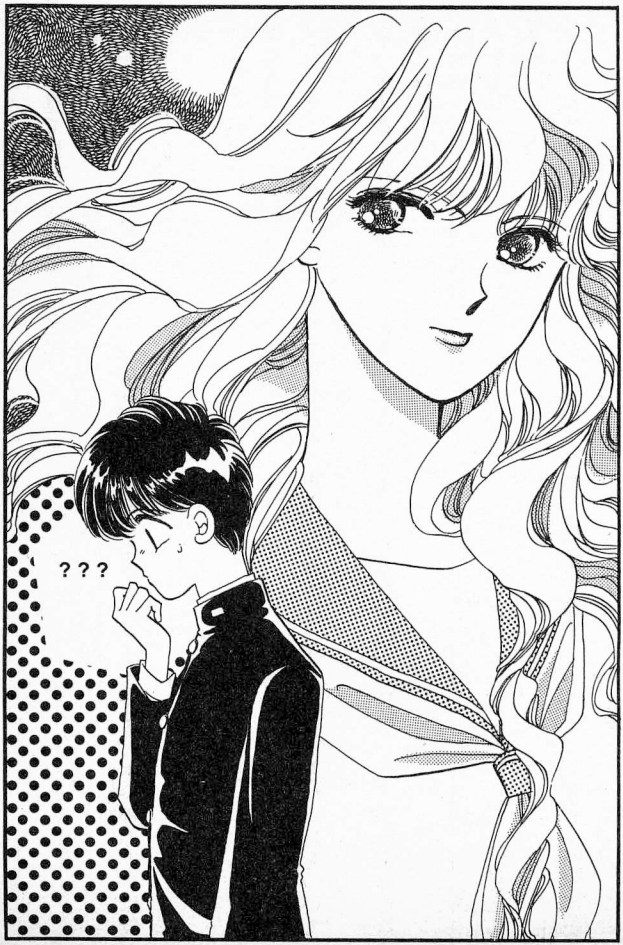
「親切でしょ、あたしって？」

「へ!?」

「ほら、もう立てるわよ。いつまで地べたに座ってる気？　通行の邪魔よ邪魔」
促されるままに立ち上がると、背中といい脚といい、すっかり痛みはぬけて、傷も見つからない。亮介は目を見張った。
「あの……」
立ち上がってみたら、目の高さで負けていた。思わず口ごもってしまう。
「気にしないで。それってあたしの特殊技能なの」
さらりと彼女は言い、脇に置いてあった黒い学生鞄を取った。
「特殊技能……？」
「キミだって他人事じゃないでしょ。ま、世の中にはいろんな人間がいるってことよ。ああいかん遅れてしまう。どうせまた会えると思うわ。事情はね、そのうち嫌でもわかることだしね」
「……？」
何がなんだかさっぱりわからない。
艶めいた唇の両端をつりあげ、彼女は花のような微笑を作った。
「あたしはね、『冴子』。憶えといて」
発車のベルが頭の上を渡っていく。「冴子」は腕の時計に目をやり、ぱたぱたとスカートの埃を払った。
「あの」

今にも駆け出しかねない様子に、慌てて亮介は一歩前に出た。
「あ、そうそう、ひとつだけ言っとくけど」
遮るように冴子が顔を上げた。
瞳の中をのぞきこむようにして。
「あなた、狙われてるわよ。気をつけなさいね」
「え!?」
「じゃね」
ひらりと片手を振って、身を翻す。
「待って！」
間髪入れず、呼び止めた。振り向いてくれないかとも思ったが、冴子は階段を降りたところで、ふと、立ち止まった。
「あの」
亮介は息を呑みこんだ。
「――よくわかんないけど、どうもありがとう」
「――――」
きょとん、として冴子は目を見開いた。少しの間があって。
それから、破裂するように笑いだした。

「か、かわいい……壮絶にかわいい……」
ほとんど発作的に笑っている。亮介はやや憮然とした。
「あなた気に入ったわ。またね、亮介ちゃん」
爆笑しながらもう一度手を振り、冴子は東西線のホームへ走って行った。
(かわいいったってねー……あれ?)
亜衣が置いていった鞄を拾い上げ、亮介は何か微妙なズレを感じて動きを止めた。
愕然とした。
またね、亮介ちゃん。
冴子の最後のひと言。
崎谷、という名字なら、亜衣との会話でわかったかも知れないし鞄の隅にも小さく書いてある。が、亮介、のほうは——。
(初めから、俺のこと知ってた……?)
冴子の消えた通路に目をやる。
(特殊技能って……? 狙われてるって……?)
わからないことだらけだ。昨夜といい今朝といい、どうかしてる。
(ほんとにどうかしてる——)
ベルが鳴った。ラッシュのざわめきが耳朶を打つ。



「げっ！」

時計を見て亮介は悲鳴を上げた。

「じょおっだん！　何だよそれっ」

足元に転がっていた眼鏡をひっつかみ、ホームの電車に向けて突進する。中央線のドアは無情にも閉まりかけていた。

電車通学のプロをなめてはいけない。

とはいえ、いつになく強行手段で乗り込んだ車両で、亮介はさすがに深々とため息をついていた。

車内が微妙に霞みがかって見える。やれやれと思いながら眼鏡をかけ直した。別に眼はどこも悪くはないのだが。

亮介には、昔から厄介な感覚がそなわっている。これがまた何の役にもたたない、百害あって一利なしの見本のような奴で、平たく言えば、亮介には「見えるはずのないもの」が見えてしまうのだった。

いないはずの人間、あるはずのない景色。また、周囲の光景がダブって見えたり、空気に色がついていたり、人の体がぼうっと光っていたりすることもある。時も場所も選ばず、とこと

ん節操がないので、放っておくと現実と混乱して迷惑極まりない。

人をとりまく気が見える程度ならまだいいが、この世のものとも思えない不気味なモノが試験中にいきなり目の前に現れたりすると、やはり困る。

そこで自衛手段として選んだのが、度の入っていない眼鏡だった。不思議なことに、何か人工物が間にあると、そういった幻はたいてい見えなくなってしまう。ガラス一枚通すだけで違うのだ。友達や両親には、軽い近視だということにしてある。

ただ、この眼鏡も完璧という訳ではなくて、幻の力のほうが強いと、役に立たないことがある。そこまで幻の影響を受けると、めまいはするし吐き気はするし、すっかり体調が狂ってしまう。本当に迷惑以外の何者でもない。

（あ、いや……一度だけお得な時もあったか）

亮介は小さく舌を出した。

ちょうどこんなふうに朝の電車に乗っていた時、とんでもなく不気味な奴にじっと見つめられたことがあった。どう不気味だったかと言うと、そいつは胴体なしの顔だけだったのだ。しかも網棚の上から恨みがましく見下ろされた日には、その手のことに慣れている亮介もつくづく嫌になった。

まあその顔のことはどうでもいい。問題はそれが見えてしまったあとである。教室に入るまでは亮介の神経もなんとかもったのだが、席に着いた途端、ひどいめまいに襲われて身動きと

れなくなってしまった。

この状態になったら、時間の経過を待つしかない。治しようがないのだ。机にへたりこんで、亮介はひたすら耐えた。がんがんと耳鳴りがした。

「崎谷君?」

誰かが呼んだ気がした。声が遠くに聞こえる。

「大丈夫?」

目を上げたら、ぐるりと世界が回った。ぺたんと机に顔をつけてそれをやりすごす。

「めまっちゃって……」

ぼそぼそと、それだけ言った。

「保健室行こう、崎谷君」

「あ、いい……あのね、三分くらいで収まるから」

「本当? なら三分待つけど、それでも治らなかったら力ずくで連れて行くからね」

「ふえ?」

思わず片目を開けて、そろそろと相手を見た。

前の席に横座りになって、首をかしげるようにしてのぞきこんでいたのが——神原亜衣だった。

確か入学して間もないころのことで……。

「きちじょおじーきちじょおじー」
アナウンスとともにドアが開いた。亮介ははたと現実に立ち返った。時間がない。
「もうっ、今まで無遅刻無欠席なのにっ」
ホームに飛び出して、ダッシュする。ここから走り通して、一時間目にギリギリだ。
どうもこのごろついていない。なんで俺ばっかし、と苦しまぎれに亮介は考えた。

しばらくブレザーの制服ばかり着ていたので、詰め襟をぴしりと閉めたら何かとても新鮮な気がした。が、サイズは合っているはずなのに心なしか窮屈なのは何故であろうか。
「また育っちまったかなー……成長期だからな」
一年A組のドアの前で襟元を気にしながら、水沢諒はひとりごちた。
「忍にサイズ申請しなおさねえと……うむむ、まあいいか、優等生はやめやめ」
面倒臭いので上着のボタンは全部外すことにして、うっとうしい前髪をかきあげる。
「うーん、なんてワイルドなのかしら僕ってば」
不敵に笑って、おもむろにドアを開けた。
しん、とした教室の生徒全員と、教壇の教師の視線が、いっせいに諒に向けられた。
「あっ、どうもっ、本日からお世話になります……」

「水沢か」
担任の国語教師は名簿をめくると、つまらなそうに言う。
「水沢諒、でございますー。季節外れの転校生ではありますが、どうぞよしなに」
大袈裟にしなを作ると、教室に小さく笑いが沸いた。生来の芸達者なのだ。
「職員室に来なかったじゃないか。事務室で言われなかったか？」
「はあ、校内で迷いまして」
「……まあいい。座んなさい、授業はじめるぞ」
「では早速」
諒が空席を探さんと教室を見渡すと、間を置かずに後ろのドアが勢いよく開いた。
「すみませんっ」
小さい体が飛び込んでくる。
「崎谷か？　遅いぞ」
「あの、駅で階段から落ちたんです」
（崎谷？）
諒の左目がすっと細められた。
（崎谷亮介？）
鋭い視線を素早く投げて、諒は胸に苦いものを感じた。

知っている顔、だったのだ。

「え!?」

転校生、とやらの顔をまじまじと見つめて、亮介はとんきょうな声をあげた。

忘れもしない昨夜の屋根上ランニング少年――。

似てる、どころじゃない。そのものだ。距離はあったが、あれだけの強烈な印象を忘れるはずがない。

（な……）

あまりのことに言葉が続かず、亮介は立ち尽くしてしまった。相手はきょとんとした風情で亮介を見返している。

「どーした崎谷、早く席着け。水沢もあそこの席が空いとるぞ」

教師の間のびした声。亮介は大きく息を吸いこんだ。

「かっ、かわいいっ！　カンペキあたしの好みのタイプ！」

「――へっ？」

いきなりの場違いな台詞に、言いかけた言葉をもろにくじかれる。

「ふつつか者ですけどどーぞよろしく。あ、私こういう者で」

諒はくるりと背を向け、黒板に白のチョークでみずさわりょうと大書きした。
「はあ？」
のたくった文字を眺めて絶句する。何を言えばいいのだ。
「わかったわかった、ふざけとらんで座れ」
「先生、僕の席、崎谷君の近くがいいなあ」
「あーのーなー……」
一部の女子がなにやら騒がしい。「素敵」だの「危ない」だの……何か勘違いしてはいないか？
教室のいちばん後ろに突っ立ったままの亮介に目をとめて、諒がぱたぱたと駆け寄ってきた。
「崎谷君っ」
がしっと肩を摑まれる。身長差約二十センチという厳しい現実。
「崎谷君、僕たち、清い友愛をつらぬこうねっ」
おお、と教室がどよめいた。
（おいおいおい……）
力が抜けてしまう。亮介は混乱したまま亜衣の席にちらりと視線を向けた。
亜衣はただ呆然としてこちらを眺めていた。

2　正体不明の転校少年

諒というのは先天性のパフォーマンス人間らしい。
転校初日が終了するころには完全にクラスにとけこんで、ちょっとした人気者になり果てていた。亮介には逆立ちしたって出来ない芸当だ。
「亮介っ」
犬のように寄ってきた。気がついたら名前を呼び捨てにされている。亮介は机にひじをついて、上目遣いに見上げてやった。
「何か用？」
「あらやだよー。つれないじゃないのおまえさん」
「あのね……」
ついていけない。諒はにかっと罪のない笑顔を見せた。
「学校案内してっ」

「俺が？」
「クラブの見学したいんだよねー。亮介帰宅部だしさ、いいじゃんいいじゃんいいじゃん」
「クラスの人間の部活まで調べちゃったわけ？」
「ふはははは。まいったかね明智君」
「……別にいいけどね。暇だしね。でもさあ、俺なんかより面白い奴なら他にたくさんいるんじゃないの？」
「そんな事ないでしょー」
諒が少し真顔になり、胸を張る。
「なんたってひと目惚れだもん」
「あのさあ、その言い方、変に誤解生んでるんだよね。やめてくんない？」
「誤解するほうが悪いね！」
きっぱりと言いきる。
（これだもんね……）
亮介は手早く荷物をまとめ、席を立った。
「まあ、俺もひとつ訊きたいことがあるんだけど……」
「ぬふふふふ」
諒は不気味なふくみ笑いをした。

「言いたいことは良くわかる」
「え？」
「あれでしょ、未知との遭遇」
「……！」
かっとなった。諒の鼻先に人差し指をつきつける。
「おまえ、おまえわかってて今まで知らん顔して……！」
「まあまあまあ」
放課後のにぎやかな教室に視線を走らせ、諒は勝手に亮介の鞄を持って歩き出した。
「おいっ」
慌てて追いかける。諒は廊下で待っていた。
「だってさあ、亮介だって今まで訊こうとしなかったじゃん」
「訊くタイミングを逃しただけだろっ」
「それは俺のせいじゃないもん」
悪びれない奴だ。亮介は低く呻いた。
「行き先、体育館でよろしく」
「……」
鞄が敵の手中にあるからには仕方ない。亮介は諒に並んで歩きだした。

「で？」
「うん、つまりあれって、俺の趣味なんだよね」
しれっとして諒が言う。
「屋根の上走るのが!?」
「いやあの、夜中の散歩が。場所については深く考えないでくださいます？　俺そのへん節操ないんだわ。走れる所ならどこでも走りますからして」
「走れる所の定義づけがすでに常人と違わないか？」
「慣れちゃえば電柱登ったり塀越えたりも楽しいもんだけどなー」
「どういう運動神経をしているんだ……」
「どういうってそりゃ、天才的としか言いようがないでしょ」
「……」
「だいたい考えてみていただけます？　窓を開けたら、晴れているなあ星がきれいだなあ月が青いなあ感動だなあっつって、よーしちょいと走ってみよう、という、この気持ち、わかってほしいんだなあ」
「わかるかそんなもん」
こういう奴とは話が合わない。亮介は追及するのを諦めた。
「で、水沢は……」

「諒、のほうがいいなあ」
言いかけた言葉を諒が力いっぱい訂正する。
「どう呼ぼうが自由だろ」
「……こんなにいい名前なのに……僕、拗ねて泣くからね」
「勝手に泣けば」
「うるうるうる」
「……」

体育館はバスケ部と体操部が半々に使っていた。境界にネットのカーテンが張られている。
「へえ、体操部って女子ばっかりなんだ。そりゃ美しいねえ良いねえ」
「もともと人数が少ない部だから。……おまえ、バスケ部見に来たんじゃなかった？」
「美しいものを愛でるのは人の常」
手すりにもたれて諒が言い放つ。
確かに亮介も体操部の練習風景に見入っていたから反論は出来ない。
「しかしあれだねえ、やっぱ金持ちの学校は違うねえ。俺が前にいた所、公立だったけど、体育館にこんな客席なんかついてなかったもんねえ。こんな立派な体育館は学園ドラマでしか存

在しないと思ってたんだけどねえ……ん？」

広い体育館を見渡す観覧席の最前列に陣取って勝手なことを言っていた諒は、亮介の反応がないのに気づいて言葉を切った。

平均台の上で前転の練習をしているのは、誰あろう神原亜衣である。

レオタードの上にTシャツを着て、すそを腰のところで縛っている。細身の背中がやわらかく伸びて、凛とした横顔は毅然と宙を見つめる。

単に大人びた顔つきをしているというだけではなく、全身に風格が漂っているのだ。亮介は手すりから身を乗り出して、ほれぼれとその姿を眺めた。

美人でスタイルが良くて体操部のホープとなったら、これは男どもが騒いでも仕方がない。

「ありゃ同じクラスの神原さんじゃない。へえーっ」

諒が感心した様子で呟いた。

（……こいつしっかりチェック入れてやがる……）

亮介はむっとして諒を横目で睨みつけた。

「いいよねえ、なんか凛々しくて。まあ結構気の強そうな印象あるけど、女らしいし頭いいし。成績優秀なんでしょ？」

「おまえそんなことまでもう調べてんの!?」

「ふはははは」

「ふたりしてどうしたの？　見学？」
割り込むように、真下から透明な声が上がってきた。
首からタオルをかけて、亜衣がこちらを見上げている。亮介は慌てて手すりにしがみついた。
「あ、うん、水沢がバスケ部の見学をね……」
「いや、僕としては運動部ならどこでも構わないんだけどね。なんだったら体操部に入ろうかなあ僕」
「うちだったら、常時入部歓迎だけど。特に男子なら」
「駄目駄目駄目っ。こんな奴が入ったら部の品格が落ちるっ」
「それあんまりじゃない、亮介君？　キミは何か誤解をしているっ」
怒鳴り合うふたりは、妙に息が合っていて可笑しい。肩をすくめて亜衣はくすくす笑った。
（あ、よかった、機嫌直ってる……）
朝の一件があったもので、亮介はほっと胸をなでおろした。諒のペースに巻き込まれているうちに、うやむやになってしまったらしい。とりあえず、その点では諒に感謝してもいいかも知れない。
「だいたいさあ、亮介ってなんで部活やってないわけ？　花の高校生活エンジョイしないでさあ。ねえ、神原さんもそう思わない？」

「あ、思う思う……もったいないよね」
「え……」
「なんだったらさあ、ふたりして体操部に入らないかい亮介君。ともに青春の汗を流そうではありませんか」
「え!?　だっ駄目だってばっ」
話が変な方向に進みだした。亮介は慌てふためいて言い訳を捜した。
「運動駄目なんだ。ほらっ、俺、いきなりめまっちゃうから……」
「あ……そういえばそうだっけ」
亜衣が残念そうに小首をかしげた。
「何それ?」
諒が柄になく真剣な——強い目を向ける。
「体、弱かったりするんだ?」
「あ、いやその……」
亮介は口ごもった。事情を素直に話しても、他人がそれを信じる確率は極めて低い。やたら珍しがられるか、奇人扱いされて笑われるのがおちだ。
「一応、健康体なんだけど……時々、めまい起こすんだよ。貧血になりやすいみたいで」
「……へえ?」

「ねえ崎谷君、今朝のももしかして、いつもの発作だったりした？」
亜衣が思い出したように眉をひそめて、突然そう訊いた。
「ごめんなさい、よく考えたらあたし、悪いことしちゃった……」
「え？　いやあの、あの時は――」
「今朝？」
焦りまくる亮介の脇から、重ねて諒が尋ねる。
「今朝ってどうしたの、亮介君」
「あ、だから……先生にも言っただろ、階段から落ちたんだよ」
あまり楽しくもない話題なので、亮介は声を低めた。諒は呆れたように息をついて、亮介を見つめた。
「え、何あれ、マジだったの!?　俺てっきり、言い訳にしちゃダイナミックだなあとか思っちゃってたよ!?」
「すみませんね、マジだよ。でもさ、運が良かったみたいで、全然怪我とかないし、あの、神原さんも気にしないで……」
「怪我がなかったのは、本当に良かったけど」
亜衣の瞳に、控えめな笑みが戻る。
「そう、だいたい今朝は水沢君が転校してきた騒ぎで、そのことを確かめるタイミングを外し

ちゃったのよね」

「騒ぎ？」

諒がすかさず声をあげた。

「そりゃ不本意だなあ。僕は平和な小市民らしく善良に日々を過ごしているつもりだけどなあ」

「……おまえ、もう少し自分を把握したほうがいいと思う」

うんざりした表情で、亮介が言い返す。

笑おうとした亜衣は、視界の端に現れた人影に気づいて、ふっと笑みを内にしまいこんだ。

「神原」

「――――」

亜衣が振り向いたので、亮介と諒も相手に目をやることになった。

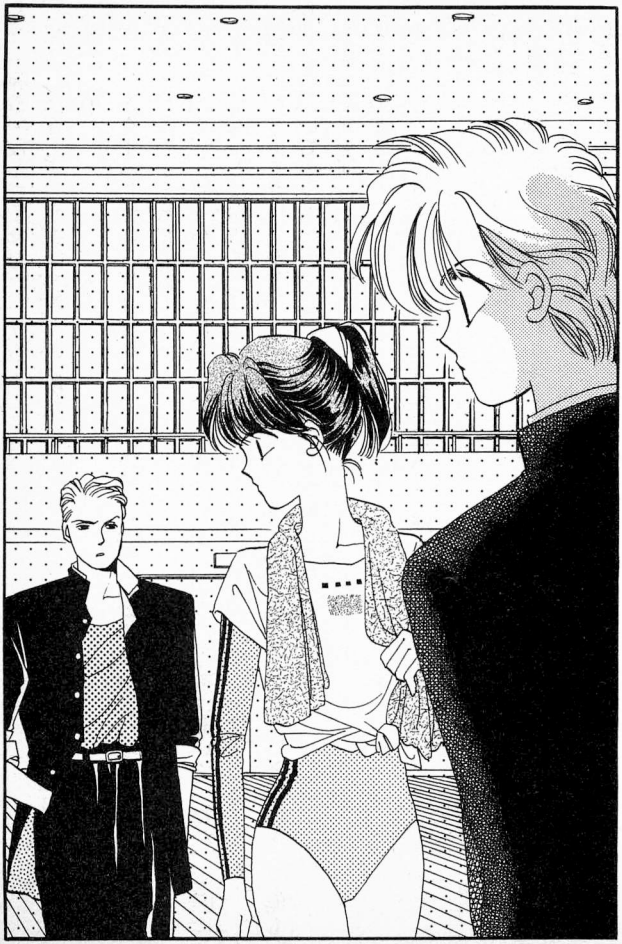
長身で、がっちりとした体つきの、二年生。

「うわ、時代錯誤……」

ボソッと諒が呟く。上着の下に校則違反の赤いTシャツを着ただけで、不良を気取っているつもりらしい。だらしなさを男らしさと勘違いしているような輩だ。

「何だよ、そいつらは？」

亜衣のすぐ脇まで来て、顎をしゃくる。



「今、練習中なんですけど」
問いには答えず、亜衣は冷然と言い放った。
「誰だよ？」
ぼけっと見下ろしている亮介をひじで小突いて、諒がこっそり尋ねる。
「体育委員長の……宮倉先輩」
小声で答えた。前々から、宮倉が亜衣につきまとっているという噂は聞いていたが、実際に目の前に現れたのは初めてだ。亮介ははらはらする思いで亜衣の反応を見守った。
「俺とはつきあえないとか言っといて、こいつらとは随分楽しそうだったじゃないか……俺も多少は見逃してやってたが、ものには限度ってもんがある」
宮倉は長身を利して、強圧的に亜衣を見下ろした。
「どういう理屈だ」
呆れかえって諒が呟く。ギッ、と宮倉が視線を上げた。
「てめえ――」
「いいかげんにしてくれない」
宮倉の台詞に、そう冷ややかにかぶさったのは亜衣の声である。
「生憎だけど、そんなに暇じゃないのよね」
感情を抑えた言い方は、見事なほどに凄みが違う。亮介と諒は呆気にとられた。

「それは俺も同じだろ。いいかげん、意地張るのもやめろって」
「馬鹿にしてんじゃないよっ！」
断ち切るような勢いで亜衣が一喝した。亮介はビビった。
「出てってもらえます？　練習の邪魔ですから」
「神原――」
普通ここまで言われれば少しは傷つきそうなものだが、宮倉は物わかりの悪い子供を見るような目を亜衣に向けると、軽く鼻で笑った。凄まじい自信家なのだろう。自信家も突き詰めれば馬鹿に通じるものらしい、と諒は考えた。
「後悔するぞ、いずれ」
「そんなの先輩に決めてもらわなくても結構です」
「そのうちわかる」
宮倉は肩をいからせて宣告した。
亜衣は無言でついと目をそらした。触れたら凍傷を起こしそうな冷酷さだ。
「女王様ぶりやがって」
宮倉の捨て台詞は、かなり的を射ていた。
のしのしと体育館を出て行く背を見送って、諒は感心してひゅうと口笛を鳴らした。
「凄いな、あの台詞のセンス。すべて型どおり。大映テレビ見て研究したのかな？　素晴らし

いですね」
「自分に酔ってるのよ」
亜衣はにべもない。
「失礼にも程があるじゃない？　人を何だと思ってるんだか」
「それだけ神原さんを熱愛しているってことかねえ」
「冗談じゃな……あ」
軽口を叩く諒の脇で身を縮めている亮介に気づいて、亜衣は言葉を切った。
「お？」
諒も亮介のほうをくるりと振り向く。
「どした？」
「――え？　え!?　あ、いやいや……」
亮介は慌てて両手を振った。
（……び、びっくりした……）
女の子相手に怖がっているようでは困りものだが、気迫で負けてしまった。
「あ、やだ……気にしないでね」
亜衣は困ったような微笑を浮かべた。やけに可愛い。
「集合――」

マットの向こうで二年生の部長が手を叩いている。
「集合かかっちゃった。よかったら適当に見学してて、ね」
小さく片手を振ると、亜衣は小走りで練習に戻っていった。
「……あの人も謎のお方だなー」
亮介のほうを見て、諒が意味ありげに笑った。
ばんばん、と平手で亮介の背中を叩く。
「ま、頑張りたまえ亮介君」
「？　……へ!?」
一瞬の空白。亮介はばっと口許を押さえた。かっと赤くなったことに気づいていた。
「みっ……水沢、おまえ……」
「諒、ですって」
諒はひらひらと手を振る。
「亮介素直だからさ、見てりゃわかるっての。よく今までウワサにならなかったね」
「るさいなっ」
真っ赤になって言い返す。
「あら、あたくし応援してさしあげてよ」
「いらんいらん放っとけっ」

頭ごなしに断って、亮介は背を向けた。
あれ、と思った。
諒を見ていて、思い出したことがある——。
「なんだよー、恋愛はパーッとやろうよ亮介君」
明るさ全開で諒がたたみかけてくる。亮介は黙って振り向き、鞄を取った。
「悪いけど、俺、先に帰る」
「————」
不意をつかれたように、諒が口をつぐんだ。
「……あ、そう？　いいけど……。無理につきあわせて、ごめんな」
「いや、別に……」
諒がすんなり頷いたので、亮介は少し違和感を覚えた。もっとしつこく引きとめるかと思っていた。

あれは中学二年の時だった。
亮介の感覚が異常に鋭くなりはじめたころで、とにかく精神的に疲れたし、今よりずっと引っ込み思案になっていた。

なにせ、両親は頭から信じてくれないし、成績は下がるし、教師は型どおりの叱咤激励しかしてくれないし——。

人間関係なんか面倒臭くて、どうでも良かった。

そんな時、ただひとり、亮介に正面から手を差しのべた奴がいて——今思えば、どことなく諒に似ていた。

面倒見がよくて人望があって、クラスでも中心的な人物で。

気のきいた冗談が上手かった。一緒にいれば楽しかったから、友達も多かったし、女の子にも人気があった。彼のそばは確かに居心地が良かった。自信を持て、と、よく言っていた。

「亮介みたいな奴、俺は大好きだもん」

五十嵐、という名だった。彼はそう言った。

「俺と亮介は全然違うだろ。亮介は俺の知らない事、たくさん知ってるし、だから面白いんだろ、話してても。全然同じ人間相手じゃ、いくらつきあったってお互い進歩がないじゃん？」

おまえはおまえだ、自分を変える必要はない、と認められるのは本当に……本当に救いだった。とても楽になれた。

だから、誰よりも信じた。

助けてほしかった。彼ならなんとかするのではないか、と期待した。

勿論、彼が幻を消す力を持っているはずもなかったけれど——。

3　果たしてそこに理解は生まれたのか？

亮介の部屋の時計は、十一時を三十分ほどまわったところである。
亮介は緑の色鉛筆を放り出して、深々とため息をついた。
未完成ではあるが、この絵にはもう、これ以上手を入れられないのだ。何か足りないのだが、何が足りないのかわからない。力不足なのだから、どうしようもない。
（ああ、やだやだ……）
情けなくなるのは、こんな時だ。
亮介は未練がましく絵を眺めるのをやめて、ビニールの袋にイラストボードをしまいこんだ。用心深く、本棚の奥に差し込む。
（画材、もう残っとらんなー）
今度買ってこよう、と呟いて部屋の真ん中に座りこむ。暇になってしまった。勉強、なんてこの期に及んでする気にはなれないし。

花の高校生活これでいいのか、なんて、諒に言われるまでもなくわかってる。クラブに入っていないとはいえ、予備校に行ったりする訳でもないし、デートなんて勿論しないし。

クラスに友達はいるけれど、その場でいろいろ話をする程度で、一緒に映画を見に行ったりはしない。

体が弱い、というのを言い訳にして、高校に入って以来、ずっとそんなふうにしてきた。それなりの大学に行くのが当然と思っている両親のために、それなりの成績はとるようにして。だけど、苦しい、とかつまらない、なんて誰にも言いたくなかった。つまらなくなさそうに毎日を送っている、つもりなのに。

「余計なお世話、だよな……」

口に出したら、嘘っぽく聞こえた。言うんじゃなかった。

マンガでも読むか、と本棚に目を上げた時。

こんこん、と窓を叩かれた。

ぎょっとして亮介は振り向いた。音のついた幻は初めてだ。慌てて眼鏡をかける。

東向きの窓が、もう一度音をたてた。

腕が一本、下から伸びていた。ノックして、少し間をおいて、今度はぱっと手を開いてひらひらと横に振る。

(!?)

人を馬鹿にしたような動きに、嫌な予感が胸を走った。

（も、もしや……）

床に膝をついたままで動かずにいたら、その腕は勝手に窓に貼りついて、がらがらと横に開いてしまった。それに続き、ひょいと、片手懸垂の要領で上体を引き上げた奴がいる。

「おばんですー」

悪びれもせず、諒はにっこりと笑った。

「……」

とっさに言うべき言葉が見つからない。

「おっヒマなーら、呼んでねっ。入っていい？」

「お、お、おまえ……！」

「しーしーしー、深夜よ今って、亮介ちゃん」

「みーずーさーわー……」

思わず言われたとおりに声をひそめて、亮介は立ち上がった。諒は器用に窓枠を乗り越え、腰掛けてスニーカーを脱いでいる。いたずらっぽくウィンクする姿が、やけに場慣れしていた。

「やっほー。月があんまり青いからー、遠回りしてきちゃった」

「な、な、な……」

（やっぱり忍者ハットリ君だ……）

亮介の常識の範囲内では、どうしたら二階の窓から人の部屋に入ってこれるのか、想像もつかない。きっと神経が並の人間と違うのだ。いろんな意味で。

「いい部屋だなー。これひとりで使ってんの？　もしかしてひとりっ子？　やだねーすっかり愛されちゃってるじゃん。物質面ではだけど」

いいとも言っていないのに、勝手に諒は入り込んで、勝手なことを言っている。亮介はそそくさと窓を閉めた。

「なんだよおまえっ。いつもこんな事してんのかよっ」

「してないよ、俺。俺だって相手選びますよ」

「え……選ばれる相手のことも少しは考えろって……」

「おや、忙しかったりした？　亮介君」

上目遣いに、しれっとそう言ってのける。亮介はぐっと言葉に詰まった。

（……やな奴――）

すべてお見通し、のような顔をする奴が、亮介はいちばん苦手だ。

諒はブルゾンのポケットから缶ビールを一本、取り出した。ほら、という感じで無言で差し出す。

「何も手ぶらで来るほど野暮じゃないってね」

「……未成年……」
「なんだよ、まさか飲んだことないとか言わないでしょ？」
「コンパでは飲まされたけどね……だから未成年ってば」
「馬鹿者、十五っつったら、昔は元服する年ですぜ」
両親に見つかったら大変だ。亮介は嘆息した。諒はポケットからもう一本アルミ缶を取り出し、遠慮なく床に座りこんだ。
ここまで図々しいと、追い出す気にもならない。変かも知れないが、追い出そうという気になれなかった。
（ま、ちょうど暇だし……）
ほとんど諦めの心境だ。亮介も床に腰を下ろした。諒はぐるりと部屋を見回していた。
「すげー部屋……。冷蔵庫までありやんの。俺、ここで寝泊まりしようかなー」
「宿なしかよ、おまえ」
「うん、宿なし。いつも新宿駅で寝てんの」
笑いもせずに、諒がポツリと言う。変に真実味があって、亮介は思わずその顔を見つめてしまった。
「嘘です」
缶をひょいとかざして、諒は肩をすくめた。

「なんだよバカ」
「うん、でも似たようなもんだからさ」
プルトップを歯で器用にこじあける。そういえば、諒のことは何も知らないのだ、と亮介は気づいた。どういう都合でこんな時期に転校してきたのかとか、そんなことは、全部冗談でごまかされたままでクラスの誰もが知らないのではなかったか？
「乾杯」
開けてもいない亮介の缶に、べん、と自分の缶を押し当てる。
「あ、うん」
何か悪いような気がして、亮介は仕方なくプルトップを上げた。よく冷えている。全部は飲めないだろうな、と思いつつ、ついロをつけてしまった。——飲めない、と思われるのもシャクではないか。
ひとロで半分は飲んだ、というノリで諒が缶を下ろし、にっと笑った。人なつっこいのだが、かすかに照れを含んだような笑い方をする。そんなことにも、亮介は初めて気づいた。
「何が、似たようなもんだって？」
訊きにくかったが、言わないと話が続かない。
「うん。だからさ、家がないんだよ」
諒は笑ったまま、あっさりと答えた。

「俺の実家、広島だったんだけどさ。んで、親と、弟と妹がひとりずついたんだけどさ」
話が、過去形だ。亮介は缶を床に置いた。
諒は亮介の表情に目をとめて、困ったように目を伏せた。
「まあその、家が、焼けましてね」
「……」
諒の笑顔は崩れない。が、それは他に表情を作りようがなくて、仕方なく浮かべている笑みに見えた。
「家の近所に祖父ちゃんの家があって、まあ今のところじいちゃんもばあちゃんも健在なんで、妹はそこに世話になってんだけどさ、俺としては、水沢家背負って立たなきゃならんもんで……東京に、親切な知り合いもいたんだな、これが」
「……」
「ま、そんなに気軽に言いふらせる話でもないわな」
亮介の思いを読んだように、諒がそう言う。
「……じゃ、今どこに住んでんだよ」
「今？　その知り合いが世話してくれた部屋。なかなか上等な部屋だよ、いやホント」
「――――」
でも、と諒が続けるのを亮介は待った。でも、居心地は今ひとつでさ。――

諒はビールをひと口ふくんで、おどけるように目をまるくしてみせた。
「俺って結構ラッキーなほうだからさ」
「……うん」
笑みを返す訳にもいかなくて、亮介は下を向いた。
（こいつ、前向きだ……）
自分との、決定的な違い。
（こいつ果てしなく前向きで楽観的で……能天気で図々しくて……だから）
出来るだけ自然に、と思いながら顔を上げた。
「――たまにはさ、泊まってってもいいぜ。親には内緒だけど……おまえ、窓から出入り出来るし……」
「……」
諒は一瞬の間をおいて、それから目を細めてえへへと笑った。
「そだな。うん。そうする」
「たまにはだからな」
「うん。わかってる」
あんまり嬉しそうに無邪気に頷くので、つい意地でクギを刺したが、ほとんど意味がなかった。子供の会話のようだ。

「あのさ、あのさ、俺の家、犬も一匹飼ってたのな」
ずい、と諒が膝を寄せてきた。案外酒に弱いのかもしれない。
「うん」
「クロっつってさ、火事になるちょっと前に寿命で死んじゃったんだけどさ、亮介って、そいつにそっくりなんだよね」
「……犬だろ？」
「イメージイメージ」
「だって、犬だろ？」
「だからイメージって……。かわいいくせにさ、キバってんの」
「なあんだよー」
けたけたと諒は笑った。
嬉しくないけど、腹は立たない。
「いいじゃんいいじゃん、それって長所だよ、亮介の」
「そんなの勝手に決めるなよっ」
「天上天下唯我独尊なのだよ」
「ばかやろ……」
「でも、だからさ、だからだな、亮介を見たら、なんかやたら懐かしかった」


KURO
KURO
KURO
KURO

しみじみと、缶を見つめて、諒がそう言った。
「ひと目惚れとか言ってたでしょ。そういうことでした」
「……へえ」
「へへ」
勢いよく缶を飲み干してしまって、小さく笑う。
「俺ってこういうノリで、能天気だからさ、亮介って俺みたいな奴嫌いだろうなと思ったりしたけど、俺とにかく話がしたくてさ……一回くらいちゃんと話をしたくてさ、強引つーか勝手っつーか、なんか……ごめんな」
「な……バカ」
亮介は手の中の缶を所在なくもてあそんで、困り果てた。予想外のことがいろいろ重なって、何を言えばいいのか——。
仕方なくて、ぐいと飲んだ。
苦いだけでろくに味もわからなかった。諒が感心して小さく口笛を吹き、「なかなかやりますねえ」と言った。
「なんのこれしきっ」
意地を張ったが、それからはえらく饒舌になった気がする。
家族構成とか、好きな歌手とかテレビとか最近読んだ本とかマンガとか、クラスにこんな奴

がいるとか先生はどんな奴だとか……そんな話ばかり飽きもせずにしていた。
「……亮介は絵が上手いんだろ？」
ポロッと諒がそう訊いた。亮介はぎょっとした。
「う、上手くねーよっ」
「神原さんに聞いたもんね。美術の先生に誉められたんだろ？　絵の勉強しろって言われたとかさ」
「な、なんで神原さんにそんなこと聞いてんだよ――」
「神原さん、亮介のこと詳しいからね」
意味ありげににたにた笑う。
「おまえの絵、いい絵だって言ってたよん」
「……」
嬉しいような情けないような……。亮介は顔じゅう真っ赤になった。美術の授業なんか、選択するんじゃなかった。
「――ばかばかッ」
「怒ることないっしょー。なあ、俺も亮介の絵、見たいなー」
「駄目っ」
「駄目じゃないっしょー」

「駄目っつったら駄目っ」
「駄目っつっても見るっ」
「――――」
押し問答になると、諒は強い。真摯な瞳で、真正面から迫ってくるのだからたちが悪い。
亮介はむっと口をつぐんだ。
「……そのうちな」
「そのうちっていつだよ」
「……見せられるようなもんが出来たら」
「約束な！」
諒は子供のように破顔して、ばんばんばん、と亮介の背を平手で叩いた。
（……こいつ本当に、酒には弱いんじゃ……）
亮介は本気で不安になったが、さすがにビール一本でつぶれるほどのこともなかった。時計が二時をまわるころには、諒は危なげない足取りでしっかり窓を乗り越え、自分の部屋へと帰って行ったのだった。

深夜二時半。コールは七回。

「……もしもし？」
嫌な予感がして、諒は声をひそめた。
「もしもし？　俺だけど――」
『お子様は寝ている時間じゃないのか？』
やけに皮肉っぽい返事が返ってきた。あちゃ、と諒は顔をしかめた。
「すみませんね、今まで飲んでたのよ」
『場所は？』
「亮介の部屋」
『……それは凄いな。で、時間を忘れるほど楽しかったわけだな』
「……だーかーらー、すみませんってば……まだ宵の口でしょー」
『この時間に寝ておかないと美容によろしくないんでね』
「――あんたってそういう人だよな……」
がっくりと肩を落として諒はぼやいた。
「残念ながらこちとらギョーカイには疎いんでね。そりゃまた失礼しましたっ。ふん、どーせどーせ……」
『拗ねても何も出ないぞ。事情はわかった。で？』
電話の相手は実に楽しげに話題を変えた。諒を苛めて面白がっているとしか思えない。諒は

不本意ながらも気をとりなおした。
「うまくいってるっ」
『それは良かった』
「だろ？　もうすっかりダチよ、ダチ。今のところ気になることは特にないけど……これからもう少し様子を見てみる」
『そのほうがいいな。それだけか？』
「えっと……あ、いや……」
少しばかり口ごもる。
「亮介にはさ……本当のこと、あんまり言ってないんだ……」
『全部、ひとりで始末する気か』
「っていうか……うん、『偶然』にしたいんだな……」
『随分、入れこんでいるんだな』
声が、笑みを含んでいる。何笑ってんだよっ、とムキになって諒は言い返した。
『おまえの仕事だろう、おまえに任せるよ。ひとつだけ、忠告はしておくけど』
「え……」
さっ、と諒の顔色が変わった。
「冴子が東京に来てんの!?　嘘だろ!?　うーそーでーしょー!?」

ビール一本でつぶれたのは、亮介のほうだった。
飲んでいる時は平気だったのに、翌朝になったら体はだるいし頭は重いし……。
「亮介君、例の貧血かね？」
「んにゃ、宿酔い……」
答えてしまってから、ばっと口をふさいで振り向く。後ろの席をまんまと獲得した諒が、にたにたと笑っていた。
「亮介君は、案外酒に弱いんだなあ」
「黙ってろよっ」
こんなことなら意地を張るんじゃなかった。亮介は深く後悔しながら机の上に貼りついた。その背を、諒がつんつんと突つく。
「亮介亮介、スポーツ大会って何？」
「ん？」
確か今は自習時間のはずだが、と思いつつ顔を上げたら、何故か亜衣が教壇に上がって何やら話していた。慌てて体を起こした。
スポーツ大会について、と黒板に書いてある。亜衣の隣には体育委員の岡村が立っていた。

そういえば亜衣は体育委員だった、と亮介は納得した。岡村というのはサッカー部の、やたら恰好いい男である。ちょっと面白くない。

「スポーツ大会って、つまり要するに、球技大会だよ」

「ほう？」

「うちは体育祭、春にやるからさ……文化祭も終わっちゃったし、おまけみたいな感じで、十一月にやるんだよ。クラス対抗で」

「そりゃ面白い」

お祭り大好き、という顔で諒が言う。

（うらやましい奴……）

特に諒には答えず、亮介は亜衣を見やった。

「……で、種目分けはそれぞれ希望をとります。後ろの黒板をサッカー、バレー、バスケの三つに分けておくので、明日の放課後までに希望の所に自分の名前を書いてください。ただしクラブに入っている人は、その種目には参加出来ません。人数調整は明日の放課後にやります。えーとそれで……」

亜衣はクラスでも一目置かれているのだろう。彼女が前に立つと、教室全体がなんとなく引きしまる。注目を集める術を心得ているのかもしれない。

「……それから、今回、体育委員の他に有志の実行委員を募っているんですけど……誰か出ま

せんか？」
　えっ、そんな暇ないよなあ、という風情で教室がざわめいた。
「チャンス！」
　亮介の背をぐいと引き寄せて、諒が囁いた。
「チャンスチャンス！　こういう時こそ一歩リードすんだよっ」
「え……やだよっ」
　焦って言い返す。岡村もいるのに。
「えーと今回、俺がうちの学年の実行委員長になっちゃったんで――」
　その岡村が、一歩前に出て、言った。
「クラスのほうまで手がまわりきらないかも知れないんで、出来たら男子で、クラスのほう手伝ってくれる人を頼みたいんだけど……」
　脇で亜衣がそれに頷いている。
「ますますチャンス！　亮介っ」
「やだって！　いいってのに――おい水沢っ」
「パーッとやろうパーッと」
　さんざん抵抗してみたが、この手の局面で諒にかなうはずもない。
「はいっ。はいはいはいっ。僕と亮介君がやりますっ」

おお、と声があがった。

この場合、物好きな、というニュアンスが含まれる。

「本当？」

亜衣がぱっと顔をかがやかせた。違う、と言いかけた亮介の退路が絶たれた。

「えっと、えっと……本当だったりして……」

「僕たち本気ですっ」

「じゃ、崎谷君と水沢君にお願いすることにして……他にはいない？　いないだろーな。その気になったら俺のほうまで言いにきてください」

岡村は書類にさっさとふたりの名を書き込むと、そう言って教壇から引きあげ、臨時ホームルームは自習時間にもどることになった。亮介は諒にひと言文句をつけねばと振り向いたが、実にタイミングよく、そこに亜衣が駆け寄ってきた。

「どーもー」

諒がひらひらと手を振る。

「よかった、ふたりがやってくれると助かる！」

ほっとした様子で亜衣が言う。亮介はくらりときた。

「この時期はどこのクラブも忙しいでしょ。誰もやってくれないんじゃないかって思ってたから……あ、そんなに大変な役目じゃないからね」

「はっはっは。そりゃ暇人の義務だよね」
不敵に笑って、諒が亮介の頭を小突いた。
「ま……うん、そだな……」
それもまあいいか、と亮介は思いはじめていた。亜衣が喜んでくれたので……。

4　意表をついて絶体絶命

諒が転校してきて一週間ほどが経っていた。が、一週間かけてあちこちのクラブを見学したものの、結局諒はまだどこにも腰を落ち着けず、相変わらずふらふらしている。いくつかのクラブからは、その凄まじい運動神経を見込んで、熱心な勧誘が来ていたりもしたのだが——。

何はともあれ、諒につきあわされてバタバタしているうちに画材が底をついていた。

（ちくしょー、カラーインクフェアが昨日で終わってるんだもんなー……）

行きつけの画材屋は、新宿の駅ビルの中にあった。放課後をまるまるつぶしてじっくり買い物をして（いや、決断力がないのだ、要するに……）今月の小遣いのほとんどを使い果たした亮介は、両手に荷物を抱えてよろよろと店を出たところだった。

（ま、一応目当てのカラートーンは全部買ったし……）

まっすぐ家に帰るのも味気ないので、ついその階の本屋やらレコード屋やらものぞいてしまう。

いつの間にか、ひとりでいる時間がかなり減っていたんだな、と気づいた。こんなふうに店をのぞくのにも、なんだかんだ言って涼がついてきたし、それが凄く自然だったから、意識していなかったのだ。

（奴が強引だってのもあるけど――なんか、結構……ガードしてないんだな……変だな）

バランスが崩れているかもしれない。

いいことなのか良くないのか……それはわからないけれど、これは変化だ。

本屋で「ぴあ」を買いながら、亮介は少し複雑な気分になった。

（もう……あんまり不様なことも……嫌だし……）

その涼は、今日はどこかへ電話をしていたと思ったら、ばたばたと帰って行ってしまった。珍しいことだ。

「あ、すみません」

通路に出るところで、本屋に入ってくるひとりと肩が当たった。反射的に頭を下げた。

「いえ」

相手も制服だった。同じ詰め襟だが、校章が違う。

こちらはボソッと呟いただけなのに、ひどく好意的な笑みとともに会釈を返された。通りすがりにしては鮮明な印象が残る。

（へえ……）

よほど振り向いて後ろ姿を見送ろうかと思ったが、それはやめた。
（あんな目もいいな……貴公子っぽくて……今度描いてみようかな）
ぼんやりそんなことを考えながら、いくらか歩を進めた時だった。
ぐるりと、世界が回った。
（え!?）
おもわず立ちすくんだ。
ゆるやかなめまい。いつもの奴だ。何も見ていないのに、どういうことだろう。これから、何か起きるということだろうか。
いつにも増して、凶悪な不快感がこみあげてくる。
動いたら、倒れてしまいそうだ。が、誰にどう説明すればいいのだろう。動けない。何も出来ない。嫌な予感。
（このところ、こんな事なかったのに――）
唇を噛んで、必死に周囲に視線を走らせて……亮介は、通路の奥に信じられないものを見た。
両の腕から、ばさばさと荷物が転がり落ちた。

「希沙良」

とんとん、とブレザーの肩を叩かれて、和泉希沙良はむっとした顔で読んでいた雑誌から目を上げた。

「遅いよおまえ。それに、こういう所でその名前呼ぶなっつってんだろ」

「悪かったな。おごるよ」

希沙良の文句には慣れきった様子で、学生服姿の里見十九郎はにっこりと笑った。非常に知的で優しげな瞳をしている。

希沙良の従兄にあたる十九郎は、彼より一歳年長で、現在高校二年生である。学校は違うが、幼なじみのよしみで、よくこんなふうに新宿で待ち合わせては話をすることにしている。たいてい遅れて来るのは十九郎のほうで、そのたびにコーヒーをおごらされている。しかし、希沙良の学校は新宿にあり、十九郎は立川のほうまで通っているとなれば、それも無理はないのだ。そのくせ十九郎は頑として待ち合わせの場所を変えようとしない。

要するに彼は、希沙良に言わせれば「嫌味なくらい人間が出来ている」ということになるらしい。

十九郎はひょいと手を伸ばして、希沙良の読んでいた雑誌を取り上げた。

「何だ？　『テニスマガジン』？」

「おまえ待ってる間に読破しちまった。本屋で待ち合わせすんのも問題あんじゃないか？　そ

ろそろ俺、睨まれるぜ」

「そうか、じゃあこれは俺が買うことにして……あと、『メンズ・ジャパン』が出てたら買っていかないと、うちの母君がうるさいな」

「律義だね、おまえさんも」

希沙良は肩をすくめた。彼のほうは、女のような名前とは裏腹に、実に正統派の二枚目という容貌をしている。制服は緑のブレザーにグレイのズボンで、スタイルにこだわる彼には少々不満が残っている。

「――？」

日本人にしてはやや色の薄い髪をふわりと振って、希沙良は店の外へ鋭い目を向けた。

ほぼ同時に、十九郎も顔を上げた。持っていた雑誌を、視線は通路に向けたままで希沙良におしつける。

「見えたか？」

「見えた」

「希沙良に見えるってことは……結構やばいな……」

十九郎は小さく呟くと、希沙良を振り向いた。

「おい、悪いけどそいつと一緒に『メンズ・ジャパン』買っといてくれよ。あとで払うから」



「きゃっ」
エスカレーターのすぐ脇で、若い女性が悲鳴を上げた。
「どうした?」
連れの男性が慌ててかがみこむ。タイトスカートの彼女のふくらはぎに、横一文字に浅い傷が出来て、ストッキングが裂けてしまっていた。
「何だこれ?」
「……何もしてないのに……」
「もしかして、かまいたちってやつじゃないか?」
亮介は立ち尽くして、その光景を見ていた。
では、亮介に見えているものは、彼女たちには見えないのだ。
エスカレーターの前から、ゆらゆらと歩いてくる人影が。
それは、鎧姿だった。NHKの大河ドラマでよく見る、戦国時代の奴に似ていた。体格のいい男、だと思うのだが——顔はなかった。兜の中が、空洞に見えるのだ……。
右手にだらりと大きな太刀を提げて、こちらへずっと近づいてくる。その異様な姿に、通路を行く人々は誰も気づいていなかった。

しかし、通りすがりにその太刀がかすれば、きっと今の女性のように傷を負わされることになるのだ。何もわからぬうちに。

（どうしよう……）

声をあげて知らせるべきだろうか。だが、いったい誰が信じるだろう。信じたとして、何が出来るというのだ。相手は人を傷つけることも――殺すことも出来るかもしれないのに。

（俺を見てる⁉）

理由もなく、亮介はそう確信した。

（冗談じゃない……）

亮介は通路の逆方向を振り向いた。エスカレーターは混んでいる。エレベーターは……いや、エレベーターは密室になる。かえって危険だ――。

ゆっくりと、しかし確実に、鎧武者は近づいてくる。

亮介はとり落とした荷物を摑むと、階段へ向けて走り出した。

しつこいめまいが、まだ残っている。足元がふらついて、走っているつもりなのになかなか進まない。亮介は舌打ちした。

「でっ」

つまずいて、膝をついた。

（最悪！）

「あなた、どうしたの？　具合が悪いの？」
中年婦人が、そんな声をかけてくれるのがわかった。
「すみません、平気です」
必死に立ち上がった。離れなければ、周りの人も巻き添えになる。そう思った。
背後で、また悲鳴が上がった。
「切られた!?」
「やっぱりかまいたちが――」
「ちょっとみんな気をつけて……！」
あちこちで声があがっている。案の定、奴は通りすがりに誰を傷つけようとお構いなしで、まっすぐに進んでいるのだ。
「おばさん、店の中に入ってて！」
「え？」
「危ないから！」
中年婦人にそう叫ぶと、亮介は重い足を無理やり運んで、階段にたどりついた。くらくらする視界に、白い壁がうらめしく映る。階段を使う人はほとんどないらしい。そこは完全に無人

だった。

誰もいない、と思ったらちょっとぞっとした。

とにかく、下へ降りなければならない。逃げなければならない。とりあえず、奴が見えなくなるまで。

（ずっと追っかけてきたらどうしよう……？）

ふらふらと踊り場まで駆け降りた。

そこで、どっと重力が襲いかかってきた。気がつくと、壁に寄りかかったままずるずると座りこみそうになっていた。亮介は荷物を放り出し、肩で息をしながら階段の上を見上げた。

思ったとおりだ。のろのろと、奴がそこに現れるところだった。

一瞬、笑いたい気分になった。亮介は壁に手をついて、壁づたいに数歩踊り場を歩いた。

そこでもう、完璧にアウトだった。

（下まで転がっていこうかな……）

「そしたら早いかもしんない」

口の中で呟いて、亮介は壁に背を預けた。

踊り場まであと六段、という所まで鎧武者は来ていた。

「来るなよっ」

足元に転がった鞄を、かがみこんで手を伸ばし、拾う。

「来るなってばっ」
ぶん、と放り投げた。
黒の学生鞄は鎧武者のうす汚れた胸のあたりをあっさりとすりぬけて、階段にぶちあたり、はね返った。
(どうしようもない……)
亮介は体をすくめた。
絶体絶命、というのだろう。多分。
動悸が激しくなる。と、同時に、頭の芯がすっと冷えていくような感覚があった。——何かの予兆、のような気がした。考えている暇はなかった。
鎧武者が、踊り場に足を踏み入れた。
その時——。
「君、そいつが見えてるか?」
階段の上から、声が降ってきた。
「——?」
亮介は上をふり仰いだ。鎧武者も、のっそりと動き、振り返る。
「あ!」
亮介は声をあげた。先刻本屋ですれ違った少年が、最上段から見下ろしていたのだ。

「貴様、影だな?」

今度は、彼は鎧武者に向けて言い放つ。

(あの人、これが見えるんだ!?)

亮介ははっと息を呑んだ。

亮介に迫っていた鎧武者が、そのひと言で、亮介に背を向け彼に対して身構えた。太刀をがらりと起こし、身を沈める。彼にとびかかるのではないか、と亮介は懸念した。

高貴な印象を与える瞳で、少年はそれを見下した。

鎧武者は階段を上がりはじめた。

「臨」

少年がポツリと言い、右の腕を顔の前にかざした。腕を盾にするような構えだ。

「兵」

鎧武者の動きが、途端に鈍った。ぐわっと太刀を振り上げるが、先へ進むことが出来ないらしい。

「闘」

彼は動かず、ただ一語一語区切るように、呪文のようなその言葉を唱えている。

「者」

鎧武者の姿が、うっすらと消えはじめた。亮介は目を見張った。

「皆、陣、列、在、前――」

「――――」

亮介はへたりと座りこんだ。沈黙が残った。

鎧武者は完全に消滅してしまったのだ。

「大丈夫？」

あっさりと少年――十九郎は、大人びた笑顔を亮介に向けた。

「かなりまいってるな。君は感覚が強すぎるんだよ」

「は？　は……はあ」

「案外弱腰な奴だったね。俺も見よう見まねで九字なんか切ってみたけど……本当はあんまり効かないんだ、これ」

「は？」

「十九郎！」

亮介が訊き返すのに割り込むように、鞄ふたつと本屋の袋を抱えた希沙良が現れた。

「おまえ、勝手に俺を荷物持ちにして、さっさと……」

「遅かったな」

「レジのおっさんが騒ぎに気、とられちまって、相手してくんないからさあ」

むくれた風情で希沙良は言い、それから階段の下の亮介に目を向けた。

「で？　どうすんだよ十九郎」
「そうだな……」
十九郎はやわらかい笑みとともに、階段を降り、唖然としている亮介の脇にひざまずいた。
「初対面でなんだけど、時間があったらお茶しません？」

駅ビルの二階のティールームに落ち着いたころには、激しいめまいもなんとか収まっていた。
「まずは正式に自己紹介しよう。俺は私立祥英高校二年、里見十九郎といいます。こいつは都立新宿南高校一年、和泉希沙良」
「あ、はい。俺は高陵一年の崎谷亮介で……」
十九郎のおごりであることを確認したうえで希沙良はピザ三枚をオーダーし、食べることに専念してしまっていた。亮介はにこやかな十九郎と差し向かいの席について、どうしたものかとぼんやり考えた。
「単刀直入に言うと……崎谷君はどうも狙われているらしいな」
「は？」
つい最近、そんなことを聞いたような気がする。
「俺がですか？」

「もしかして君、本当に何も知らなかったりする……みたいだな」
「そりゃ危ないわ」
脇から希沙良が口を出す。
「よく今まで無事に世の中渡ってきたよな」
「おまえは黙ってなさい」
「がぁがぁ」
「ったく、子供みたいに……。まあ要するに、もうわかっているだろうけど、君は普通とはちょっと違う人なんだ」
十九郎はコーヒーカップをとった。
「普通とは違うって……あの、俺がですか!?」
「そう思わない？」
「ヘンなものはよく見えるけど……でもあの、俺、普通と違うんですか!?」
「違います」
きっぱりと言いきられてしまった。
「そんなに戦々恐々とすることかね？」
「だからおまえは黙っていなさいって……。今までに何か変なことはなかった？　今日みたいな」
「え？　あの、誰もいないのに階段から落とされたとかは一週間前にあったけど……あ、頭の

上で電球が割れたとか歩いてたらボールが飛んできたとかも一週間くらい前にあったけど、でもそういうのって今日みたいなのとは言いませんよね……あ、あれ？」

「多分、言うと思うんだけど……。その場にいなかったから厳密にではないけどね」

「……」

亮介は頭を抱えた。

普通でないということは異常ということではないか。

「まあまあ、そう深く考えないで」

姿勢を正して、十九郎が言った。

「わかりやすく言えば、俺たちは君の仲間だから。ある程度は説明が出来ると思うよ」

「……仲間……」

意表を突かれる言葉だった。亮介はまじまじと相手を見た。

「つまりね……信じにくい話なんだけど」

十九郎はそう前置きした。

「千年くらい前までは、日本には人間以外のモノがたくさんいたらしいんだ。いわゆる妖怪とか魔物とか鬼とかああいう類いの……。そういう奴らを一括して〈妖の者〉と俺たちは呼んでいる」

「半村良みたいだろ」

希沙良が口をはさむ。

「本当にそういう言い伝えなんだから仕方ないだろう。とにかくその〈妖の者〉は、人間を食らって生きてきたと考えてくれるかな。正確には連中、精神体みたいなものでさ、人間にとり憑かないと能力が発揮出来ないんだけど……、長年生きてきて大きな力を持っている奴は精神体のままでもかなりのいたずらが出来るらしいね。

そして、そいつらとは別に、〈空の者〉という種族があって……これは〈妖の者〉を退治する力を持っていたんだ。人間にとっては味方ってことだよね。まあ、本当は〈空の者〉は人間を守るために〈妖の者〉を倒してた訳じゃないみたいだけど」

「〈空〉って、あの……そらの〈空〉ですか」

「そうです。これも言い伝えだから、俺もその意味は知らないけれどね。で、その〈空の者〉は、とある血筋の人間の内にのみ生まれることになっている。この血筋が曲者でね、どこかの里でその血統をずっと保っていたらしいんだけど……その血筋にはなにか、超能力の因子みたいなものが含まれているんだな。

この一族はだから、みんな大なり小なりなにがしかの力を持っていたんだけど、そのうちに桁外れの力を持った子供が生まれることがあってね……それを〈空の者〉と言うんだ。人間に生まれながら人間じゃない、みたいな、不思議な存在なんだ。俺の聞いた話では、〈空の者〉は神様の生まれ変わりで、その血筋は神様を受け入れるための『器』としてあったそうだよ。

本当にそうなのか、一族がそう信じていただけなのかは、科学的に絶対証明されない事だからわからない。わかっているのは、一族全員が〈空の者〉になるのではなくて、本当にその一部の、なにか条件の揃った子供にしか〈空の者〉の『降臨』はなかったということだけだね。

　で、千年ぐらい昔に、その〈空の者〉と〈妖の者〉の対決は一応決着がついたんだ、どういうわけか。それで〈空の者〉を輩出していたその血統も、〈妖の者〉を退治する必要がなくなったものだから自ずと分化して、他の血がどんどん入ってしまった。今や、純粋な血統を保っている人間はほとんどいないし、〈空の者〉の末裔も、俺の知っている限りではただひとり、という状態になっている」

「えっと、つまり〈妖の者〉は負けて、いなくなっちゃったと……？」

「いや、確かに〈空の者〉が勝ったらしいんだけど、でも〈妖の者〉の一部はまだ残っていた。だから、戦局だけ見れば指揮系統がつぶされて〈妖の者〉の負けなんだけど、種族として完全に滅亡した訳でもなかったんだ。で——今も、はぐれた〈妖の者〉があちこちで活動しているということは容易に想像がつくよね」

「まどろっこしいな。実際にさっき俺たちも見たじゃん」

　二枚目のピザを片づけながら、希沙良が割り込んだ。

「え！　あれが〈妖の者〉なんですか!?」

「鈍いよ、おまえさん……普通、気がつかないか？　そういう話聞いたら」

「黙れと言うとろーが」
表情も変えずに希沙良の頭を押し退け、十九郎が身を乗り出す。
「てえっ。あにすんだおっ」
「――正確にはあれは〈妖の者〉じゃないね。どこかに〈妖の者〉の本体があって、それが送ってきた『影』だよ。だからあんなに簡単に退散してしまったんだな。しかし、今までは君のまわりの物を動かすとか少々の力を加える程度だったのが、あんなにはっきりした『影』を送ってくるようになったということは、本体の〈妖の者〉のほうが、少しずつ力をつけはじめている――具体的には、精神体であることをやめて、誰かに憑依しつつある可能性が高いな。あと、もうひとつ、ターゲットが君ひとりに限定されつつあるということもあるだろうし……」
「あの、それなんだけど、なんで俺が狙われなきゃなんないのか……」
おそるおそる亮介が尋ねると、勝ち誇ったように希沙良が復活した。
「そらみろ、やっぱ十九郎の説明、もったいぶってわかりにくいんだよ」
「おまえが変な茶々を入れるから混乱するんじゃないか、馬鹿者。ごめん崎谷君、話を戻すと……〈空の者〉のことを言ったよね。その土壌となるべき血統には、〈妖の者〉に対抗するだけの超能力の因子が含まれていた。その血が分かれていくと……混血した果てのどこかの子孫に、突発的にその超能力を持った人間が生まれることになる、と思わない？」
「……はあ」

「仲間と言ったのはそういうことだよ、崎谷君。君はその血をひいているし、俺と希沙良もそうだ」

「は……え!?　ええ!?」

「家系図を調べてみたらわかるかもしれないね。俺たちとどこかでつながっているはずだよ。さっき階段で君を見た時、凄く強い気を感じたからね、君は絶対に『術者』だと思う。あ、術者というのは、その特殊な能力を持っている人間のことを言うんだけど……」

「俺、そんな、超能力なんかないですよ！」

亮介はテーブルを叩いた。十九郎は落ち着いた様子でカップを取った。

「問題はそれなんだよね……。普通、術者には、力の強弱はあっても、人に見えないものが見えるという感覚の部分と、〈妖の者〉の妖力を封じようとする術力の類いを持っているはずなんだけど、君の場合、感覚だけが異様に強くて、インプットするばかりでアウトプットがないんだよ。完全に無防備なんだ。多分、術力のコントロールの仕方を知らないんだろうけど……これは教えて出来るようなものじゃないし」

「俺なんか、物心ついたころには何故かやり方知ってたもんなあ」

希沙良が両の手を見つめながら、しみじみと言った。

「さて、それで、君が狙われる理由なんだけど……これは〈空の者〉と〈妖の者〉の戦いに話が戻るんだけど、つまり本来〈空の者〉に対して〈妖の者〉の力って、凄く弱いんだよね。人

間が〈妖の者〉に対して無力なのと同じでね。けれど、その戦いで、〈妖の者〉は新しい戦い方を学んだらしいんだ。なんとかして〈空の者〉あるいはその血統の術者にとり憑いて、その術力を自分の内にとりこんでしまおうとしたんだよ。そしてそれはある程度成功して、〈空の者〉と互角に戦える〈妖の者〉もいくらか現れることになった」

十九郎は一旦言葉を切って、亮介を見つめた。

「ちなみに、〈妖の者〉のとり憑き方だけど……標的に繰り返し攻撃をかけてダメージを与えるとか隙を作らせるとかして、相手が精神的肉体的に弱っているところを狙って、つけいるらしいね。最終的に本人の心が〈妖の者〉を受け入れなければうまくいかないから、心を常に強く保っていれば大丈夫、というのが理屈なんだけど、人間である以上、それも難しいよね。向こうも相当強引な手を使ってくるからね。だから、狙われたらやっぱり、やられるより先にこちらから攻撃したほうがいい。ところが君の場合、その術力を使うことが出来ない。明らかにそれを持っているにもかかわらず……だ」

「……」

「要するに君は〈妖の者〉にとっては絶好のカモなんだ。幸い、今までは〈妖の者〉にそれを気づかれていなかったんだろうけど……」

なにか、とてつもなく恐ろしいことを聞かされている気がする。

あまりに現実とかけ離れているので、かえって実感は遠いのだが、よく考えると……。



「俺たちも、どうすれば術力のコントロールが出来るようになるのか調べてみるけど……」

十九郎はすっかり呆然としてしまった亮介を見て、安心させるような笑顔になった。

「そんなに怖がらないでくれるかな。一応、こうして出会った以上、責任もって君をガードするから。俺の術力は大したことがないけど、希沙良はあの程度の〈妖の者〉相手だったら充分頼りになると思うよ」

「……はあ」

亮介は深々とため息をついた。

「今日のところはもう大丈夫だろうな、一応さっきのお仕置きが少しは効いているはずだから……問題は明日から何日間かだろう」

「おい、もしかして俺は明日からクラブ出らんないとか……」

「ああ、おまえはしばらく学校にも行かなくていいよ」

「……あのな十九郎」

「わかってるわかってる。今夜母君に訊いてみるし、近いうちに斎伽さんから連絡があるはずだから、すぐになんとかなるさ」

目の前で展開しているのは、亮介を「ガード」する上での算段らしい。

亮介は慌てて手を振った。

「あの、俺、学校までは来てもらわなくても……悪いですよ、そんなの」

「ほら、こいつもこう言ってる」
「だーっ、おまえは……駄目だよ、今がいちばん危険なんだから」
「いや、俺は奴が学校ではあんまり動けないんじゃないかと思うね。なにか奴にとって悪い条件があんじゃないかな。今日だって、なんでわざわざ放課後になるまで出て来なかったのかわかんないじゃん？」
「……根拠は？」
「……ないけど……。しゃあない、二日交替で手を打つか」
「二日？　……まあいいか。そういうことで崎谷君、こいつも出来るだけ近くにいるはずだし、俺も何かあれば、すぐに行くので」
「すみません……」
「お互いさま。実際、俺たちもよく狙われるし、ひとりじゃどうしようもないこともあるからね。まずは君に早く、そんな不安定な状態から脱してもらわないと」
十九郎は実に簡単なことのように、そう言う。
亮介は肩にずっしりと重いものを感じてしまった。
「……あの、里見さんたちは、どうしてそういう言い伝えとかを知ったんですか？」
「ああ、うちの家系は例の血筋に近くてね」
「俺たちの祖母ちゃんが純血種だったんだお」

ピザの最後のひと切れを口に放りこみながら、希沙良がもごもごと言う。
「クオーターだな、だから」
「小さいころからいろいろ言われて育ったんでね。だけど、細かい知識はやっぱり伝わってないよね。本家本元のほうに問い合わせないと」
「はあ……」
「それにしても、君みたいにずっと枝分かれした先に突発的に現れてしまった術者は、誰も味方がいないし、辛いよね……。そういう人が日本じゅうに何人かは絶対いるはずなんだ」
「……」
すっかり冷めてしまったコーヒーに、亮介は手を伸ばした。
(そっか、最悪の事態よりはラッキーなんだ……)
まだ少々頭は混乱していたけれど。
本当ならまるで信じるはずもないような話なのに、何故か、どこかで腑に落ちていた。
昔から知っていた事のような気がするのが不思議だった。幼いころに聞いた子守歌を思い出すような、そんな感覚。
「ところでさ、おまえさん、誰に狙われてるか心当たりない?」
突然、希沙良が尋ねた。
「え?」

「あのね、俺って感覚は結構弱いんだよ。だから精神体のままふわふわしてるような〈妖の者〉の姿なんてほとんど見えない。けど、さっきの『影』は俺にもしっかり見えたんだよな。それくらい妖力が強かった。ということは奴、もう誰かに憑依して力を強めてる可能性が高いだろ。だとしたらそれは、おまえさんの近くにいる人間だと思うんだけどな」

「……そうだな、挙動不審な人物、とか……下心のありそうな……思い当たる人物がいたら、マークしておいたほうがいいかも知れない」

十九郎が台詞をつないだ。

「そんな……そんなの思いつかないけど……」

亮介は首をひねった。

（挙動不審……？）

「まあ、あんまり疑心暗鬼になるのも良くないけど」

「一応、周りには用心しろってことだな」

ふたりは特に問い詰めはしなかったが……その瞬間亮介は嫌な想像をしてしまった。

（まさかまさかっ）

思いついたことを、必死になって打ち消す。

（それはないだろ、いくらなんでも……）

「どうかした？」

十九郎は人の表情を読むのが上手い。
「あっ、いえっ……あの」
亮介は焦りまくって顔を上げた。
「だってそういうの……誰が怪しいとか、どうしたらわかるのかって……」
「ああ……。うん、実はこれは、術者の場合もそうなんだけど、妖力なり術力なりを行使している時は、こう……体が気に包まれているのが見えたりするけれど、そうでない時は難しいんだよね。だから俺も、さっき君と本屋で会った時は、君が術者だってことに気づかなかったし……厄介だね。あとは相手の力がよほど強いとかじゃないと……」
「〈空の者〉ならまだしも、俺たちの感覚ってハンパだからなー」
希沙良が宙を仰ぐ。
「そもそも妖力と術力からして、本質が似てるんだよな。特に〈妖の者〉が術力を持ってる奴にとり憑いたりしてると、もうそいつが〈妖の者〉か術者かなんて、とっさにはわかんなかったりするし。ま、そういう場合、状況で判断はつくけど」
「そう……案外、目を見ればわかったりするものなんだよ」
十九郎が頷いて、そうしめくくった。

5「彼女」

ついていない。

中野駅のホームでベンチに座り込んで、亮介はつくづくそう思った。

やっぱり例の鎧武者のショックが尾をひいたらしい。もう完全に収まったと思っていたのに、電車に乗ったら悪質なめまいが再発してしまった。で、へたりこんでいるのである。

もうすっかり夕暮れなのに、このままではいつ家に帰れるやら……。

「崎谷君？」

頭の上から、声がした。

（え!?）

「崎谷君でしょ？　どうしたの、こんな所で……大丈夫？」

「亜……じゃない、神原さん……」

まさかと思ったが、偶然とは怖い。亮介は心配そうに見下ろす亜衣をまじまじと見返してし

まった。

クラブ帰り、という恰好だ。亜衣は鞄を下に置くと、亮介の隣に腰をおろした。

「例の貧血？　ひどいの？」

「あ、えと……いつもと同じ。大丈夫」

「いつものだったら大丈夫じゃないじゃない。顔色悪いし……」

「ほんとにひどくないから」

「少し収まったら、一緒に帰ろうね。途中で倒れたりしたら大変でしょ」

「そ、そんな……」

前言撤回、である。

（つ……辛いけどついてる……）

亮介はしみじみと幸運をかみしめた。地道に生きてれば、こんな事もある。

「今日は、部活？」

「うん、そう。最近委員会もいろいろあるしね、つい休みがちなんだけど」

「委員会かあ……」

「そういえば、クラスでハチマキ代わりにバンダナ揃えることにしたでしょ。あれも買いに行かないとね」

「はは。実行委員だもんね」

「……委員会といえば」
亜衣の声のトーンがやや落ちた。うんざりしたように髪をかきあげる。
「委員長がね……」
「あ、宮倉先輩……」
亮介としても、あまり話題に出したくない人物ではある。
「しつこいの。最近特にひどい。公私混同もいいとこだわ」
「……それは……」
（やっぱり凄く好きなんだろうな……）
亮介は返答に困った。
ライバル、というか同じ穴のムジナ、と思えば、なんとなく同情しない訳でもないのだ。しかし……。
「それは……困るね」
「本気でそう思う？」
「？　……う、うん」
ほとんど考えなしの答えだったので、鋭く訊き返されて亮介はたじろいだ。
「だって、困ってるんでしょ？」
「……ああ、そっか、そうよね、崎谷君が困るわけないものね……」

「？」

（な、なんだ、今の話の運びは……？）

何か、とんでもなく間抜けなことを言ってしまったのではなかろうか。

深く考えると怖いような気もする。——しかしまさか。

（だって俺、オトモダチじゃん……）

亜衣に誰が言い寄ろうと、亮介は何を言える立場でもないはずだ。自分に都合のいい想像はしないほうがいい、と結論を出して——とにかく話題を変えることにする。

「……そういうふうに、好きだとか言われるのって迷惑なの？」

（やばい！）

亮介は心中で叫んだ。話題を変えるどころかさらに深入りしてしまった。さーっと血の気が引いていく音までが聞こえる気がした。

「迷惑っていうか……あたしにはあたしの気持ちがあるわけで」

亜衣は視線を上げて、ホームの向こうを眺めた。

「好きとかって、よくわからない……何か違うんじゃないかと思うのね。なんか……あたしの都合いい所だけ見てて、悪い所知らないで、好きだから俺とつきあえなんてね……。多分、別の理想の形にあたしをあてはめてるんであって、本当のあたしに対して言ってるんじゃないと思うし……」

「――そうかなあ……」

「それにね、宮倉先輩の場合、もっと簡単。あたしがどういう人間でもいいの。とにかく隣に座ってにこにこしてればカッコがつくからって、それだけが理由だもの。そういうのって、我慢出来ない」

「……そっか……」

亮介は頬杖をついた。

なまじ昔から綺麗で注目を浴びてきただけに、外見だけで見られることに抵抗があるのだろうな、と思う。まったくわからない話でもなかった。

（だけど、じゃあ俺って何なんだろう……）

めまいは、いつの間にか止んでいた。つい黙り込んでしまって、亮介は亜衣の視線を追うようにホームに目をやった。

「……あれ？」

亜衣が呟いた。

「崎谷君……あそこ、水沢君じゃない？」

「え？」

亮介は体を起こした。

向かいの東西線のホームの、かなり亮介たちから離れた所に立っている制服姿は――確かに

諒だ。階段のすぐ脇で、行き来する人の流れを気にしている。

（何やってんだ、あいつ……）

距離があるし、亜衣とふたりでいる状態で声をかけるのも避けたい気分だ。亮介はただぼーっとその姿を目で追った。

東西線の車両がホームに入り、どっと人が流れだす。

諒が動いた。待ち人が到着したらしい。

「ええ!?」

亜衣と亮介は同時に叫んでしまった。

階段の所から数歩歩いて諒が声をかけたのは、電車から駆け降りてきた少女だった。セーラー服の彼女は、諒をあしらうようにその背を軽く叩くと、並んで歩きだす……。

「崎谷君、あの女……」

「……だよね」

「やっぱりそうよね!? あの、一週間くらい前にこの駅で会った……」

「名前、教えてもらったんだ……『冴子』さんだって」

あの、炎のような美少女。

ひと目見たら、忘れない。まして、誰より早く「狙われている」ことを亮介に知らせてくれた——正体不明の少女となれば。忘れているはずがない。

（その彼女と、なんでよりによってあいつが……）

亮介は呆然と、階段を降りて行くふたりを目で追った。

「人間関係って、わからないわね……」

亜衣が、ポツリと言った。

「うん、世の中、狭いっていうか……でも」

亮介は口ごもった。わけのわからぬ、嫌な感じ。ぼんやりとした不安。

「水沢の転校してきた日だったんだよね……あの女に会ったのは」

「――そういえば、そうよね」

「なんか、タイミングいいよね。あは」

とりあえず笑ってみたけど、嫌な感覚は消えなかった。その感覚の正体を確かめるのが、怖いような気がした。

「なんだか凄く、仲良さそうじゃなかった？」

そう言って、亜衣は亮介の横顔を窺った。

「うん……」

頷いたら、もうひとつ、別の感じが亮介の内に生まれた。

なにか、取り残されたような……置いて行かれたような、そんな思いだった。

亜衣の台詞を聞いていたら、諒は強硬に否定したに違いない。
「二時間四十分っ」
諒はしつこく繰り返した。
「二時間四十分待ちましたよ、この私が」
「たまには敵討ちしないとね。諒ちゃんが時間どおりに現れたためし、ないでしょ」
「今日は来たのっ、今日はっ。せっかくの、せっかくの俺の誠意をぐりぐりと踏みにじってくれた訳だよおまえさんは」
「忍さまを十時間かそこら、待たせたんですって？」
冴子は上目遣いに諒を見て、にっと笑った。う、と諒が詰まる。
先に立って改札を通り、駅前広場に出ると、冴子はくるりと振り向いた。
「どこか入ろ、諒ちゃん。あたしケンタッキーがいーなー」
「あのな、あのなあ、あれは一生の不覚なの！」
「一生の不覚を何回やってるのよ。今日は三時間くらい待たせていいって、忍さまに指示されてたの！　先行くわよ」
「だーっ、忍！　あーいーつーはーっ」

諒はぐしゃぐしゃと髪をかきまわした。
「諒ちゃん、ケンタとマックとどっちがいい？」
「どこも入らんでいい、入らんで。今日はとにかく、ひとつだけ言っとくことがあんだよ」
「――――」
狂いっぱなしの調子をなんとか整えて、諒が真顔で低くそう言うと、さすがに冴子も言葉を切って諒を見上げた。
「――なんだ、デートじゃなかったの」
「だっ、だっ、誰がデートなんぞするかおまえとっ」
「馬鹿ね、あんたなんかとするわけないじゃない、何考えてんの。じゃ、少し歩きましょ」
「あーもーほんとにもー」
冴子は商店街をすたすたと歩きだす。諒は天を仰いでぶつぶつとぼやいた。
「だいたいなあ、なんでおまえが東京にいるわけ？　おまえしばらく大阪にいるとか言わなかったか!?」
「気が変わったの」
「おまえな、それ嘘つきって言うんだぞ。嘘つきは泥棒のはじまりなんだぞ」
「うるさいわね、忍さまのお許しはもらったわよ」
「忍は甘いっ。おまえに甘すぎるっ。あーもー」

「いやね、男のひがみって。残念ながら、あたしは信頼をいただいているのよね。涼ちゃんと違って」

「誰がひがんでる、誰がっ。……いかん、おまえと話してると話がどんどこずれちまう」

涼は立ち止まり、深呼吸して気を鎮めた。どうもペースを保てない。こんな所を亮介が見たら何と言うだろうか。

「……つまりだな、これだけは言っておく。冴子、おまえ、今度の仕事だけは絶対に、絶対に邪魔するなよ。いいな?」

きっ、と冴子が目を上げた。

「いつあたしが邪魔をしたって!? え!?」

「しただろーが、熊本でも神戸でも青森でもっ! 全部おまえが絡んだ途端、話が変なほうに転がっちまったんだぞ!」

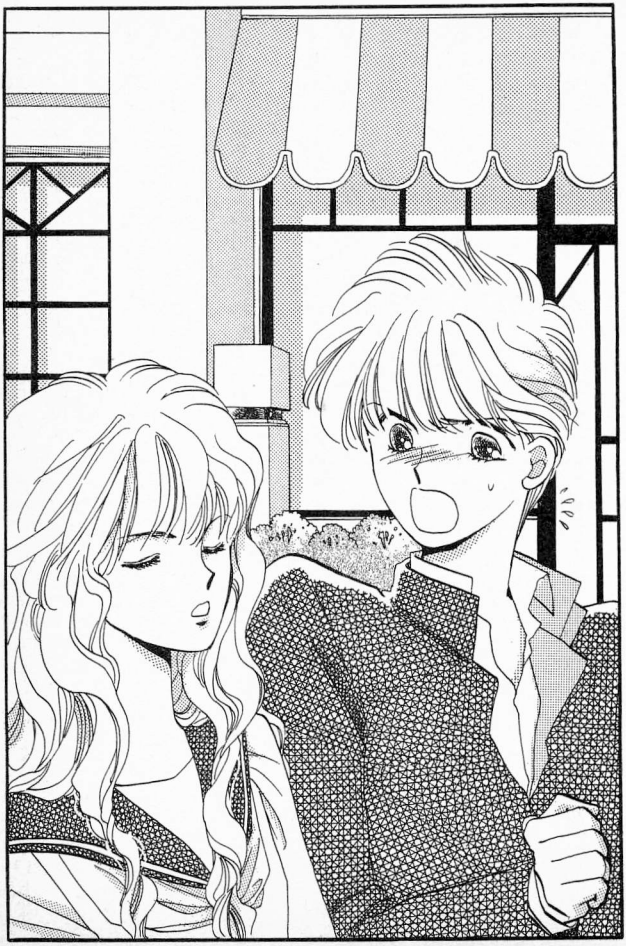
「お黙り! 誰がその件、まるくおさめてやったと思ってんの!?」

商店街のど真ん中である。背が高く見目の良い男女が怒鳴り合う姿が、人目を引かないはずがない。

冴子はふっと言葉を切り、目を伏せた。ふう、と息をつく。

「男の愚痴って、聞けたもんじゃないわね」

「あーのーなー……」



「とにかく！　あたしは邪魔なんかしたこともないしこれからもしないわよ。それでOK？」
びし、と諒の鼻先に人差し指をつきつける。
「おまえのそれ、あてにならないからなあ」
「何か言った？」
「べーつにー」
諒はひらひらと右手を振った。冴子はにっこりと笑った。
「以上で、諒ちゃんの用は終わりよね」
「……一応な」
「そしたら、あたしもひとつ訊きたいことがあるのよ」
「どーせろくでもないことだろ」
「さあね。……あたし、この前亮介ちゃんに会ったんだけど」
諒が、口をつぐんでじろりと冴子を見た。
「あの子、いい子ね。凄くかわいいわ。見た目もそうだけど、中身がね、なんて言うのかまっすぐで素直で」
「……」
「ま、あんたなんかに引っかかっちゃって可哀想よね……何も知らないんだものね」
「まどろっこしいな、おまえさんらしくもない」

諒の声はかなり不機嫌な色を含んでいる。冴子は動じる様子もなく、改めて諒の目を見つめた。

「じゃあ訊くけど、なんで亮介ちゃんに何も言わないのよ？　いつまでそんなお友達ごっこしてるつもり？」

「……」

「あんまり、利口なやり方じゃないと思うわ……」

呟くように、冴子が言った。諒はむっと黙りこんだまま、答えない。

「ねえちょっと、何か言ってよ」

「……」

「ねえ」

「……」

「ねえったら」

「黙秘」

ボソッと言って、すたすたと歩きだす。

「ちょっ……ああもうガキなんだからっ」

かなりのハイペースで歩いていくその後ろ姿を恨めしく見やって、仕方なく冴子は小走りで諒を追いはじめた。

（五十嵐、か……）

その朝、亮介は席につくと、ぼんやりと中学時代の「親友」のことを思い出していた。昨夜、夢に見てしまったのだ。

（あいつ、今どうしてるだろ……）

彼は確かかなり遠くの私立校へ行ったはずだった。三年になってクラスが分かれてからは一度も連絡をとらなかったから、詳しいことは何も知らない。

今ごろになって五十嵐のことが気になったりするのは、きっと諒のことを考えていたからだ。

昨日、亜衣に家まで送ってもらって（本当は立場を逆にしたかったのだ、亮介としては……）から、ずっと考えてみた。新宿で会ったふたりの話を、もう一度頭の中で反復しながら。

亮介には、よくわからない何かの「術力」が、使えないけどあるらしい。十九郎によれば、亮介の感覚の異様な鋭さからそのことは予測出来るし、十九郎自身、一瞬だけ亮介の身から強い気が放散されるのを目撃したそうなのだ。

そして、その「術力」を狙っている奴――〈妖の者〉は亮介の近くにいて、力を蓄えつつあ

る。

では、あの「冴子」は何なのだろう。事情をすべて知っている様子で、亮介の怪我を治してくれた。あれが「術力」という力なのだろうか？

それに諒は？　諒が冴子と知り合いなら、〈妖の者〉が亮介を狙っていることを知っていてもおかしくない。しかし諒はそんなことはひと言も言わなかった。何も言わず、不自然なくらい強引に亮介に近づいて――。

（あれ？）

亮介は自分の考えた言葉にぎょっとした。

（不自然なくらい強引に俺に近づいて？）

「……」

そんなことはない。亮介は諒が何故わざわざ夜中に部屋まで来なければならなかったのか、その理由を知っているはずだ。それを本人に聞いたはずだ。

だからこそ、十九郎たちにも諒のことはひと言も話さずにおいたのだ。

（けど――じゃあなんで……）

「そもそも、普通の人間が屋根の上走るか？　……」

呟いて、頭を抱えた。諒にまるめこまれてその辺を追及しなかった自分も悪いのだ。

（俺だって、何もかもをあいつに話してる訳じゃない……）

確かめるのが先だ。あれこれ考えるよりも。

「おっはよっ」

タイミング良く、諒が教室に現れた。今朝は結構早い。まだ、クラスの半分程度しか来ていなかった。

「おーっす亮介君、お元気？」

机の上に鞄を放り出して、声をかけてくる。

「あのさあ、例のクラスのバンダナ、いつ買いに行くんだっけ？」

「明日土曜日だから、放課後選びに行こうって、神原さんが言ってたぜ」

「あ、そか。んじゃ、俺パスするからね」

諒は片手をあげてにっと意味深に笑った。

「そしたら彼女とふたりっきりでしょ。ふっふっふ」

「なっ……おまえだって委員だろっ」

「俺、責任感なくってねえ。よろしくね亮介ちゃん。ところで数学のノート貸してくんない？今日あたっててさあ」

「……おまえがいつになく早く来た理由はよくわかった」

数学は一時間目である。亮介のノートを奪い取ると、諒は亮介の後ろの席でだかだかと答えを写しはじめた。

「……なあ」
亮介は後ろを振り向いて、どう切り出したものか考えた。
「なんざんしょ」
下を向いたまま諒が答える。
「……おまえさ、冴子っていう女の子知ってるだろ？」
「――？」
ノートからちらりと目を上げて、諒は亮介を見た。
「誰ですって？」
「冴子だよ、凄く綺麗な女の子」
「冴子ちゃん？　……どこのクラス？」
「――――」
亮介は言葉を切った。
「亮介君？」
「あ……だったらいい。なんでもない」
亮介はくるりと前に向き直った。それ以上訊けなかった。
なにか、ひどく傷ついたような気持ちが残る。
嘘、だ。諒の嘘は、亮介がひと言、「昨日駅でおまえを見た」と言えば、つき崩すことが出

来る。そんなことわかっている。

だけど、問題は諒がごまかしたことじゃない。

諒の表情は、嘘をつく者の表情ではなかった。白々しさとか、焦りとか罪悪感とか、そんなものの匂いがまるでなかった。完璧な演技。何も知らなければ亮介も信じてしまっただろう——そんな表情。

完璧、だからこそ……。

(そしたら今までのは!?)

亮介は昨日からの嫌な感じが胸に甦るのを感じていた。

(そしたら今までこいつが話したのは!? 何が本当で何が嘘で……!? そんなの俺にはわかんないじゃないか……)

嫌な感じの正体は——本当はわかっていた。出来るだけ避けようとしていただけで。

疑念、だ。

はっきりとした不信感。

諒を疑いたくなどなかったのに。

「亮介亮介」

こんこん、とノートの角で肩を叩かれた。亮介はがばっと振り向いた。

「何だよっ」

「何だよって……ノート。ありがとね」
「……ああ、そうか」
ノートを受け取って、亮介は目を上げた。諒がきょとんとして見返す。
「どした？」
「……あのさ」
亮介は椅子に横座りになり、ノートは机の上に置いた。声を低める。
「ちょっとさ……思い出してた……。俺、中学の時に凄く仲がいい奴がいてさ——仲が良かったっていうか、本当は俺は何もしてなくて、向こうから勝手に近づいてきてたんだけど」
「……」
微妙に、諒の表情が——瞳が変わった。
「元気な奴で、人気があって……そいつさ、俺のこと、自分とは全然違うけど、違ってるからいいんだってさ、そんなこと言ってた。俺、そのころいろいろあって、困ってたりして、いつも暗かったけど、そいつのせいでいじめにもあわなくて……だからね、俺も結構頼ってたんだよね」
「……うん」
諒が何か言いかけて、やめて、小さく頷いた。亮介は構わず話を続けた。
「……だからさ、誰も本気で聞かないようなことをさ、思いきって話してみたわけ。——俺、

なにもそれを解決してほしかった訳じゃない。そんな大それたことじゃなくて、まず俺の言うことを信じてほしかったんだ。それだけだったのにさ……」

「……」

予鈴が鳴りはじめた。

「それって、そいつの手に負えない問題だったんだ。まあ、誰にもどうしようもなかったことなんだけど、だけどそいつのプライドがどうしても、それをなんとかしたかったらしいんだ。確かに、そいつっていつもまとめ役で、大した正義漢だったから、そいつの言うことはいつも正しいってみんな認めてたし……自分に任せろって顔をした以上、あとには退けなかったんだろうな。で、どうしようもないものだから……結局そいつ、それを俺のせいにしたんだよ。俺に向かって、『それはおまえの気のせいだ、おまえみたいに部屋にこもって絵なんか描いてるからそんなつもりになっちまうだけだ』ってさ……。その瞬間、そいつが今まで俺に言ってたのは全部建前だったんだってことが俺にもわかったよ」

「亮介、それって……」

「わからないならわからないって言えばいいんだ！」

亮介は諒の言葉を遮った。

「俺と全然違ってて……立場も何も全然違ってて、絵を描いてる俺の気持ちなんてわかるはずもないのに、わかるような顔をしてみせて、わかってやってるつもりになってて、それに失敗

したら今度は自分にもわかるように俺を作り変えようとしてさ……。だったら初めから何もしないでいてくれたほうがずっといい。そうだろ？」

「――――」

諒は答えあぐねて亮介を見つめた。

もどかしさにも似た思い。

「結局、自分が満足するためにさ……弱い奴のことを守ってやって、理解してやって、そういう自分を人間的に優れていると思うために、自分の正義感のためだけに俺に近づいてきたんじゃないか。それは別に俺じゃなくても、クラスの中で浮いてる奴なら誰でも良かったんじゃないのか。そんな優越感のために利用されるだけなら、俺はもう都合よく友達面なんてしてやらない。俺の世界に土足で踏み込まれるくらいなら――強い奴になんか頼らない」

「亮介……」

「だから、俺のことは俺が自分でやらなきゃ駄目なんだ。人に弱みなんて見せたくないし恩も売られたくない。俺、ずっとそう思ってて……だけど水沢の前ではそれ、忘れてたみたいだ」

亮介は唇を噛んだ。

「今、思い出した……。だからもう、俺に恩を売ることないよ。必要以上に近づかれるの……迷惑なんだよ」

「……そっか」

ポツリと、諒が答えた。
「そゆことか……わかった。も、余計なことはやめる」
「……」
諒の言葉は淡々としていて、感情はまったく読めない。
怒りも、落胆も、読めはしなかったけれど——。
再び、チャイムが鳴った。数学の教師が、待ち構えていたようにドアを開けて入ってくる。
もう、言うことを思いつかなくて、亮介はそのまま前を向いた。
「あ、でもさ……」
後ろで、呟くように諒が言った。
「やっぱり明日の放課後は行けないわ。本当は用があんだよ。神原さんにそう言っといて」
「わかった」
亮介はこくりと頷いた。

6　白昼堂々大乱闘

「元気ないじゃない？」
吉祥寺の駅前を歩きながら、亜衣が言った。
「え？　そう？」
状況としてはラッキーなはずなのに、と思いつつ亮介は答えた。確かに、無意識に視線が下向きになっている。
「すぐにいいバンダナが見つかって良かったけど……なんか拍子抜けという気もするわね。何か食べる？　お昼、まだだもんね」
「神原さん、今日部活は？」
「学校に戻るの面倒だから、今日はお休み」
「なるほど」
バンダナのデザインについては委員に一任されていたのだが、当初亜衣と話し合っておいた

イメージに色といい柄といいぴったりのやつが一軒目の店で簡単に見つかってしまい、クラスの人数分の注文もすませて、せっかく空けておいた放課後が大幅に余ってしまった亮介であった。このまま帰るのは、確かに味気なさすぎる。

「じゃあ、どこか入ろうか」

「デートしてるって思われたらどうしよう？」

（えっ!?）

何気ない亜衣の台詞にぎくりとする。

「……そ、そだね。誰かに誤解されたらまずいね」

「この辺はうちの生徒ばかりだものね」

（あ――）

亮介は宙を仰いだ。

（俺ってバカ……）

気のきいたことひとつ言えない。

亜衣は特に気にした様子もなく、商店街を歩いていく。

「ケンカしたの？」

突然、こちらを覗きこんで、そう訊いてきた。

「え？」

「水沢君と」
「……ケンカなんかしたみたいに見える？」
「そうは見えないけど……でも、何か変じゃない？」
亮介は前を向いた。
「普通に友達してるよ」
「――――」
亜衣が少し沈黙する。
「……崎谷君って、いつもそうなのね」
「そう……って？」
「誰とでも普通に友達するのね」
「そんな――」
立ち止まった。正面から亜衣を見る。
「そんなことないよ」
「じゃあ崎谷君に特別な人っている？」
すかさず亜衣が訊いた。亮介は言葉に詰まった。
「そんなの……」
「あたし、水沢君は違うと思ってたのに……崎谷君、なにか用心してるみたいに見える。自分

の周りに壁を作って、誰も入れないようにしてる。だから、誰も普通より先に行けないんじゃないの？」

「そんなことないってば！」

亮介は声をあげた。

ばん、と激しい音がした。

「――!?」

振り向いて、亮介は目を見張った。

ふたりが立ち止まっていたのは、電機屋の前だった。そのショーケースの中のブラウン管が、ぽっかりと暗い口をあけている。ぱりん、と落ちる破片。

「――あ！」

（まずい！）

亮介はぐいと亜衣を車道のほうへ押しやった。通行人がわっとショーケースを見た。

びりびりびり、とウインドウが震えた。

それから、つんざくような音とともにガラスが炸裂した。蛍光灯やテレビが、次々に砕けてゆく。

「え!?」

がしゃがしゃと地面に落ちるガラス片に、亜衣が悲鳴を上げた。



「何!?」

「――神原さん！　こっち！」

亮介は亜衣の腕をつかみ、駅へ向けて走りだした。ふたりのあとを追うように、続いて薬局の店先の商品が歩道に転げだし、ブティックのハンガーがいっせいに崩れる。土曜の午後ということで通行人も多い。商店街は途端に混乱に陥った。

（げっ）

ぐらり、と亮介の視界が揺れた。

（またかよっ）

――神経が、〈妖の者〉の妖気に過剰に反応しているのだ。体勢を崩しかけた亮介を、亜衣が慌てて支えた。

「崎谷君!?」

「やば……」

本気でこの状態はまずい。亮介は呟いて、背後を振り向いた。本屋の雑誌棚がばたんばたんと大きな音をたてて倒れ、歩道いっぱいに週刊誌をばらまいていた。

「もしもし?」

『はい斎伽です。……あれ？　諒ちゃん？』
「――――」
諒は一瞬息を止めて受話器を耳から離し、緑の電話をまじまじと見つめた。番号を押し間違えた訳ではない、と思い直し再び受話器にとりつく。
「冴子!?　おまえなんでそこにいんだよ!?」
『だって暇だったんだもん。本、借りに来てんの』
「忍は？」
『今、隣でレポート書いてる。代わろっか？』
「早く代われよ」
『何よ、随分元気ないじゃない』
「……てめえのせいだよ。怒鳴るぞ」
諒は声を押し殺した。電話の向こうが沈黙する。
『今、どこにいる？』
いつもどおりに落ち着いた声が、冴子と代わった。
「吉祥寺の駅前。いい天気ですぜ」
『何かあったのか？』
「……ミスった」

『おまえが？』

「うん……警戒されたんだと思う。余計なことするなってさ、言われちった。だから今、あんまし近くにいらんなくてさ……」

『要するに八つ当たりだな。冴子に当たることではないだろう』

「だってあいつのせいなんだぜ！　亮介に変なこと吹き込むから……」

『冴子が？』

『あたしそんなことしてない！』

「嘘つけ、亮介に俺の名前か何か言っただろ？」

『そんなことする訳ないでしょ、あたしの仕事でもないのに!!　あたしの名前は教えたけど、それ以外何も言いやしないわよ！』

「――じゃ、なんで亮介が俺におまえのこと訊いてくんだよ……」

冴子の言葉に嘘はなかった。早合点を悟って少々自己嫌悪に陥り、諒はひとり言のように呟いた。

『……そんな事、亮介ちゃんが言ったの？』

「あいつ何か誤解してんのかな……。まあ、どっちにしても亮介、俺みたいにしつこい奴は嫌いだってさ」

『……』

『いずれにせよ、責任はおまえにあると言ったはずだな』
受話器が元の持ち主に戻ったらしい。
『本来のやり方に戻せばすむことだ。それはおまえの意地の問題だろう。いちいち泣きつくようなことじゃない。違うか？』
「――――」
口調はやわらかいが、その内容はかなり厳しい。諒は唇を噛んだ。
『それに、その周辺の〈妖の者〉の気配がかなり強くなっている。今はとにかく彼から目を離すべきではないな。この時点で彼の動きは把握しているのか？』
「！　ちょっと待――」
相手の台詞と同時にぞっとする感覚が背筋を走り、諒は背後を見やった。
神経を集中しなければわからない、微妙な……。
「やばいっ」
叩きつけるように電話を切り、カードも抜かずに駆けだす。
走りながら諒は、ぶん、と右手を振った。その手の内に、ぼうっと光る細身の刀が現れ、形をとった。

「崎谷！　こっちだ！」
角から飛び出してきた希沙良が、そう叫んで亮介の脇についた。
「あ――！」
「何か変な感じはしてたんだ……おい、あんたも手貸してくれ、巻き込まれちまうぞ」
希沙良は無造作に亮介に肩を貸すと、亜衣に向けて顎をしゃくった。アーケードがみしみしと鳴りはじめている。反射的に亜衣は言われたとおり、反対側の亮介の腕をとった。
今までいちばんひどいめまいが亮介を襲っていた。希沙良に対して何か言おうとするが、言葉にならない。
「駅前まで走るぞ。おまえさんは何もするな」
ぐしゃり、と頭上の屋根がつぶれた。
人ごみをかき分けて、希沙良は亮介を抱えるようにして走りだす。必死になって亜衣もついてくる。
「ポルターガイストってんだよ」
ざわめきに負けぬよう希沙良が怒鳴った。
「このまんまだとこの辺ぐしゃぐしゃになるぜ。この人出じゃ、誰がやってんだか見当もつかない。俺の〈結界〉じゃこの辺の連中全員は守りきれないしな」
「何なの!?」

亜衣が叫び返す。
「どういうこと!?」
「いろいろとあんだよ！　――おい崎谷、眼鏡外せ」
酒屋の看板が真っぷたつに割れて落ちた。
亮介は「え?」と希沙良を見返した。
「おまえのほうがよく見えるはずなんだよ、妖気の出所ってやつが……。畜生、全然見当がつかねえや」
「――――」
半信半疑で、亮介は眼鏡を取った。
ぶわっ、と霧のようなものが目の前いっぱいに広がった。亮介は仰天した。
（気……!?　こんなにはっきり見えたっけ?）
空気全体がぼんやりと発光している、というのに近い。
「よくわからない、広がりすぎてる……」
「ちっ、やっぱりな」
舌打ちして、希沙良は歩を進めた。駅前の広場に出る。
「希沙良！」
タイミングを計ったように、目の前に黒のスカイラインＧＴＲがすべりこんだ。後部座席の

ドアが勢いよく開き、十九郎が身を乗り出す。
「崎谷君、乗れ！」
「ついでだ、あんたも」
希沙良が亜衣の背中を叩き、ふたりを車内に押し込んだ。自分は助手席にまわりこむ。
――その時。
「あ！」
亮介は身を起こし、小さく叫んだ。
目の前に広がっていた気が急に乱れ、渦を巻いたかに見えた。その、乱れの源に――より強い光。
「見えた！」
「何!?」
十九郎が振り向き、亮介の視線を追った。
商店街をぬけてまっすぐに車道を走ってくる人影。
「希沙良！『剣』だ！」
「げっ」
十九郎の言葉に、希沙良は助手席に乗り込むのをやめ、素早くドアを閉めた。
「――――」

人影が、近づいた。亮介は目を見張った。
「水沢君……!?」
亜衣が呟く。
「水沢!?　例の！」
十九郎は亮介を見た。水沢諒の名は、昨日のうちに亮介に聞いてある。要注意人物――。
「松井さん、出してください」
運転手に向かって言うと、窓を開けて希沙良に叫ぶ。
「希沙良！　出来るか？」
「やってみる」
希沙良は頷いた。彼を残し、スカイラインは急発進した。

「亮介っ」
諒はガードレールに足をかけて三メートル跳躍した。亮介と亜衣を乗せた黒のスカイラインがタイヤを軋ませて走りだす。
「てめえっ」
かっと頭に血がのぼった。追って車道を駆け出そうとする目の前に、亮介を攫った片割れ

――希沙良が立ちはだかる。
「『水沢』だな!?」
「なんだ貴様はっ!!」
諒はぶん、と手の内の剣を振った。
「亮介かえせっ。痛い目見るぞ!」
「手を引くのはそっちのほうだぜ」
希沙良の両の手がぼう、と光った。手首から先が青白い光に包まれる。
「畜生めっ」
諒は地面を蹴り、希沙良を跳び越えた。
その跳躍力は既に常人の範疇ではない。
「ちっ」
遅れて希沙良も跳躍する。頭を越される寸前、追いついた。
諒が「剣」を降りおろし、希沙良の左手がそれを受け止める。
(こいつ)
びりびりと衝撃が伝わったが、どちらも退かなかった。
高さでは、諒のほうに利があった。そのまま勢いで希沙良の上を越え、着地する。希沙良は宙で一回転し、軽い身のこなしで地面に足をつけた。

（『手刀』か――）

諒はスカイラインを追って走りだした。すかさず希沙良がそれを追う。クラクションが鳴った。

スピードでは車にひけをとらない。

黒のスカイラインはまだ視野の内にあった。諒はぎり、と歯を鳴らし、道路の中央に出た。中央線に沿い、対向車との間をすりぬける。

諒の「剣」は常人の目には見えない。希沙良の両の手――「手刀」――の帯びる光も同様である。

いずれも「術力」を一点に集中して作る武器だ。「剣」は空間に、「手刀」は自分の手に術力を固定する。その強度は持ち主の術力の強さに比例する。今のところ、互角だった。

「はっ」

横についた希沙良の回し蹴りをかわし、クラクションを鳴らすカローラのボンネットを踏み台にして、諒は歩道へ跳んだ。

「なんだなんだ?」

道行く人が、唖然として見る。

「映画か!?」

構わず希沙良は諒に続いた。

（……あ、あいつ……）

くらくらしながらリアウインドウにとりつき、亮介は言葉もなかった。

ガラス越しにも、その気がはっきりと見える。諒と希沙良の身体からたちのぼる、炎のような光のような影のような——。

「『剣』が使えるなんて、かなりの力量だ」

隣で十九郎が眉をひそめている。

「希沙良でも手いっぱいってとこだな……」

「どういうこと？　……」

誰に訊くでもなし、亜衣がポツリと呟く。諒と希沙良の人間離れした動きが信じられないのだ。

「いったい何なの？　どうしてあたしたちが逃げなきゃなんないの？」

「なんであいつが、追っかけてくんだろ……」

亮介が、亜衣に続ける。十九郎が意外そうに振り向いた。

「君の言ったとおり、じゃなかったのか？　崎谷君。あれだけの力を持ちながら、何も言わず君に近づいてきたとなったら……」

「でも」
なにかが、ひっかかる。
亮介は目を細めた。後方では、諒の振るった剣をかわして希沙良がとびすさっている。嵐のような勢いで、諒は追ってくる。
それを、獲物に対する執着、ととるのは簡単だが。
「――違う」
シートの背に亮介は額を押しつけた。
「……確かに強い力は感じる……。でも、違う」
「崎谷君……？」
「変だ」
気に悪酔いして、顔を上げてもいられない。亮介は必死に言葉を声にした。
「何か変だ。……そう、あの鎧の影とか……あの類いに見えた気を、今は感じない」
「――――」
十九郎は亮介を見、後ろを振り向いた。ぴったりと、闘いながらも諒はついてくる。
「……そんなバカな……そんな見分けまでつく訳がない……〈空の者〉でもないのに……」
低く呟く。困惑の色が、その表情に浮かんでいた。
「……わかるとしたら確かに凄いが――崎谷君、〈妖の者〉に術者が洗脳されている場合だっ

てあるんだ。そうじゃないと言い切れるか？　もし彼が味方だとしたら、何故君に今まで何も話さなかったんだ？」

「……」

答えられない。どうしてもそこで、つじつまが合わない。が――。

（だって……あいつはあいつで……）

「さ、崎谷く……」

亜衣が顔色を変えた。ずる、と亮介の上体が倒れこんだ。

神経が限界に達してしまったらしい。視界ばかりか意識までが闇と化した。

（あれ？）

車の動きが止まった、ような気がした。

そして亜衣が抱き寄せてくれたように思って――そこで、亮介の記憶は完全に途切れた。

スカイラインが、信号で足止めされている。

希沙良はそれに気づき、渾身の力で跳躍した。諒の前にまわりこむことに成功する。

「！」

車の流れの止まった車道で、ふたりは対峙した。

一瞬の間をおいて、諒の剣が突き出される。希沙良はそれを左手の甲で払い、懐に飛びこんで右の手刀を繰り出した。真っすぐに喉元を狙う指先から身をそらして、諒がその手をひじの所から蹴り上げる。

「やるな」

諒は呟いた。無傷、という訳にはいかなかった。

互いに急所には一撃も入れさせていないが、掠り傷はあちこちに負っていた。互いの術力が強いために、多少かわした程度ではその余波だけで傷つけられてしまう。

（信号が変わるまでに間を縮めないと、こいつ相手じゃ……）

諒はすっと身を沈めた。

一気に跳んで、目の前の歩道橋に降り立つ。

――が、その動きが読まれていた。希沙良がざっと右腕をなぎ払い、空中に血霧が舞った。

「つっ」

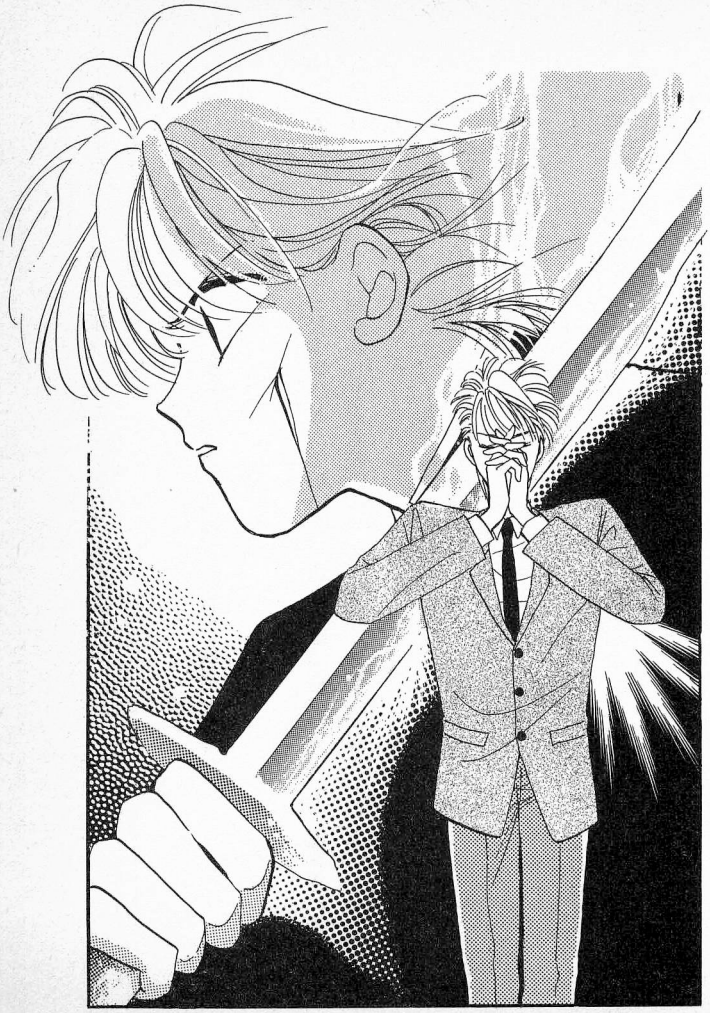
左の足首がすっぱりと斬られた。諒は歩道橋の上に着地するなり走った痛みに顔をしかめた。

「逸ったか？」

希沙良がその前に続いて降り立ち、にっと笑った。

「ここから先は進めないぜ」

「カッコつけちゃってこのガキが」
諒は剣を斜に構え、ぶつぶつと言った。
「実にかわいくない……亮介を見習ってほしいね」
「負け惜しみか」
「こいつは大笑い」
みるみるうちにスニーカーが朱に染まってゆく。確かに、焦ったとしか思えない。諒は内心苦笑した。
「手を引けば、見逃してやってもいいんだぜ」
希沙良は両の手を顔の前で組み、一歩前に出た。
「それはちょーっと出来ない相談ねー」
悪ふざけとしか思えないが、つい節にのせて口ずさんでしまう。ここで余裕を失ったら、それこそ敗北だ。
「ったくっ」
希沙良が突っ込んできた。諒は右足一本で地を蹴り、後転して身をかわす。着地と同時に剣を払った。ぎん、とそれが希沙良の手刀に当たり火花を散らした。
鈍痛がじわりと伝わって、希沙良は眉をひそめた。力に押されたらしい。
「痛えな馬鹿野郎っ」



跳び下がって、様子を窺う。下の車が再び流れだした。
スカイラインが遠ざかっていく。
「いつまでもてめえにつきあってられるか」
諒はもう一度剣をぶん、と縦に振った。その光が微妙に強さを増す。
「意見が合ったな」
希沙良が言い返す。
歩道橋に上がってくる者は誰ひとりなかった。通行人は歩道に広がって、遠巻きにふたりを見上げている。いつの間にかSF忍者映画のロケだとかいう噂が広まっていた。いい加減きわまりない。
「あんまり手こずったんじゃ、十九郎にまた笑われるしな……」
低く構え、希沙良はひとりごちた。
「?」
諒が目を見張った。
「何?」
一瞬出来た隙を狙って、希沙良が拳を繰り出す。慌てて剣でそれを防ぎ、諒は数歩後退した。
「ちょっと待て、こら……」

足首の痛みに、動きが鈍る。
ずるずると歩道橋の端まで追い詰められ、諒は防戦一方にまわった。
「待てっつーとろーが！」
「見苦しいぜ、この期に及んで」
「じゃかあしい！　そーじゃなくて――でっ」
左足が階段部分にはみ出して、バランスが崩れた。ここぞとばかりに希沙良が攻めこむ。
「――――」
とん、と諒の背中を支えた片手があった。
「そこまで」
もう一方の手は、諒の腹を狙った希沙良のパンチを――立派な凶器である拳を――受け止めて、いた。
「!?　……」
相手を認めて、希沙良がはっと顔色を変えた。
「その、むやみに暴走する癖はなんとかしたほうがいいな――諒」
口許にかすかな笑みを残して、静かに彼は言った。

7 「彼」

目が覚めた時、亮介がいたのは広い和室だった。
まず天井が目に入り、それから額にひやりとした手を感じた。
「亮介ちゃん？」
ウェーブのかかった髪。
人を魅きこんでしまう大きな瞳を見上げ、ようやく亮介は相手に気づいた。
「冴子さん!?」
「今ね、妖気の毒を抜いてあげたから。もう平気よ」
亮介の額から手を放しながら、冴子がそう言う。以前会った時と同じ、セーラー服を着ていた。
「あんまり彼女に心配かけちゃ駄目よ」
冴子は目を上げて、亜衣にウィンクした。亮介は反対側の枕元に亜衣が座っているのに気づ

いて、慌てて起き上がった。
寝かされていた布団も上等なら、部屋の調度も普通じゃない。
「か、神原さん……どうなったの？」
「あたしも何がなんだか……。ここ、あの里見さんって人のお家らしいんだけど」
「正確には十九郎君のお父さまの屋敷だけどね。お父さま、建設会社の社長なの。待ってて、今全部説明出来る人を呼んでくるから」
冴子が何もかもわかっている様子で言い、腰をあげる。
「冴子さん――あいつは!?」
亮介は訊かずにいられなくて、冴子を引きとめた。
ふっ、といたわるような瞳を、冴子は亮介に向け、微笑した。
「諒なら同じ屋根の下にいるわよ、亮介ちゃん。心配しないで、あの子は味方だから……。少し、先走っちゃっただけなのよ」
「……」
（味方……？）
亮介は言葉を失った。
安堵と、後悔と……よくわからない感情が胸を占めた。
遠い目をして、冴子が言う。

「あの子本当に馬鹿だから……。今回は結構こたえてるみたいよ、こんなこと滅多にないんだけど」

「――――」

振り切るように襖を開けて。

「諒のことはあとで話してあげるから、まずは忍さまに会ってみて。全部それからよ」

「忍さま……？」

亮介は口の中で繰り返した。ぱたぱたと冴子の足音が遠ざかって行く。

「崎谷君……」

亜衣が口を開いた。

「あ……」

亮介は振り向いて、言葉に詰まった。

何をどう説明したものか……。

亜衣は緊張した様子で、控え目な笑みを作った。

「事情は、少しだけ……里見さんが教えてくれたんだけど」

「……聞いたの？」

「うん。普通の人に話しても構わないことになってるんだって。たいていの人は信じないからって。面白い理屈よね」

「……」

亮介は下を向いた。

「なんか……巻き込んじゃって、ごめん」

「あたしは何も――迷惑なことなんて何もないの」

きっぱりと亜衣は言った。

「そんな顔してほしくないわ」

「でも、下手したら、俺のそばにいたっていうだけで怪我とかしてたかも知れない……現に、あの混乱で怪我した人がひとりもいなかったとは思えないし……。俺、考えが足りなかった。俺が狙われてるってわかってたのに、ふらふら出歩いたりしてさ……」

「それは違うでしょう？　崎谷君は被害者でしょ!?　そんなこと言わないでよ。崎谷君はそれで満足かも知れないけど、あんまり他人行儀じゃない、それって？」

「――――」

亮介は亜衣の瞳を見返した。

（他人行儀……？）

襖の向こうに、足音と人の声がした。

「よう、気がついたって？」

がらりと襖を開けて、希沙良が顔を見せる。

「あ……」

「繊細なのも考えものだよな。まあしかし、多少は責任も感じてるんだぜ俺としても」

「入口をふさぐな、さっさと入れ」

十九郎が後ろからその頭を小突いた。ぶつぶつ言いながら希沙良は部屋に足を踏み入れ、十九郎がそれに続く。

最後に、亮介の初めて見る青年が姿を現した。

年上、だ。大学生くらいに見えた。上下を黒で統一したラフな服装で、物静かな雰囲気がその身を包んでいる。

瞬間、空気が凍りつくような感覚があった。

その正体が美しさであると、気づくには少しばかり時間が必要だった。冴子の美しさは血の通った美しさだが、彼の場合はそれを超越した、神々しいばかりの美貌である。人の匂い、というものがしない。その瞳は微妙に青みがかり、髪は漆黒。

「初めまして、崎谷君」

亮介と目を合わせると、彼は優しげに微笑んで、会釈した。一見冷ややかなイメージだが、笑顔は意外に人懐こい。

「あ……」

亮介は目を細めた。初対面、のはずなのに、彼のことは以前から見知っている気がした。錯

覚だろうか……？

青年は部屋に入ると、亮介の布団のすぐ傍らに正座した。長身だが、ずばぬけて高いというほどでもない。むしろ諒のほうが高いだろう。

「斎伽忍、です。よろしく」

彼はそう言って、右手を差し出した。

何も考えず握手に応じてから、自分が布団に半身を起こした状態であることに気づいて、亮介はばたばたと座り直そうとした。

「そのままでいい。自分で思うよりショックが残っているはずだから」

強い調子で忍が制止する。亮介は迫力に押された。

「斎伽、忍？」

忍の正面に座った亜衣がポツリと言った。目を円くしている。亮介は「？」と亜衣を見やった。

「有名人有名人」

部屋の隅にあぐらをかいた希沙良が皮肉っぽく笑う。

「知る人ぞ知る、『メンズ・ジャパン』の専属モデルだろ」

「やっぱり!?」

亜衣がぱっと赤面して、口許を押さえる。ファッション業界などには疎い亮介は、話が見え

ず、きょとんとした。
「あれはアルバイトだよ、本業は学生。そういうことは言わないでほしいな、希沙良」
「へいへい」
表情も変えず忍が言い、恐縮もせず希沙良が答える。希沙良の隣で十九郎がやれやれと嘆息していた。
「まずは、崎谷君に謝らなければならないな」
忍は目を上げて、そう言った。
「え？」
「諒のミスは僕の責任だ。余計な混乱をさせてしまって、申し訳なかった」
彼の口から諒の名が出て、亮介ははっと身を硬くした。
「結論から言えば、諒は『術者』でね……わけあって僕がこのふたりと引き合わせていなかったので、あんな誤解が生じてしまった。それにしても同士討ちにまで発展するとは、さすがに思わなかったが」
「……」
希沙良がそっぽを向き、十九郎がひとり苦笑した。複雑な表情で、亮介に声をかける。
「崎谷君、前に話しただろう。斎伽さんは、現在わかっているだけでただひとりの――〈空の者〉なんだよ」

「――え!!」

意味を理解するまでに、少々の時差があった。「神様の生まれ変わり」というフレーズを思い出して、亮介は大声をあげてしまった。

「そんなに凄まじい人間じゃない」

忍が肩をすくめ、亮介に笑いかける。

「まあ、確かに希少価値は認めるけれどね……さして嬉しいことでもないよ。代わりがきかない、ということで得られるのは、親族から動きを制限されるという現実だけだからね。そんな訳で、諒や冴子には僕の代わりに動いてもらっていたんだが……」

「ひどいと思わん？　親戚筋には『僕何もしてません、おとなしく大学行ってます』って顔しといて、裏じゃこんな事やってんだもんな。まんまと騙されたのね、俺たち」

憮然として希沙良が口を出した。よほど根に持っているらしい。

「そのことについては悪かったと思っているよ、希沙良」

「希沙良、失礼だろ。だいたい、俺たちも本家に秘密で動いていたんだし……。悪いのは本家の事なかれ主義のほうなんだから」

十九郎が間に入ってとりなしている。

どうやら、「本家」というのは現状を維持するのに積極的で、自分のように遠い分家に現れた突発的な術者の救済などには乗り気でないのだ、と亮介は納得した。

余計な〈妖の者〉退治などせずとも、自分たちに害がなければそれでいいということか。

「それでも、僕は諒に、自分の正体を明かすなとは指示していないんだが……諒には思うところがあったらしいな」

忍がそう言い、亮介はあることに気づいた。

「――そう、諒は、初めから君をガードする目的で僕が差し向けた。もう、彼には半年以上そんな仕事をしてもらっている」

亮介の考えをそのまま読み取ったようなタイミングで、忍が続けた。その瞳に不思議な光の宿っていることを、亮介は知らずにいた。

すべてを知り、哀れみながら、なおかつ突き放すような――。

「……」

亮介は何も言えず、ただ沈黙した。

「なんだってそんな面倒なこと……」

希沙良が栗色の髪をかきあげて、ぼやいた。

「俺はもう嫌だぜ、白昼堂々あんな街中で衆人環視のなか大乱闘した挙句が同士討ちなんて……。なまじあいつ腕がたつから、俺も本気になっちまったし。……今思うとぞっとする」

「あの程度ですんで良かったということさ」

脇から十九郎がフォローする。

「俺たちに先入観があったのも確かだし……」
先人観、という言葉に亮介はぎくりとした。
その源は、自分の不信感なのだ。
「いや、先入観もなにも、あの状況で奴が目の色変えて突っ込んできたらおまえ、誰だって……」
「何よりも、横のつながりが徹底していれば避けられたことには違いない。責任は僕にある」
穏やかに、忍が言った。それ以上を言わせない力がその響きにはあって、希沙良も言葉を切った。
「……それにしても、じゃああの妖気の主は——本当の〈妖の者〉はどこにいるんだろう……」
十九郎が、誰に問うでもなし、そう呟いた。
「巧妙な奴ではあるな。うまく諒に押しつけて手を引いた」
答えたのは忍である。口許に笑みを残してはいるが、瞳は笑っていない。むしろ残忍な色に近かった。
「が、ここまで来たらすぐに尻尾を出すよ。すぐにね」
「……」
十九郎は口をつぐんだ。

圧倒されたのだ。何か、正体のわからぬ意図を含んだ、その瞳に。

「その件は諒に任せることにするよ。――それから、崎谷君」

忍の目が亮介に向いた。彼に見つめられると何故か異様に緊張する。亮介はぎょっとして背筋を伸ばした。

「あ、はいっ」

「君の術力が不安定なことは十九郎から聞いたようだけど……まず時間をかけて自分の能力を『自覚』することだね。今は特にいろいろな刺激を受けて感覚だけが突出してしまっているけれど、この状態がいつまでも続くわけじゃない。こんなめまいを起こすことも、そう何度も繰り返すことはないだろう。あまり気にしないほうがいい」

「……はあ」

「実際、君の感覚の鋭さには驚かされる……。妖力と術力をオーラだけで見分ける術者なんて君ぐらいだ。大いに自信を持ってほしいね」

「……」

亮介は忍の、底の知れない瞳を見つめ返した。

緊張感の原因が、なんとなくわかった。

すべて見通されている、という感覚。

――いずれすべては良くなるから、そのために君は君自身で動かなければならないよ――

彼が、そう語りかけた気がした。
「俺……前に、会ったことないですか？」
「あるよ。君は気づかなかったけれど」
おずおずと訊いた亮介に、忍は曇りのない笑みを向けた。

「あたし、もう帰るわ」
鞄を取り、亜衣が立ち上がった。あまりに唐突だったので、亮介は面食らってしまった。
「ああ……送ります。もう夕方だから」
十九郎が忍に軽く頭を下げ、それに続く。
「いいです、悪いから」
「交通の便の悪いところだから、車を出しますよ。駅の場所、わからないでしょ」
きっぱりと断る亜衣をやんわりとなだめて、十九郎は先に立って部屋を出た。
「神原さん」
態度から察するに何か亜衣には不満があるのだろうが——直接の原因の見当がつかない。亮介は慌てて声をかけた。
「がっかりしたわ」

襖の所で振り返り、亜衣はそう言った。
「話を聞いていてようやくわかったけど——水沢君のこと友達として見てないだけじゃなくて……『敵』だなんて思ってたのね？」
「————」
「どうして一度だってそんな事思ったりしたのよ!?　水沢君の気持ちぐらい、傍で見てたあたしにもちゃんとわかってたのに、当の崎谷君がそんないい加減で……情けないのよ」
ぴしゃり、と襖が音をたてて閉じ、亜衣は姿を消した。
「威勢のいいお姫さまじゃん」
希沙良が感服した様子で肩をすくめた。
「……」
忍は何を問おうともせず、亮介はただ目を伏せて沈黙した。
——廊下の端では、十九郎が制服のポケットに片手を突っこんだ姿勢で、亜衣を待っていた。
「崎谷君が少々、気の毒という印象があるけど？」
大人びた仕草で首を傾げ、亜衣に並んで歩きだす。
「車の中で崎谷君が水沢を〈妖の者〉じゃないと言った時……確かに彼の能力が秀でているというのもあるけど、それ以前に崎谷君自身が水沢をそう思いたがっていないという気がした。



君は、そうは思わなかった？」

「……」

大した旧家らしく、長い廊下が延々と続く。

「それに今はいろんなことが一度に重なって……命の危険まで何度も感じたりしたら、誰しも多少は疑心暗鬼になるというものでしょう」

「……そう……そう、思います」

亜衣が小さく頷いた。

「わかっていたんだけど……少しだけ、悔しかったっていうか」

「悔しかった？」

興味深げに、十九郎が見下ろす。

亜衣は上目遣いに十九郎を見、泣き笑いのような表情を作った。

「あたし、ふたりを見ていて、男の子たちっていいなあって思ってて……あたしがどんなに時間かけても出来ないことを、水沢君ならやってくれるような気がして……なんだか勝手に水沢君に期待していたんだわ。だから、自分のことみたいに悔しくて……」

「……なるほど」

十九郎は優しく両の目を細めた。

「そういうものかなあ……。俺たちからすれば、女の子の持つパワーは羨ましい限りなんだけ

どね」

「いっ、いていていて痛かろーが馬鹿っ」

「ばあかあ!?　誰のことよ大たわけ。騒がないでじっとしてなさい」

「おまえ、亮介が相手の時とあんまり態度が変わらんか？」

左足を抱えこんで、諒は歯をむいた。

「当然でしょ？　今さら何言ってんの？」

白けて冴子が言い返す。諒はがっくりと頭を前に倒した。

足首を包んでいた手を放し、冴子はぱんぱんと両手を鳴らした。

「はい、おしまい。せいぜい感謝してね」

「はいはいありがとね」

すっかり血に染まってしまった靴下を恨めしく見やり、十九郎の用意してくれた代わりに手を伸ばす。傷はかなり深かったのだが、冴子の手にかかれば十秒で元どおりだった。

「相変わらずだのー、そのわけわからん力」

「おかげ様で」

「今度から人間救急箱と呼びますかね」

諒はずずっと日本茶をすすった。
この屋敷はあちこちに部屋が余っているらしい。立派な客間に冴子とふたりとり残された諒は、つらつらと掛け軸などを眺めた。
「なーるほどね、こいつが里見十九郎氏のお宅でありましたか」
「諒ちゃんは、十九郎君たちのことは知ってたの？」
「名前だけは聞いとったですよ。別に会いたくもなかったけど」
「意地張らないで会っとけば、今回こんな事にはならなかったのに」
「意地？」
露骨に嫌な顔をして、訊き返す。
「聞き捨てなりませんね。何が意地？」
「あのふたりは本家がバックについてるし、忍さまとのつながりも深いでしょ」
「俺は田舎の馬の骨って？　あんまり短絡的じゃない、それって？」
「ムキになるあたりが修行不足よね」
「……おまえさんの性格にも相当問題が見うけられますけど」
諒はお茶うけのおかきを口に放りこみ、横目で冴子を睨んだ。
「だいたい、おまえの正体からして今いち不鮮明だもんな」
「あたしの正体？　『冴子』だってば」

「それはもー聞き飽きた……あー、なんでもいーや俺には関係ないし」
すっかり投げやりになって、ざらざらと口の中にあられを流しこむ。冴子がやれやれという顔をした。
「……馬鹿ね」
「あに？」
「だから言ったのに」
「――――」
あられを頬ばったまま、ぎっと強い視線を向ける。
「結局、秘密主義にした意味はなかったじゃないの。あんなに混乱しただけで……。忍さまも、何故なのかは教えてくれないし。諒ちゃんにはあんな厳しいこと言ってたけど、忍さま、今度の件は全部自分の責任ってことにしてくれてるのよ」
「――――」
ばりばりとあられを噛み砕いて、諒は湯呑みに手を伸ばした。
「……あの、お節介が」
「お節介？　誰が!?　甘ったれてんじゃないわよ」
ビシッと冴子が言い放った。
「忍さまの指令で動いた以上、あんたの不始末は忍さまの不始末になるのよ。その辺の自覚が

足りないんじゃないの？　なまじ腕がいいからって思い上がってるんじゃないの!?」

「……」

湯呑みを持つ諒の手が止まり、その瞳がまっすぐに冴子の強い視線を受け止める。

「わがままを言うなら、それだけの仁義通してからにするのね」

冴子の言葉には、その美しく華奢な外見には不釣合なほどの凄味があった。

諒は、静かに湯呑みを机に戻すと、ぐしゃぐしゃと頭を掻いた。

「……忍には、こう言ったんだ。『偶然』にしたいって」

つまらなそうに、前髪をかきあげる。

「偶然？　……」

「俺、転校する前に、一度亮介と会ってるんだよ。ホントに偶然でさ、夜中バッタリ……。俺、とっさにその時、こいつともう一度会いたいって、そう閃いて……そうしたら、そいつがなんと仕事の相手じゃん。ラッキーって思ったけど、同時にすげえ嫌で……本当に嫌で。だって、仕事で近づくのはあくまで『作為』の上でだろ？　俺は忍から報酬を受け取るわけだし……亮介は俺のこと、ただのクラスメートとしては見ないだろうし、普通の人間としてすら見ないだろうし……俺が守ってやって亮介が守られてケリがついたらはいサヨナラみたいな、そんな構図――今までの仕事はそれで良かったけど、今度ばかりは、絶対に嫌だった」

だから。

何も言わなければ、対等でいられる。単純に、教室で、バカを言って、バカにされて、それだけの——とうに失われた、ごく普通の高校生活。

ただそれだけのために。

「……見通しが甘いのよ、見通しが」

冴子は深くため息をついた。

その口調に、諒を責める色はなかった。ひたすら、呆れ果てたような表情。

諒は無表情に、ずずず、と日本茶をすすった。

「ひとつ、訊きたいんだけど」

まったくこいつは、という顔で冴子が口を開く。

「んあ？」

「そんなにまで亮介ちゃんにだけは、と思いこむ理由って、何だったの？」

「ずずずず」

「……あのね」

「ひと目惚れ、つっても納得せんだろな」

「納得してほしいなら、してあげてもいいけど、以後そーゆー目で見るわよ」

「どーゆー目だ」

空になった湯呑みを置き、諒は机に片ひじをついた。

「うちの犬にそっくりだったんだよ、亮介って」
「――犬？」
「そう。それが理由」
「……」
冴子は瞳に不信感をたたえて、諒を見返した。

頭の中が、ぐちゃぐちゃだ。
亮介は必死になって、自分の内の感情を整理した。
諒が近づいてきたのは、やはり意図に基づいての行動だったという事実に対する失望。
そして亜衣の言うとおり、自分自身も諒を受け入れていなかったのだから、諒が自分に嘘を言っていたからといって彼を責められる理由はないということ。
根底にあるのは、後悔と後ろめたさと――寂しさ。
「だからね、亮介ちゃん」
冴子が、林檎をむいてくれながら言った。さすがにいつまでも寝ている訳にはいかなくて、亮介は布団から脱け出し、机の脇に端座している。机の反対側には、退屈そうに希沙良が頬杖をついていた。

忍は、諒に話があるとかで冴子と入れ替わりにこの部屋を出て行き、今はいない。
「諒を買いかぶることないわ。あれはね、本当にただの馬鹿よ」
「……」
脈絡も何もない台詞に、返す言葉もない。
「策を練るとか段取りを踏むとか、そういう発想がないの、あいつには。ひたすら単純に突っ走るだけ。その手の人間を深読みしても、得るものは何もないのよね」
きれいに切られた林檎が、ことん、と皿に乗る。
「……はあ」
「これは経験からくる結論よ。重要な意見だから憶えておいて」
「はあ……」
「良く言えば素直なんだろうけど……諒に素直なんて言葉を使うのは言語道断という気もするしね」
（あれ？）
亮介はかすかに瞠目した。
冴子の言葉の意味を思うより前に、伝わってきた感情が意外だった。
本当にどうしようもないのよね、という響きの裏に、ふと見え隠れする、逆説の……。
（へえ……）

こんな美女が諒のことを想ってやまない、というのは少々もったいない気もするが、おそらく間違いないだろう。亮介は胸を占めた暗雲をしばし忘れ、微笑ましい気持ちになった。

（そうなんだ……）

「？　なあに？　亮介ちゃん？」

冴子が目ざとく亮介の表情を読んで、ぎっと睨みつけた。

「あ、いや……いただきます」

「あたしの話、ちゃんと聞いてた？」

部屋の隅の電話が、りん、と控え目に鳴った。

場所を考えるに十九郎がとるべき電話なのだろうが、仕方なく希沙良が手を伸ばす。

「はいもしもし――十九郎なら出てるけど。え？　崎谷に!?」

希沙良の声が急に硬くなった。冴子と亮介がはっとして見る。

「誰だかわからない？　……わかった、つないでくれる？」

怪訝な面持ちで、希沙良は亮介に目を向けた。

「おまえさんに電話。名前は言わないけど、男の声だとさ」

「!?　……」

亮介がここにいることを知りながら、名を名乗らない者とは……見当がつかない。

亮介は黙って受話器を受け取った。

「……もしもし」
「崎谷か？　俺だ」
男の、がらがらと掠れた声が耳にとびこんできた。
「え？」
記憶の内にある声ではない。しかも、どこか乱れた——酔っぱらったような調子の声。
「神原はいただいたぜ、へへへ……」
「——」
がん、と心臓が殴られた。
まさかと思いつつ、一方で確信して——叫ぶ。
「宮倉先輩!?」

8　ごめんなさい

「そのほうが神原のためだからよ。てめえなんぞにかかずりあってるよか、ずっとな。けど、てめえにもな、一応、見学の権利ぐれえはあるだろと思ってよ。今、学校だ。もうだーれもいやしない。見物人がいなきゃ面白くもねえ。てめえが来たところでご褒美なんざ出やしねえがな、せいぜい歓迎してやるぜ。――」

台詞の後半は、希沙良と冴子も同時に聴いた。外部スピーカーで受信出来るのだ。さすがに、録音までは無理だった。

がしゃん、と電話が勝手に切られ、三人はいっせいに目を見合わせた。正確には、呆然とした亮介を挟んで、希沙良と冴子が同時に事態を了解した。――

「ちいっ」

希沙良が舌打ちして亮介の手から受話器を奪い取り、十九郎の乗ったはずの車を呼び出す。

冴子は、鋭い身のこなしで部屋を飛び出して行った。

車内電話へは、あっさりと回線がつながった。
『もしもし――』
「十九郎!?　おまえは無事なんだな!?　彼女はどうした?」
『ついさっき中野の自宅前で別れた。俺は今そちらに……待て、何があった!?』
「……盲点だ。奴はお姫さまも狙ってたんだよ」
『――何?』
十九郎の声が、すっと低くなった。
亮介もぎょっとして、希沙良の横顔を見つめた。
「今、電話があった。崎谷の先輩だそうだ。場所は学校。来れるもんなら来てみろとさ。……かなりラリってた。あの調子じゃ、もう完璧に同化してるかも知れないぜ」
『学校?　――高陵か。その分だと俺と別れてすぐのところを狙われたか……こちらの動きを追われていたな』
十九郎の声に、怒りが含まれた。術者としての誇りを踏みにじられた怒りだ。言葉は逆に冷静になる。
「十九郎」
受話器が、希沙良から忍の手に移った。いつの間にか希沙良の隣に来ている。
「そのまま高陵に向かってくれるか。相当強い〈結界〉が張られていると思える。手は出す

な。連絡を待つ」

『わかりました』

余計な反問はなく、電話はすぐに切れた。

亮介は目を上げた。忍の横に冴子が片膝をつき、部屋の入口の柱に片手をついて——諒が、立っていた。

「崎谷」

希沙良が厳しい表情で、亮介を向いた。

「よくわかってないようだからちゃんと言っとくぜ。さっきの声からするに、〈妖の者〉がとり憑いてんのはその宮倉とかいう奴だと思う。心当たりはあるか？」

「——」

（み……宮倉先輩が？）

事実を〈妖の者〉にすぐさま直結することは出来なくて、亮介は息を詰めた。経験を重ねた希沙良と冴子がともに察知したのなら、間違いはないだろうが……。

「宮倉は、彼女に執着してたんだ」

答えたのは、諒だった。

「一週間以上前に俺も会ってるが、その時は何も感じられなかった。ただ、並はずれて自己中心的な奴ではあったな……」

「上手く利用されたようね」

冴子が両の瞳をきらめかせて、忍を窺った。

忍の視線は電話に落ちていた。感情はない。彼が動揺することなど、天地が返ってもないだろうと思えた。

希沙良も、振り向いて忍に強い目を向けている。

空気が、ぴん、と張りつめた。

亮介は目の前で展開している光景を、なにか他人事のような気持ちで眺めていた。世界が、遠い。突然、感覚のすべてが馬鹿になってしまったような。

（――神原さんが、どうなったって？　……）

そこまで、思考を引き戻す。

宮倉先輩の話は、何度か聞いた。前から強引ではあったけれど、最近度を越してしつこい、とか。が、姿は体育館の一件以来、見ていない。あのあと一度でも会っていれば、気の状態などで亮介にも何か伝わるものがあったかもしれない。

今まで亮介をつけ狙っていた〈妖の者〉はその宮倉にとり憑いていて……亜衣は、亮介をおびきよせるために使われたのか。それとも宮倉自身の執念が亜衣に向いたのか。あるいはその両方か。

よくわからない。が、ともかく、今の宮倉は普通の精神状態にないことは確かだ。

そして、その手の内に、どんな手段によってか——亜衣が。

（————）

ざっ、と音をたてて血の気がひいた。

本当の衝撃というものは、即座には人を襲わないのだ。

胸いっぱいを摑んだ黒い手に、亮介は前のめりになりかけた。

〈妖の者〉は人を食らう。

実感として、亮介はその意味を知らない。が、冴子たちは知っているのだ。知り尽くしているから、目の色が違う。

忍は沈黙を通していた。

希沙良は、ほとんど睨むように、忍を見ていた。

冴子はただじっと、まばたきもせず待っている。

諒は何か言いたいのを無理に抑えているような——感情が半ばまで沸騰しているような——表情で、立ち尽くしている。

三人とも、忍のただひと言を待っているのだ。

短いが、凝縮された時間が流れた。

「————」

がん、と空気を叩き壊す勢いで、電話のベルが鳴った。無駄のない動きで忍が受話器を取

る。

「……僕だ」

『今、高陵の前です。――校舎の中心に強い気を感じます。校舎には入れませんでした。……結界が強くて』

十九郎の声はいつになく緊張していた。微妙な息の乱れが伝わる。

忍はふっと眉を動かした。

「十九郎……結界を破ろうとしたな。手を出すなと言ったはずだ」

『――申し訳ありません』

図星をさされて、十九郎の声の調子が弱くなる。

「その件は今は預ける。十九郎は引き返せ。始末は諒に任せる」

「え!?」

希沙良が叫んだ。

「そんな……こいつひとりになんて！」

『斎伽さん、俺は……』

「聞こえなかったか？」

『――――』

有無を言わせない。その意志は明確だった。十九郎は反論をやめた。

「十九郎が結界を破れないなんて、相当の奴じゃないか！　こいつだけじゃ駄目だ、いくらなんでも……」

希沙良はそれでも食い下がった。

「せめて手分けくらい出来るはずだ。俺と十九郎が外の守りに当たってもいい！　ここに来てはずされるなんて真っ平御免だ！」

「希沙良。この仕事は初めから諒のものなんだよ」

受話器を離して、忍は言った。憎らしいほど静けさに満ちた言葉だった。希沙良はかっとなり、床を拳で叩いた。

「あんた……正直に言ったらどうだ!?　俺たちを使えば本家に知れる確率が高くなる、それが恐いんだってさ！」

『希沙良！』

電話の向こうで十九郎が声を荒げた。

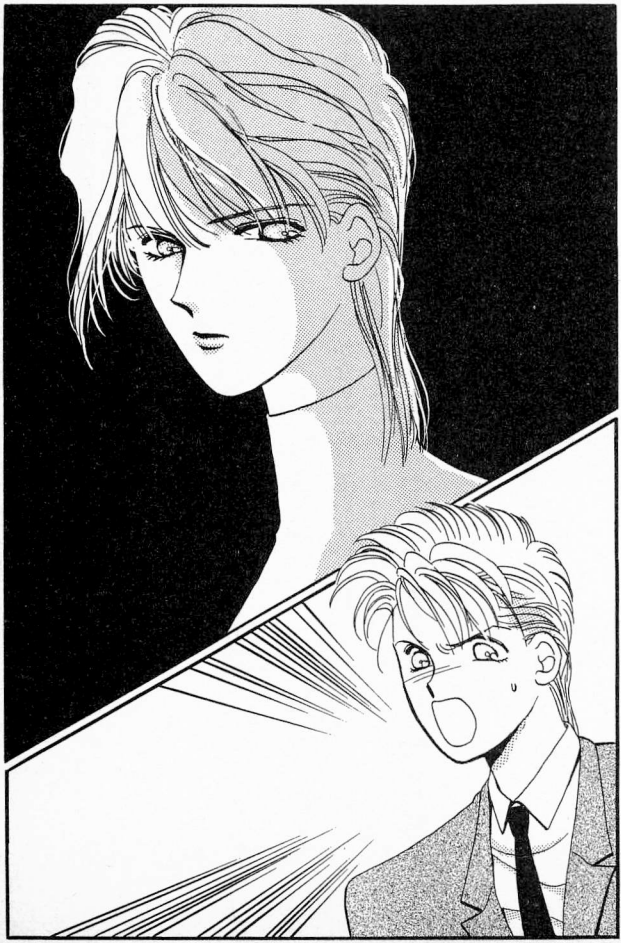
『俺の顔に泥を塗る気か？』

「――――」

はっ、と希沙良は肩を震わせた。

忍から受話器を受け取り、声音を抑える。

「十九郎、俺はそんなつもりじゃ……」



『なら状況をもう少しよく見るんだな。責任は誰のものだ？　権利と混同するな。下手なプライドで動くことは許さない。いいな？』

温厚な十九郎らしからぬ厳しい口調に、冴子が少し驚いたような目をした。

希沙良は力の入らない手で受話器を摑み直した。

「よくわかった……」

『すぐに戻る。――怒鳴って、悪かったな』

返ってきたのは、いつもどおりに穏やかな、十九郎の声だった。

「諒ちゃんのメンツだけじゃ片づかない話には違いないわね」

学校に急行する車の中で、冴子がしみじみと言った。

「忍さまの考えはわかってるんでしょうね？　そうでもなきゃ希沙良君の恨みをかっても仕方ないわよ」

「……」

助手席には諒が、後部座席には冴子と亮介が着いている。

「俺にプレッシャーかけてるだけだ、あれは」

諒はフロントガラスの向こうに広がる薄暗闇を睨みながら、ボソッと答えた。

「あれだけ言えば、いかにも俺が忍さまに信頼いただいてるみたいだろーが。なんてこたない、いちばん問題なのは忍のメンツでさ」
「そういう所だけ、ひねくれてんだから」
「おまえさんとは人種が違うんでね」
緊張感のせいで、やりとりも鋭くなる。
冴子は視線を亮介に転じた。
忍の指示は、簡潔だった。呼び出されたのは亮介で、亮介をガードするのは諒だ。現場へ赴くのはこのふたりだけで充分、と。冴子はすかさずあたしもあたしも、と騒いでついてきたのである。忍が冴子に甘いというのは、あながち嘘でもないのだ。
亮介はただじっと黙りこんでいる。顔色も悪い。
無理もない……。冴子は口を開いた。
「亮介ちゃん……大丈夫よ」
「――――」
亮介が目を上げる。
「〈妖の者〉ってのは、えてして力だけで頭はそんなに良くないから。わざわざこんなふうに居所教えてくるくらいだから、自己顕示欲が強くて自信過剰なタイプだと思うし。こう見えても諒はあてになるわよ」

「こう見えてもは余計だ」
むっとして諒が割り込んだ。
「……」
亮介は、諒にまだ何も言っていない。誤解していたことについても、勢いで話してしまった五十嵐のことについても。そのことが気になっていた。
諒も、何も話そうとしない。
そんな場合ではない、ということもあるが——。
「亮介」
ポツリと諒が言った。亮介はほっと背筋を伸ばした。
「〈妖の者〉だって、無条件に人にとり憑くわけじゃない。人間のほうにそれを望む気持ちがあって、相手を受け入れようとしなけりゃ……それは、聞いただろ？」
「……ああ、憶えてる」
諒の視線は、前に向いたままだ。亮介は頷いた。
「宮倉は、あんまり神原さんを手に入れようと望みすぎて、望んだあまり〈妖の者〉を呼び込んじまったんだ。人間ってのは、強く願えば願うほど、誘惑に脆くなる。普段強い人間だって、何かのきっかけで崩れちまうこともある。……人間ってのは、基本的に弱いものなんだよ。でもその弱さってのは誰もが抱えてて、誰もが捨てられないもんだと思う。優しさってや

つも、その辺から生まれてくるもんじゃないのかって、俺は思う」

「……」

「……なんてね、そんなのただの言い訳かもしんないけど。……俺も昔、誘惑ってやつに引っかかって死にかけた弱虫だからさ。凶悪だよな、家まで燃やしちまって……。正直言って、忍がいなかったら俺、本当に今ごろ生きてないからさ……」

亮介は眉をひそめた。以前聞いた話と諒の台詞が重なって、真実の形が出来上がってくる。冴子を見ると、彼女はすべてを知っているのだろう——聞くのが辛いという風情で目を伏せていた。

「……だからせめて、その人間の弱い部分を守る技術——力じゃなくて、技術が俺にあるなら、俺は動かなきゃ……俺に出来ることをしなきゃ、俺は許されないような気がすんだよ」

「……いつまで？」

ふと思いついて、亮介は尋ねた。

（ずっと？　……）

犠牲になり、失われていく何かがあるはずだ。

諒は静かに肩をすくめた。

「……さあねえ」

校門の直前までまわりこみ、車が停車した。

日は落ちたが、夜はいまだに訪れない……青と紫の光線が支配する夕闇。逢魔が時そのものである。

「舞台としては上々だね」

昇降口の前に立ち、諒は呟いた。

人の気配がまるでない。土曜の放課後とはいえ、校内に残っている生徒なり職員なりがいてもいいはずだ。

「亮介ちゃん、〈結界〉が見える？」

冴子が、そう訊いた。

「え？」

「あ……知らないか。ええとね、この校舎の大部分を覆っている力があるのよ。普通の人はその中に入ることが出来ない……というか、入ろうという気がなくなってしまうし、その中で何が起きようが察知出来ない。あたしたちは身のまわりに術力のバリアを作って妖力の及ばないようにする時に〈結界〉って言葉を使うんだけど、これはもっと本格的な、本来の〈結界〉よね。これを破るのは確かに難儀だわ」

「じゃあ……入ることが出来ない？」

「入ることは出来る」
訊き返した亮介を諒が振り向いて、短く言った。
「向こうは亮介を呼んでるんだから、入れてくれるさ。でも、入ったら最後、中は奴の力の及んでる空間だから、こちらの力は制限されるだろうな」
「――――」
「どっちにせよ、入らなきゃはじまらない」
諒は右腕で風を切った。ぼう、と「剣」が姿を現す。
「こいつには名前があってさ……」
複雑な表情で、亮介に言う。
「その名も『朱雀』ちゃん。忍の命名なんだけど、何考えてんだかわかんない名前だよな」
「あら何よそれ。恰好いいじゃない、朱雀剣、なんて。さすがは忍さまよね」
「ちょっち安直……。そもそも意味がありそうで、実はないかも知れないだろ。それが恐い。忍ってそーゆー奴だよ」
「あんたねー……」
〈朱雀〉を構えて、諒はドアの前に立った。
「亮介。――こいつは、おまえが開けるドアだぜ」
「……わかった」

頷いて、亮介はガラスのはまった扉に手をかけた。
冴子が片手を伸ばして、亮介の肩につかまる。
「！」
ぐいとドアを押した途端、何かねじれた空気が見えた。
壁をくぐり抜けたような、妙な感覚。
ばちっ、と火花の散る音がした。
「てっ」
諒が声をあげた。左手で右の肩を押さえる。亮介と冴子が、はっとして見た。
「てて……スパークした」
諒の背後で、ドアがゆるりと閉まる。諒は舌を出し、顔をしかめた。
「どうやら俺には入ってほしくなかったみたいだね、宮倉センパイは。もう遅いよねー、入っちゃったもん」
「何か陰険なやり口ね。平気？」
「あー平気平気……っと」
冴子に答えて、諒はにやりと笑った。目の前の廊下に、待ちかねたように現れた三体の鎧武者に向けて。
「さっそく出ましたね、『影』のみなさん。ちょっと甘いんじゃない？」

ざっ、と三体はいっせいに剣を構えた。鏡に映したような動きだ。明確な殺気。
冴子に肩を引かれて、亮介は一歩下がった。
冴子が妖気の毒を消してくれるためだろうか、めまいが起きる気配はない。
「あらよっ」
諒が勢いよく斬りかかった。朱雀剣がぶうん、と唸る。
反応も出来ぬうちに一体がすっぱりと斬られて消滅した。二体目の剣にぶち当たって光の剣はぎんと鳴り、輝きを増す。
数の差など、はなから頭にないのだ。がんがんがんと押しまくって、諒は二体目もあっさり片づけた。
「怒りのパワーよね、あれって」
冴子がやや呆れを含んで、呟いた。
「え？」
「今の状況、どれをとっても嬉しくないから……それを全部〈妖の者〉のせいにして怒ってんのよ。便利な性格よね」
「はあ……」
「遅い遅い遅いっ！　馬鹿にするなって。はい、おしまい」
確かに「影」をいじめているとしか思えぬ口調で諒は三体目の首をはね、へへーんだのろ

ま、などと言い捨てた。かなり怒っている、らしい。にしてはガキくさかったりもするのだが。
「入口だったらこんなもんでしょ」
冴子は落ち着きはらって、そう言う。
「よくやったのひと言くらい欲しいね」
「甘っちょろかったんでしょ？　この程度で苦戦してたらこの先、話にならないわよ」
「むむむー……で、この先だけど、どこに行けばいいんでしょーかね」
諒は周囲に目を走らせた。しん、と静まっている。
気配ひとつ、感じられない。
「結界の中心でしょ？　近づけば近づくほどこっちの術力は圧迫されるんだから、それでわかるわよ」
「恐ろしいこと平気で言うなよ……」
「上だ」
ポツリと、亮介が言った。
眼鏡を外して、目をこらしている。
「見えないけど、多分……」
「とにかく上だな」
素直に頷いて、諒は先に立ち、階段に向けて歩き出した。

校舎内の電灯は、ご丁寧に全部点いている。にもかかわらず、何かずっしりとした暗さが周囲にのしかかっていて、視野狭窄に似た感覚が亮介にはあった。

明かりはあるのに、肝心なものは見えてこない。

眼鏡を外していたほうがいいのか悪いのか一瞬迷ったが、とりあえずポケットにしまいこんだ。

「影にも限りがあるはずだからなー……そうそう同じことは繰り返さないだろうな。今までに四体消されてる訳だろ」

「七十体くらい持ってたらどーすんのよ」

「げ」

「まあそれにしては、小出しにしてるけどね」

「脅かさないでくれます？」

事務室の前を通り、階段にたどりつく。

亮介はふと視線を流して、目を疑った。

ガラス張りの受付の向こうに、人影が見える。事務室の中に——何くわぬ顔で書類をめくっている事務員がひとり。

「人がいる⁉」

「え？」

亮介の言葉に、冴子が首をめぐらせた。彼女はずっと亮介の肩に手をおいたままでいる。

「……ああ、あの人は結界の外にいるわけ。だからこちら側で何が起ころうがわかりゃしないのよ」

「でも」

亮介は一歩踏み出した。

「つまり……閉じこめられてるんじゃないの？　あの人」

「そうかも知れないし、そうじゃないかも知れない。それに、あの人だけじゃなく、その辺の教室にも同じように残されてる人はいるわ。なんにせよ、この結界を張ってる本人をなんとかしなきゃ」

「……」

ねじれた空間——。

何故なのかはわからない。そこに立ちはだかる無形の壁を破りこちら側と向こう側をつなげることは、決して不可能なことではないのだと——なんとか出来ることではないのかと亮介には思えた。それを疑いもせず、亮介はまっすぐに事務室のドアに近づいた。

予想外の、不意をついた動きだったので、冴子はそれを追えなかった。亮介の行動にしては、あまりに唐突すぎた。

「おいっ！」

耳元で響いた諒の声に亮介が我に返るのと、ドアに伸ばした左手に雷雲に触れたような電撃が走るのが、同時だった。

「痛っ！」

「！」

力まかせに諒は亮介をドアから引きはがした。

「亮介ちゃん！」

冴子が駆け寄ってくる。びりびりと痺れる左腕を抱えて亮介はうずくまった。何が起きたのか、よくわからない。

「ばかっ！」

ひざまずいて、諒がいきなり怒鳴った。

「勝手に離れるなよ！　おまえを守るために俺がいるんだから！　そこんとこ全然わかってないだろおまえはっ！」

「――――」

亮介は目を見開いて、諒の顔を見返した。

諒に真剣に怒鳴られたなんて、初めてだった。

同じ目の高さで、諒が自分を見ている。必死な瞳で。

「……ごめん」

言葉が、口をついて出た。

「ごめん……」

冴子が、背後から、包むように手をまわした。左腕にあたたかく触れる指。

「無茶するんだから……」

「……」

冴子の言葉が優しくて、目を伏せたらぽたぽたと涙が落ちて、亮介は驚いた。自分が泣いているなんて信じられなかった。

「……もう、いいからさ……」

ぱん、と肩を叩いて諒が立ち上がる。

自分は、ずっと——ずっと、彼に謝りたかったのだ。……

亮介はぼんやりと、そう思った。

9　夜の校舎を強行突破

放送室は、校舎の四階にある。

厚い扉を開けると細長い通路があって、その奥に——機械に囲まれた部屋が広がる。

操作卓の脚に後ろ手に縛られて、亜衣は床に座りこんでいた。何の変哲もないただのコードなのに、ぎりぎりと手首を締めつける力はワイヤーロープ並みだ。何か普通でない力が働いているとしか思えない。

亜衣と二メートルほど間をおいて、部屋の隅の椅子にだらしなく座った人物がいる。

「悪ふざけにしては品がないわね。犯罪よ、これって」

観念しておとなしく縛られているような性格ではないのだ。それに、なにか話していないと不安になってくる。

「人をモノ扱いするのはやめてって、あれだけ言ったでしょう？　力ずくならあたしが言うことと聞くとでも思ったわけ？　そういう問題じゃないのよ！」

「――へっ」
宮倉はあらぬ方角に目をやったまま、口を歪めて笑った。
「おまえが悪いんだ……おまえが悪いんだよ」
「……」
亜衣は小さく息を呑んだ。違和感。さっきからずっと感じ続けている違和感。
何を言っても、決して届くことはないと思える。
「……帰してよ」
強い視線を向ける。
「いったいどういうつもりなの!?　何のためにこんな――」
「だまれ小娘！」
突然、宮倉が一喝した。いや、宮倉本人ではないはずだ。変に嗄れた、低い声。
亜衣が言葉を切ると、その表情は一変して、どこか腑抜けたような目つきに戻る。
「黙ってろ……おまえが悪いんだ、おまえが」
「……」
説明の出来ない恐怖が背筋を走り、違和感がますます強くなってゆく。
（どうしよう?）
亜衣は唇を噛んだ。

口ではいくら正しいことを言えても、相手はそれで改心するような輩ではないのだから。自分は女で、体力ではとても太刀打ち出来ない。常識のない奴に対しては女は常に無力だ。それが現実だ。

「おまえは待ってりゃいいんだ」

亜衣の心に答えるように、宮倉が言った。

「もうすぐ、面白いことになるからな……」

神経を張り詰め、気配を窺いながら進むために、どうしても足取りは遅くなる。

階段をひたすら上る間、特に目立った攻撃はなかった。校舎は四階建てだ。どの階へ行けばいいのか、判断などつかない。勘に頼るしかなかった。

「これは正しいと思うぞ」

二階から三階へ向かうところで、諒が呟いた。

「え？」

「上に行けば行くほど……こいつが」

ひょい、と朱雀剣をかざして見せる。

「怠慢になっていく」

「……なるほどね」
冴子が頷いた。微妙な差ではあるが、当初に比べてその輝きが確実に落ちている。
「亮介の感覚もいよいよ本物になってきたなー……やっぱいろいろと刺激を受けたからかね」
諒は亮介を見返った。ふと、かすかに苦笑する。
「りょーすけくーん、もういいって言ってるじゃないのよー」
「……」
亮介は口をつぐんだまま、上目遣いに諒を見た。
まさか自分が泣くなんて思わなくて……諒はまるで責めている気配はなくて、自分があまりに大人げなくてあまりに情けなくて——情けなくて、口がきけない。
傷つけたのに。
突き放して、勝手に疑って。
「……情けねー……」
ボソッと呟いた。
「——馬鹿者、青春は常に情けないのだ」
いたずらっぽい口調にいたわりと笑みを含んで、諒が言う。
「それが大きな勘違いなのだよ、亮介君。青春なんてねー、不様でみっともなくて情けねーもんなの！　人間なんてみんな弱っちくてどーしよーもねー連中ばっかしなの！　それが繕って

カッコつけても本質は変わらないの！　……そのへんをさあ、少しでも認めてやってよ」

「……」

「人間、そんな急に強くなったりカッコよくなったりしねーもん」

諒はゆっくりと、階段を上りはじめた。

「情けなくたっていいじゃん。俺さまなんて、情けなさを追究した結果、こんなに素敵な青少年に育っちゃったではありませんか」

「……それについては異説もあるわね……」

額を押さえて、冴子がポツリと言った。

「シャラップ。とにかく！　いいの、情けなくてもガキくさくても……頑張ってればそれでいいの！」

強引に決めつける。それから、声をやわらげて。

「……だからさあ、話してた、例の……友達もさ……多分、全然強くなかったんだと思う。……自信なんて、本当はなかったんだよ。でもさあ、誰だって強くなりたいし誰かに助けてもらいたいし——まだまだガキだし。仕方ねーよ、コケたって。大人になってコケたら恥ずかしいけど、ガキだったら笑ってごまかせるじゃん。少しずつ、強くなっていきゃいいじゃん。そいつだって、いつまでも昔のままじゃないよ、きっと」

邪気のない言葉。

やはりとことん楽観的なのだろう、彼は。

亮介はあとについて歩きながら、そう思った。

思うけれど——そんなふうに言い切って先に立って進んで行くような、まっすぐで強気な資質は、もしかしたら自分の憧れだったのかも知れなかった。ずっと、目指していたものなのかも知れなかった。

もしかしたら。

（きっと俺だって……俺のほうだって、五十嵐のこと、わかってなんかいなくて……傷つけてた）

憧れていたからこそ、自分からは遠くて。手が届かなくて。それを、相手のせいにした。

……

「カッコつけてても、所詮ガキはガキか……」

亮介は小さく呟いた。

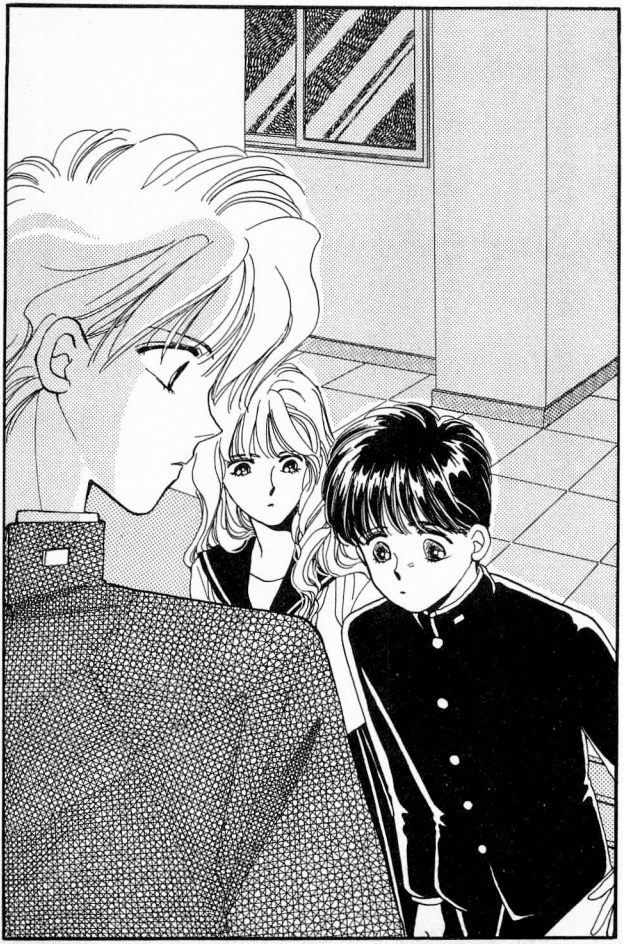
「かもしんないよな。——諒」

「……」

肩ごしに、諒が振り向いた。

何か言いかけて、やめる。はにかんだような眼で。

「なーんて、えらそーなこと言っても、おいらもガキだし。なははのは」



「いきなし逃げてんじゃないわよ」
「自分の言葉に責任持てよな」
へらへらと笑う諒に、冴子と亮介が口をそろえた。
「あら亮介ちゃん、あたしたちやっぱり気が合うわね」
「そーだねー」
「ちょっとちょっとーっ！　いきなりそんな所で和むなよ、ふたりしてっ」
「やかましいわね、そんなの当然でしょ!?　さっさと進んだらどーなのっ」
諒が慌てふためき、何食わぬ顔で冴子が言い返す。思わず諒はよろめいてしまった。
「こ……こいつら冷たい連中……」
「相手によるのよ」
「ガーン、なんてついてないんだ俺は……」
台詞の後半で、諒の表情はがらりと変わった。
にっ、と口許に笑みが浮かぶ。
「実にまったくついていない……」
「……」
素早く冴子が察して、亮介を一歩下がらせた。
階段の、ちょうど中ほど。

三階と四階の間にある踊り場が、すぐ目の前に見えている。
「さて……力くらべか」
朱雀剣を軽く振り、逆手に持ち直す。それを持つ右手を水平に目の高さまで上げて、剣先は斜めに下へ向ける。
そうして、諒はさらに一段上へ、足を踏み込んだ。
「！」
ビシビシビシッと凄まじい音があがった。空気が鳴っている。諒の全身を包む。——真空が、諒の身を切り裂こうとしているのだ。
ざっ、と首筋に、朱の線が走った。成す術なく、諒が膝をついた。
「諒!?」
「しっ」
冴子は、しっかりと亮介の腕を摑んで放さない。
「手を出さないで、亮介ちゃん。諒には諒のやり方があるの」
「……」
首の傷は、深くはない。全身を叩きつけてくる空気の刃は、ずしずしと重い衝撃として伝わりはするが。
「ええい、うっとーしいっ」

所詮、諒の結界を破るには至らない。タイミングをはかれば、こちらのものだった。諒は力を解放した。

ばりばり、と朱雀剣から光が散った。プラズマが広がる。

亮介は目をみはった。

雷光と真空の織りなす嵐。プラズマはカーテンのように真上の天井まで達し、青白い光を放つ。空気に絡みつく。

それは途方もない美しさだった。

光は、諒の術力の顕れだろう。

鋭くて、透明で、眩しい。そして強い。

冴子はきっと……そんな諒を知って、だからこそ好きなのだろうと亮介は信じた。信じられた。

空気の裂ける音が弱々しいものとなってきた。

「こんなもんでどうでしょーね」

諒が、目前にはいない敵に向けて、そう言った。

なめらかな動きで立ち上がる。

「そーれーじゃ、おしまいっと」

くるりと柄を持ち直した朱雀が、一閃した。

時間を切り取ったように、嵐は不意に消え失せた。風船の気が抜けるような音が、最後に残った。

剣をおろして、諒が振り返った。

「お待たせしました」

「なかなか派手だったわね」

亮介の腕を引いて、冴子が諒に近づく。

「ほんとにとことん俺のことが邪魔みたいだな、向こうさんは」

「平気か？」

諒の上着がところどころ擦り切れているのに目を留め、亮介は顔をしかめた。諒はにかっと笑って胸を叩いた。

「崎谷君が心配してくれるなんて大変嬉しいぞっ。しかしだね、あんなの初めからワタシの相手ではないのだっ」

「なに強がってんのよ」

脇から冴子の手が伸びた。ついと諒の顎を持ち上げる指。

「きれいに切られたわねー」

「こっこらこらっ、いいから放っとけ平気だからっ」

「すぐ治すってば」

「やだ！　痛いからやだ！」
「本末転倒でしょ。問答無用っ」
「いてっ、いていててててっ、痛いっつってんのにっ」
冴子の手を避けて諒はぎゃあぎゃあ騒いだが、とうてい逃げきれる相手ではなかった。傷のふさがった首を押さえて、ひー、と悲鳴を上げている。亮介は半ば呆れてその攻防を見守ってしまった。
「手間かける奴よね」
冴子は両手をぱたぱたと払っている。
「前から思ってたけど、冴子さんって強いねー……」
感嘆の意をこめて言ったら、冴子がきょとんとして見た。
それからクスッと笑って、亮介の頭をよしよしとなでたりして。
「やっぱり亮介ちゃんって可愛いよねー、うんうん」
「あのー……」
「亮介っ、ほだされたらいかんぞっ。そいつは魔女だっ」
「ふん、くやしかったら亮介ちゃんくらい可愛いことを言ってみ！」
「あのー……」
（……な、何をやっているのだろうこのふたりは……）

話に入っていけない。
コホン、と冴子が咳払いをした。
「……いけない、諒ちゃんのペースにはまってしまったわ」
「嘘をつけ、嘘を」
「とにかく！　遊んでる場合じゃないのよ。先へ進みましょう」
悪びれもせず、そう宣言する。諒がなんとも苦い顔をした。
「残念ながら俺も同意見でして」
「それはよかったわ」
「……」
言葉もなくのそのそと諒は歩き出し、圧倒されつつ亮介もそれに続いた。

「あそこにああいう仕掛けがあったってことは、やっぱ四階でいいんだろうな。……とか言って屋上だったらどーしよう」
階段を上りきって、諒が呟いた。人気のない廊下がずっと続いている。
「亮介、見当つくか？」
「うん……」

のしかかる暗さは、さらに強くなっていた。確かに明かりはあるのに、それがまるで役にたたない。廊下の奥へ行くほどその暗さは度を増して、突き当たりに至っては真っ暗に見えた。

ブラックホールのように。

「ずっと奥は真っ暗になってるな」

「真っ暗になってる？」

諒が反問する。諒にはブラックホールは見えないのだ。

「多少そんな気もするけど……」

「亮介ちゃんの言うとおりよ。確かにそう見えるわ」

冴子が頷いた。

「あの奥には何があるの？」

「図書室と放送室と、視聴覚教室と……あと、この階は一年生の教室だったな」

諒がぶつぶつと答えた。転校初日に、校内はすべて把握している。校舎が大きいうえに入り組んでいて、思わず迷ってしまったりしたものだが——それはこの際忘れることにして。

「では行きますか」

「あっ！」

一歩踏み出すのと同時に、強烈に嫌な予感が亮介の神経を走った。

「え!?」

廊下の向こうに小さな点が見えたと思ったら――。
機関銃で打ち出したような勢いで、無数の物体がこちら目がけて襲いかかってきた。
「わーっ、何だこりゃ」
朱雀剣からプラズマが広がり三人の前で盾になった。それをつき破らんばかりにぶち当たって落ちるのは……。
「やだっ、本じゃないこれ」
「あの野郎、学校の備品を何だと思ってるんだっ」
わざわざハードカバーの本ばかり選んでいるあたりが嫌味だ。雨あられと飛んでくる本には何かしらの妖力がこめられているらしく、三人をそれた本は壁にめり込んで穴を開けていた。
「だーっ、もったいないもったいないっ」
諒の口調にはまだ余裕があるが、その横顔はかなり険しくなりつつあった。そろそろ術力が圧迫されて、本来の力が出せなくなってきているのだ。
砲丸よろしくすっとんできた『家庭の医学』が、諒の結界をまんまと通過した。冴子の左肩をかすめる。
「冴子、悪い」
振り向けないまま、諒が言う。
「大丈夫よ、医者いらずだから」

かすっただけでセーラー服の肩が裂けたが、冴子は声もあげなかった。
「……こーれーは、嬉しくない」
空いている左手で前髪をかきあげて、諒は呟いた。
「どうすりゃいいって、これはやっぱ図書室のドアを閉めてくるのがいちばんいいんだろうなー」
「どうやって閉めに行くわけ……？　もう少し現実的なところで止めてよ」
「げんじつてき……そんな言葉はワタシの辞書にはない」
冴子の言葉にやけに堂々と答えて、朱雀剣を両手で持ち直す。
「面倒臭いから、図書室までこれで突破しちまうぜ。おふたりとも、ちゃんとついてきてね」
「マジ？」
訊き返しながらも、冴子は亮介の腕をしっかりと摑んでいる。亮介は息を詰めて、頷いた。
「どーせぶちまけるなら、教科書とか問題集にしてほしいよな」
笑ってみせて、諒は進撃を開始した。
殺人的な速度で本は降り注ぎ、障壁を破ろうとする。諒は歯を喰いしばり、川の流れを押し戻すような思いで突き進んだ。一歩踏み出すごとに、抵抗は強くなる。朱雀剣は悲鳴をあげながら、それでも力を全開して期待を裏切らなかった。
（こんな感じ……）

諒の結界から外れないように必死でついていきながら、亮介はまた、ふっ、と妙な感覚にとらわれた。
（どこかで……昔、こんな感じどこかで……？）
なんとかなる。
そう囁く声。
なんとか出来る。
（え？）
亮介は視線を動かした。ハードカバーの乱舞。
世界名作全集。地理世界シリーズ。生物図鑑。
「掃除が大変だな」
叩き落とした本を踏み越えながら、諒がぼやいている。
（……？）
「亮介ちゃんっ」
冴子が突然、悲鳴に似た声をあげて亮介の肩を引き寄せた。
「！」
それまで自分の頭があった所を紙の弾丸が貫いていくのを見て、亮介は絶句した。
「冴子さ……！」

「うわ」

今度は冴子が身をすくめて亮介にしがみつく。ぶん、と背後を本がすり抜けた。

「諒ちゃん、こんな所で力尽きたりしないでしょうねっ」

「誰がっ」

諒の返事は強気だが、結界はじりじりと弱まっていた。廊下を半分も進んだだろうか。横を見ると、一年E組の教室がある。

「あと五組でしょおっ」

諒はぎっと前を睨んだ。

「負けませんよ、ワタシは」

「諒、あれ！」

亮介が叫んだ。前を指さす。

ゆらゆらと、向こうから近づいてくる——黒い影。

鎧武者。

さすがに諒も背中に冷たいものを感じた。

本の雨はその身体を貫通してしまう。ダメージを与えるには、術力をもってしなければならない。影とは、そういうものである。

鎧武者はまっすぐに三人へ向かってきていた。

「……手が込んでることで」
諒は呟き、朱雀剣を力をこめて握り直した。

10　レボリューション

「おい、冴子。おまえ、結界の維持くらいは出来るだろーな」
諒が低く言った。冴子がはっとして目を上げる。
「え、でもそんな……諒ちゃんはどうすんのよ!?」
「どうせこの程度の結界じゃ剣は防げないからさ、同じことだろ」
「ちょっと！」
鎧武者が、ぐわっと剣を振り上げた。これまでの「影」とは動きが違う。格段に動作が速くなっている。
朱雀剣が唸り、それを受け止めた。がりがり、と嫌な音がした。
「！」
結界の中に亮介と冴子を残して、諒は跳躍した。諒の身を守る壁はなくなる。
「諒!?」

思わず亮介は叫んでいた。無茶だ。盾のひとつもなく、鎧武者と本の弾丸の両者を相手にするつもりか。

さらに、ここまで来ると敵の力はかなり濃厚に作用して、鎧武者の力は強くなり、逆に諒は実力のすべてを出しきることは出来ないのだ。初めから不利なことはわかりきっている。

が――。

ぎらぎらと瞳をきらめかせ、諒は鎧武者に斬りかかった。本と本の間を神技のようにすり抜けて。微妙な隙間を動物的な勘で読み取って――。

剣と剣がしのぎを削り、甲高い悲鳴をあげ、火花を散らし、オーラが渦巻く。

朱雀剣がはね返され、諒はバックステップしながら襲いかかる本を三冊同時に斬り捨てて、再び突っ込む。

結界に包まれて、亮介はその動きに目を奪われていた。腕を摑む冴子の手に、力がこもる。

（凄い……）

鎧武者の体を通過して飛んできた本を叩き落とし、朱雀をそのまま突き上げ、それが阻まれると身をかわしてまた本を斬る。その速さはまさに、目に留まらないと言ってよかった。

守る対象人数が減ったせいか、結界は強度をもち直して亮介と冴子をしっかりと覆っている。冴子の手から、かすかな震えが伝わってきて、亮介は彼女を見やった。

熱い――真摯な横顔。

「……もっと力があったら……！」

「――――」

冴子の呟きは誰に向けられたものでもなかったが、亮介の胸に強く響いた。

――もっと力があったら？　……いや、力はある。

力はあるのに。

（え？）

亮介は自分の両手を見つめた。

（なんだ？）

鎧武者が横なぎに斬りかかった。諒は頭のすぐ横で、それを受け止めた。びいん、と嫌な響きが朱雀剣を伝わった。

「!?」

諒の顔色が変わった。

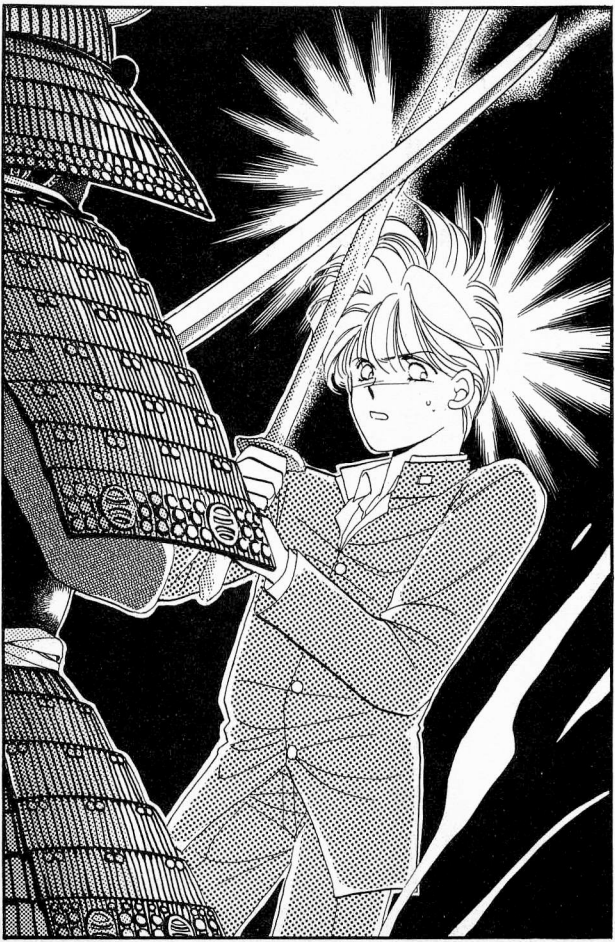
（朱雀！）

すう、と光剣の輝きが落ちていく。ざっ、と諒は跳びのいた。

力が萎えていく感覚。そんなはずはない。この程度で術力を消耗しきるはずはない。

「畜生が……！」

本を斬り払うと、またも不快な音をあげて朱雀剣が痺れた。諒は舌打ちした。



「頼むぜ、朱雀ちゃん……」

忍のことが脳裏をかすめる。彼に笑われるわけにはいかないのだ。

（しっかしあいつ……こんなに結界が強いってわかってて俺を寄越したのかよ……責任とれよな――……）

戻ったら文句のひとつも言って、雇用条件を改善させねばなるまい。――生きて帰れたらの話だが。

（生きて帰れたら？）

諒は自分の考えに憮然とした。

（なんたる弱気！）

やり方はいくらでもある。諒の口許に、かすかに笑みが甦った。

（諒ちゃんの存在価値は、強気の二文字だぜ――）

鎧武者が、勝ち誇ったように踏み込んだ。突き出された剣がまっすぐに諒の胸元を狙う。

諒はすっと右の掌を開いた。朱雀剣が煙のようにかき消えてしまい、亮介は声にならない叫びをあげた。

「よせ、やめろ！」

「――――」

ずしっ、と熱と痛みの重量が両手にかかり、諒は奥歯を噛みしめた。

鎧武者の剣先は、諒の素手で摑みとられ、ぐいとねじり上げられていた。
「……希沙良君とやらの専売特許じゃないんだよね、これって」
首を曲げて本をかわし、諒は鎧武者を睨みつけた。「手刀」の要領で、両の掌を術力によって強化したのだ。「剣」を作るよりも、こちらのほうが術力の消耗が少ない。
小刻みに剣が震えている。鎧武者が怪力で諒をはねのけようとしている。ぎりぎりぎり、と刃が素手にくいこみ、左手の親指のつけ根から鮮血が噴き出した。
持久戦になれば、力負けする。
傷が深まるのも気にせず、諒は渾身の力で剣先を押さえつけた。そして。
「痛いじゃないのよっ」
ひと声あげて、思いきり右足を蹴りあげた。同時に身体をひねって宙に舞う——。
鎧武者の頭部が吹っ飛んだ。
「やった！」
亮介は拳を握りしめた。
普通に蹴りを加えたくらいでは鎧武者はびくともしない。が、諒はその瞬間、足先にすべての術力を集中したのだ。
「『手刀』ならぬ『足刀』ってとこですかね」
そう呟いて着地すると、諒は本をかいくぐりながら三歩後ろに跳んで、亮介たちの結界に転

がりこんできた。
「諒！」
「傷は!?」
「亮介ー、疲れたよー。冴子ー、痛いよー」
ふたりの叫びに、へらへらと諒は答えた。笑ってはいるが、両の掌はざっくりと切れて、熱い血がだらだらと床に落ちている。亮介は派手な流血を間近に見て、思わず目をまわしそうになってしまった。
「無茶するからあんたはーっ！」
「肉を斬らせて骨を断つってやつでしょー」
冴子に手をとられながら、諒はにっこりと答える。——肩で息をしている。
「あ、あれ?」
亮介が目をみはり、声をあげた。
「え?」
振り向いて、諒もげっ、と呟いた。
てっきり消滅するものと思ったのに、頭部を失った姿勢で、鎧武者はそのまま突っ立っていた。それどころか、じわり、と腕が動いて剣を持ち上げる。
「そんなの話が違うじゃないのよ……」

諒の眼がいよいよ厳しくなった。傷もふさがっていないのに、冴子の手を振り払う。
「ちょっと……諒!!」
冴子が叫んで、その手首をつかまえた。
「何考えてんの!?　待ちなさいったら！」
「諒！」
冴子の表情から、亮介にも事の重大さは伝わった。
（まずい）
このままでは駄目だ、と亮介は鎧武者に目をやった。
（このままでは駄目だ……なんとかしないと）
なんとかしないと。
（あ!?）
亮介の内で、なにかの歯車がかちりと噛み合った。
頭の芯が、すっと冷えていって――。
「やめて！」
冴子の声がした。諒が結界を駆け出すところだった。朱雀剣は現れない。鎧武者が、のしのしと近づく。
「――!!」

がくん、と亮介は膝をついた。
「違う、そうじゃない、それじゃ駄目だ、駄目だ……!!」
「亮介ちゃ……!?」
ぎょっとして冴子が見下ろす。目の前が真っ白になった。
「なに!?」
諒も動きを止めた。空間が洗われてゆく感覚。
そこに存在するすべての力が停止する。
一瞬の、間があって。
ばさり、と一冊の本が床に落ちた。それが引き金になったように、どさどさと廊下を本が埋め、しん、と静寂が戻った……。
諒の張った結界は消え失せていた。そして、鎧武者の姿も——どこにもなかった。
「? ……」
ゆっくりと諒が首をめぐらせる。
亮介も呆然と顔を上げ、周囲を見渡した。
たちこめていた暗雲までが、きれいに失せている。
「うそ……」
冴子が口許を押さえて、呟いた。

「術力中和……？」
「え？」
彼女の視線が自分に向いていることに気づいて、亮介は小さく訊き返した。
「中和!?」
諒が大声をあげて振り返る。
「そんな、だって……出来るのか、そんな事？」
「見たわ、あたし……絶対そうよ！」
ふたりが何を言い合っているのか、亮介にはよくわからない。ただ、漠然と……今のことは自分が起こしたのだと、そうとらえてはいた、が……。
がたん、と廊下の奥の扉が開いた。
三人はいっせいに視線を投げた。放送室のドアが、小さくきしみながら、ゆらりと揺れた。

青白い月が出ている。
校舎から漏れる光を受けながら、校門に背を預けていた斎伽忍は、人知れず目を細めて微笑した。
爆発を、彼はずっと待っていた。封じ込められた力が解放される時を。

術力中和者（オーラバスター）。

妖力、術力を問わず、分解し無力化してしまう能力。実在すら危ぶまれていた能力だったが、信じてみた甲斐はあった。

自在にコントロールする、という訳にはいくまい。が、それでもいいのだ。彼は切り札でいい。その能力があるという事実さえ確かならば、それでいい。

布陣は為されつつある。未だ前哨戦の域にも達しておらず、個々の戦力もはなはだ未完成でしかないが、それでもいずれ必ず決戦の時は訪れる。避けられぬその時までに、どれだけ力を高めておくか——それが、現在の課題だ。

忍はコートのポケットに両手を入れ、四階の窓を仰ぎ見た。終幕にはまだ早い。最後に、もうひと幕上がらねばならなかった。

「洒落たことをする」

放送室のドアの奥から、低く嗄れた声が響いた。

宮倉の声とは違う。が、ドアの陰に現れたのは確かに宮倉の姿だった。

かすかな唸りとともに、諒の手に朱雀剣が戻った。輝きは、完全な時とほとんど同じだ。それを構え、諒が尋ねる。

「名前を聞こうか」
「私の名か」
宮倉の形をとった〈妖の者〉は面白そうに笑った。
「随分永いこと眠っていたのでな、もう忘れるところだったが――蝉里、という」
「センリ先生か。なかなか実力者でいらっしゃる」
「皮肉はいらん。中和者を抱えておいて、よく言う」
その表情は宮倉とはまるで違う。同じ顔でありながら、蝉里と名乗る〈妖の者〉は狡猾を絵に描いたような眼をしていた。三人の顔を見渡し、口を歪める。
「では、その中和者をこちらにもらおうか」
「なに!?」
「逸るな、小僧。忘れたのか？　利はこちらにあるはずだ」
蝉里＝宮倉はドアをいっぱいに押し開け、廊下へ足を踏み出した。その左手にひきずられるように連れ出されたのは、両手両足を電源コードで縛られた神原亜衣――。
「亜……神原さんっ」
「崎谷く……」
亜衣は、安堵と恐怖のないまぜになった顔を亮介に向けた。気丈に堪えてはいるが、ずっとひとりきりで〈妖の者〉と対峙していたのでは、不安もひとしおだったはずだ。

「予定では、ここへ来るまでに邪魔者は消して、崎谷亮介自身にも多少の傷は負わせておくはずだったのだがな。つくづく余計なことをしてくれた」

蝉里は右手を広げ、亮介たちのほうへ向けた。

「しかし、崎谷亮介の中和能力はまだまだ本人の意志からは遠いところにあるようだ。私が望んでいるのは、そういう不安定な術力でな。期待を裏切らずにいてくれて、実に喜ばしい。あとのふたりは駄目だ、完成されすぎている」

その右手から、強い妖力が放出される。半径五メートルほどの半球を描いて、結界が形成された。手を出すわけにもいかず、諒は朱雀を構えたまま歯ぎしりした。

「勝手なこと言いやがって……」

「都合というものがあるのだ、互いにな。利害が一致しない以上は、立場の強いほうが利を勝ちとる。自然の法則だろうが、小僧」

「俺はそういう理屈をしたり顔で言う野郎は嫌いだ」

苦虫を噛みつぶしたような表情で、諒が言い返す。が、それ以上蝉里の神経を逆なでするのはきけなかった。これ見よがしに、後ろ手に縛られた亜衣を引きたてて、蝉里は声を荒げた。

「さあどうした、崎谷亮介。この小娘を見捨てる気でないのなら、この結界の内へ入ってこい。私が欲しいのはおまえだけだ。この娘は解放してやってもいいんだぞ」

「――――」

信用など、出来るはずはなかった。
しかし、従わずにいられるはずなど、さらになかった。
誰もが無言だった。諒はただぎっと敵を睨み、冴子は何も言えず亮介を見つめていた。
亮介を、こちらへ近づけてはいけない、ということは亜衣にもわかっていた。それがわかっていて、助けて、などと叫ぶことは勿論出来ない。自分自身が許さない。しかし、心と逆のことを言っても、それで素直に退くような三人ではないと、亜衣は知っていた。むしろ逆効果にしかならないだろう。
叫んでは駄目だ。焦りを生むだけだ。そう胸の内で自分に言い聞かせて、唇を噛む。
亮介は、一度だけ諒に視線を投げた。目が合った。
「……」
そして、迷わず蝉里に向けて歩き出す。
結界は、簡単に通り抜けることが出来た。蝉里がくっくっと喉を鳴らして笑った。
「なんてことだ！　こんなに素直な連中ばかりだとは思わなかった。こんなことなら、初めから小細工など弄するのではなかったな」
「神原さんを放すんだろう?」
自分でも驚くような低い声で、亮介は言った。
「そうだったな」

軽い動作で、蝉里は亜衣を突き放した。手足を束縛していたコードがほどけ、亜衣はよろけながら亮介の許に駆け寄った。

「崎谷君……！」

「早く、諒の所に」

亮介は亜衣の肩を押しやった。小さく頷いて亜衣は歩を進めようとしたが、はっと息を呑んだ。亮介の背後で立ちすくむ。

「!!」

振り向いて、亮介はすぐに事態を悟った。

「結界を……！　神原さんまで閉じこめて！」

「甘すぎるな、小僧。娘を助けてやる義理など、私にありはしない。心配するな、ちゃんと喰ってやる」

「てめえ！」

結界の外で諒が怒鳴った。外から朱雀剣で結界を破ろうとするが、プラズマが散るだけだ。どうやら妖力をすべて——校舎に張っていた結界の分もすべて——この結界へ集中したらしい。それに、「剣」は結界を通過することは出来ても完全に破ることは出来ない場合が多い。

「観念しろ、崎谷亮介。私は自分が狩られないためにどうしてもおまえが必要なのだ。おまえが私を倒そうと思えば、この宮倉とかいう者の体を殺さねばならん。それと同じことだ。どち

らも、責められることではあるまい。生きていく以上、誰しも犠牲は踏み台にしているものだからな」

「……宮倉先輩は……！」

思わず亮介は問い返していた。

「亮介、そんな奴の話に乗るな！」

「宮倉？　……そうだな、つい先ほどまでは奴の自我も多少は残っていたのだがな、今や完全に私に同化したようだ。実に愚かしさというのは罪悪だな……その娘を手に入れたいなどと、虫のいいことを。その望みの第一段階に立ち会わせてやっただけでも、私は慈悲深いというものだ。まあしかし、奴の自我がどうなろうと、この体はまぎれもなく宮倉のものだ。まだ生きている。みすみす殺すわけにはいくまい？　……」

「――……」

殺す、なんて言葉は、亮介の意識の内になかった。

「聞こえのいい言葉で、君子ぶるのもいい加減にしろ！」

諒が怒りに両手を震わせ、叫んだ。

「所詮、同じことじゃねえか……同化しちまったんなら結局は同じことだろうが！　もうどうしたって戻らない……！　今さら生かすも殺すもないだろうに、よくそんなことを言えるな、ええ!?」

諒の怒りは、宮倉のための怒りだ。

決して好ましい人物ではなかった。が、だからといって失われていいはずはなかった。命とは、そんなに軽いものではない。

涙も落とさんばかりに激怒している諒の心は、亮介にもまっすぐ伝わった。

「俺は……」

亜衣を背にかばって、亮介は蝉里を見据えた。

「俺はおまえの言いなりになんかなってやらない……理屈なんかわからないけど、俺には俺の大切なものがあるし、不幸にしたくない人もいるんだ」

「ならば私に勝てるというのか。力の制御も出来ぬくせに――」

蝉里の手が伸びた。亮介は動けなかった。金縛りのように。

がっしりとした手が首に絡みつき、絞めあげる。

「亮介!!」

諒の声が聞こえた。亮介はぎっと歯を噛みしめ、呪縛に耐えた。

「……やめて、やめてったら!」

亜衣が悲鳴をあげて蝉里の腕にしがみつく。

「小娘!」

蝉里の腕のひと振りで、亜衣は勢いよく床に叩きつけられた。はね起きようとするが、体の

自由がきかない。
「苦しいか？　苦しければ私を受け入れろ。すぐに楽になる」
じりじりと蝉里は力を強めた。
「おまえが言うことを聞くなら、他の者は見逃してやる。それならどうだ？」
「……おまえの、約束……あてにならな……っ」
汗が目に入り視界が歪んだが、相手を睨みつける瞳はそのままに、亮介は声を絞り出した。途端に蝉里の腕に力が加わり、息が詰まる。堪えきれず、呻き声が漏れた。
「生き延びたいと思わんのか、小僧？　用心しろよ、喰ってしまいたくなる……。まだ苦しみが足りないか。死の間際まで行けば、誰であろうと助けてくれと叫ぶものだのにな」
「――――」
声が出ない。ブラックアウトする視野。耳鳴り。
「亮介！　そいつをなんとかしろ！　出来るから――おまえには出来るんだから！　亮介!!」
諒が叫んでいる。――
「亮介ちゃん、亮介ちゃんには凄い力があるの！　それをまず信じて！　何も迷わないで！……」
冴子の言うとおりかもしれない。そうかもしれない。さっき鎧武者を消したのは確かに自分自身で……だけど、やり方なんて忘れてしまった……。

「崎谷君！　崎谷君、崎谷君!!」
亜衣の悲愴な声。泣いてる――？
「ごめんなさい――」
（！）
ずきん、と心臓が痛んだ。
（……何を謝るの……どうして謝るの？　臆病だったのは俺のほうで、君が言ったことは本当だったじゃないか！　いつも……本当の俺のこと、見てくれていたじゃないか……）
悲しませたくなかった。泣かせたくなんかなかった。
罪悪感なんて、抱えさせたくなかった。
ただそれだけで……ただそれだけを思って。
他には何も考えられなくて――。

「!!」
諒は目を覆った。白光。強烈なエネルギー。
音はなかった。
ただただ、凄まじい力に圧迫されて、息が詰まる。嵐。いや、爆発。

空間を浄化し尽くす、第三の力。

「……きっ、貴様……」

蝉里があとずさり、唸った。

「馬鹿な……二度も続けて、こんなに強力な……いったいそんな力が、どこに……」

床にうずくまり、亮介はぜいぜいと喉を鳴らした。呼吸困難に陥っていた。

「崎谷君!?」

金縛りを解かれて、亜衣が走り寄り、膝をつく。

「……」

激しく咳込みながら、亮介は顔を上げて亜衣を見た。

微笑して。

「……良かった」

掠れた声で、そう呟く。言葉もなく、亜衣の両眼から、涙が溢れた。

「せっかく張った結界もおじゃんだな」

諒はひと跳びで蝉里の目の前に立ち、喉元に朱雀剣を突きつけた。言葉には煮えたぎる怒りがこめられている。

「人間を甘く見たんじゃないかい、亮介をさ……。力が尽きるどころか、こいつは完璧な妖力中和だ。この期に及んでもまだ偉そうな口をきけるか？　センリ先生とやら」

「――――」

追い詰められて、蝉里は絶句し、がたがたと震えだした。

哀れみを乞うような声をあげる。

「わ、私を斬れば宮倉の体も……」

「ほざくな、偽善者!!」

蝉里の言葉は、諒の最後の怒りを刺激した。迷わず朱雀剣を突き降ろす。次の瞬間、かっと閃光があがった。

「……」

亮介は、そして亜衣も冴子も、沈黙してその光を見つめた。何も言えなかった。蝉里の体は霧のように消えて、すべてが嘘だったような錯覚を残した。――

からん、と小さな音がした。床に、緑色のかけらが落ちていた。諒がかがんでそれを拾い上げる。

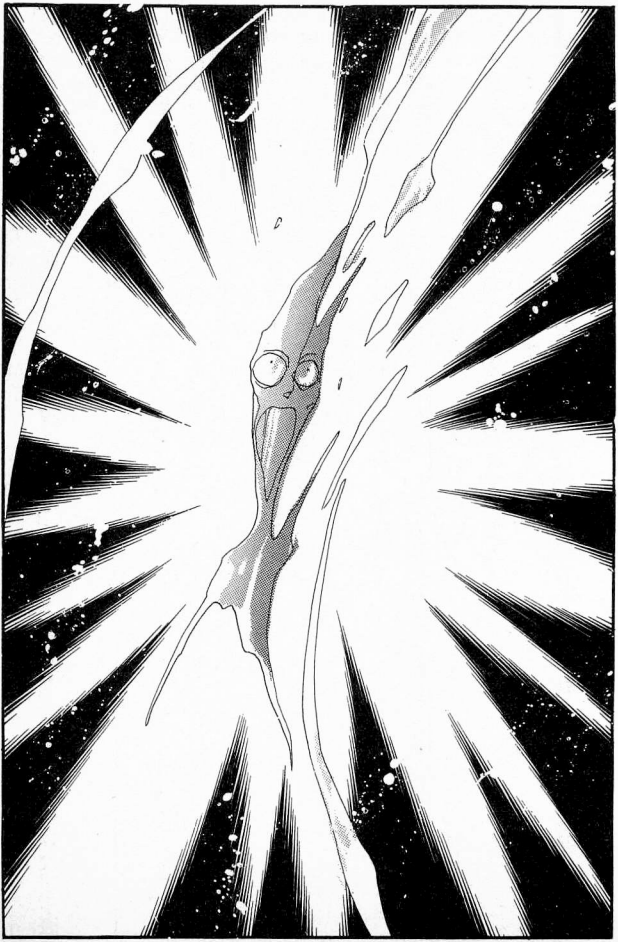
それが、〈妖の者〉のなれの果てだった。「玉」と呼ばれる緑色の石ころ。

諒は唇を噛んだ。

「……大丈夫だったか、亮介」

振り返る表情には、その苦さは残されなかった。

「疲れた」



立ち上がりながら、複雑な笑顔で亮介が答える。
にっ、と笑みを返して何か言いかけ、諒は突然はたと口をつぐんだ。ひどく、奇妙な……表情を決めかねた顔で。
「――いつからそこにいた!?」
その視線は亮介たちの背後、廊下の中途の一点に向けられていた。冴子が振り向いて、あら、と呟いた。
「たった今だよ」
コートのポケットに片手を入れたまま、艶然と忍が笑んだ。
階段を上ってきた気配はなかった。神出鬼没とはこのことだ。
「そろそろケリがついたようだったからね」
「……その調子じゃ、ずっと下にいたわね。むっ」
諒は右手を振り、朱雀剣を消した。ぐしゃぐしゃと頭をかきまわしながら忍に近づく。
「あんっなに苦労して死にそうになってんのに、助太刀のひとつもなしで見てたわけ!?」
「手を貸せば怒るくせに。なんなら次回からは考え直してもかまわないよ」
「言ってみただけでしょっ、言ってみただけ！」
諒はむくれたまま「玉」を忍に手渡した。忍は確かめるようにそれを握りしめ、コートのポケットにしまいこむ。

そして、まっすぐに諒と目を合わせ、ひと言。
「よくやったな」
「ふん」
「忍さま忍さま、あたしは？　あたしがついてきて正解だったでしょ？」
ぱたぱたと冴子が駆け寄り、忍の腕にじゃれついた。忍が苦笑する。
「そうだね。冴子もよくやった」
「だーっ、べたべたくっつくなおまえはッ」
諒が癇癪を起こしている。
亮介と亜衣は顔を見合わせた。
クスッと笑って、亜衣が涙を拭った。
「亜……神原さん」
「あのね」
言いかけた亮介を遮って、亜衣が手をあげた。
「前から気になってるんだけど、どうせなら崎谷君、『亜……』で止めないで、ちゃんと呼んでほしいな」
「あっ……」
亮介は絶句した。かっと赤面する。

が、ここで沈黙していたら、今までの二の舞だ。
「え……えっと、俺……思ったんだけど」
必死に言葉を紡ぎ出す。
「なんか……臆病だったよね、ずっと……多分、ふたりともさ……。小さなこと考えすぎて、こだわってて……。でも、多分、大切なことはきっと別のことで……つまり」
「よっ、お疲れさん」
いきなり、ばん、と肩を叩かれて亮介はつんのめった。
「なんかバタバタしたけどようやくカタついたな。腹減ったろ？　十九郎が晩飯おごるってさ」
誰かと思えばやっぱり希沙良だった。いつの間に現れたのか。
「考えてみれば昼飯食いそびれてるだろ、おまえさんたち」
「えーっと……」
階段の降り口に、十九郎が立っている。冴子と諒が何やら口論しながらそちらへ向かっているところだった。
「おまえの分は自分で払えよ、希沙良」
「えっ、なんでだよおっ、俺、ちゃんと謝ったじゃんよっ」
廊下の向こうから十九郎が冷ややかに言い、希沙良が声を張り上げる。

やけに騒がしくなってしまった。
「えーっとー……」
亮介はため息をついた。
亜衣も、仕方ない、という感じで肩をすくめる。
「……い、行こっか」
「そ……そうね、ご飯食べに」
階段へ向けて歩き出す。と、忍が廊下に立ち止まって、ふたりのことを待ってくれていた。
「大変でしたね」
まず、亜衣に言う。
「怖い思いをさせてしまって、すみませんでした」
「あっ……いいえ！」
「それから」
亮介に向けた目は、微妙に、先刻までとは、違っていた。
関門をひとつくぐり抜けた者への敬意と、真の仲間と認めた者への親しみの念をこめて。
「今回は、誰より君が辛かったな……本当によく頑張った」
くしゃ、と頭の上に優しく手が置かれた。
「――――」

その手があまりに神々しくて、その時は何も言えなかったけれど。
きっと自分は——運命さえも変えるかもしれない、本当の仲間たちに出会ってしまったのだと、亮介は信じていた。

終章　とりあえずグッドラック

「しばらく音沙汰なかったと思ったら、今ごろ電話してくんだもんなっ」
校内の公衆電話にとりついて、諒はぶちぶちと言った。
「今日何の日か知ってる？　スポーツ大会だぜ。俺さあ、一応実行委員なんで、校庭にライン引いたり得点書き取ったりしなきゃなんないのよっ。それをさーっ」
ひとしきり文句を続けてから、バンダナを巻いた頭をぐしゃっとかきまわす。ゼッケンのついたジャージを着込んでいる。
「で、事後処理はうまくいったんでしょ、勿論。そりゃそうだよね、それくらいしか金の使い道ないもんね。……ひがんでませんよ。……ないってば。あああどーせ貧乏人だよ俺はっ。……とにかくうまく全部ごまかせたんでしょ？　ならいいんだよ。法的に問題がなければ」
つまらなそうに確認する。事件のすべては、表沙汰になることなく処理されるのだ。
「あのさあ俺、ひとつひっかかってんだけどね。……あんた今回の件、単に面白がってなかっ

たか？　……そんなことあるでしょ、だまされませんよワタシはっ。あんたが手え下せばなんとかなる所でわざと何もしないで、こんがらがるのを黙って見てたんじゃないの？　あんたの性格ならそれくらいやるでしょっ。……嘘だね、嘘嘘っ。なーにが信じてたよ、笑わせんじゃないわよっ。……あ？　……あ、あのなあ」

諒は深く嘆息した。何を言われたかは定かでない。

「……えーとー……ま、その件は置いとこう。あとさあ、あんたがいつ亮介と初めて会ったのか、亮介が知りたがってたぜ。……え？　駅ですれちがった？　それだけ？　……普通それだけでわかるか!?　その辺がうさんくさいんだよ、あんたは。ああそう、はいはいはい」

二度目のため息。

「それでー……何か急ぎの用じゃなかったっけ」

うんざりして前髪をかきあげる。と、その指が不意に止まった。

しばしの沈黙。

「……へえ……そうなんだ……」

視線がつと下を向く。それから、無理に気をとりなおして。

「大丈夫！　わかってるわかってる！　ホント、まかせろって。……明日？　……今日の夜？　……了解了解。わかってるってば。うん。んじゃまたこっちから電話する。ということで。では」

やたら明るく言って受話器を下ろし、諒はもう一度、大きく息をついて髪をかきまわした。

「どうした?」

顔を見るなり、亮介が言った。

記録用のノートを小脇に抱えている。後ろでは亜衣がサッカーボールを篭に入れているところだった。場所は校庭。天気は快晴。つつがなくスポーツ大会は進行し……問題は何もない。

「電話、忍さんからだったんだろ?」

すっかり表情を読まれている。

俺ってそんなに単純かしら、と内心諒は考えこんでしまった。実際、自分でもかなり情けない顔をしていたと思ったりもする。

「また転校ですってよー」

へらっと笑って答える。

「なんだそれは」

すかさず亮介が訊き返した。亜衣も目を円くしている。

「長野行かなきゃ、みたいな……。なんか変な事件が起きてるんですって」

「……ああ……そうか……」

ピーッ、とホイッスルの音が遠くに聞こえる。
「……仕方ないよな、それは」
「うん。そういうこと」
あっさりと亮介が言い、諒も頷いた。
本当に、仕方のないことで——。
「どうせまた来るしさ」
これは確信して、諒がつけ加える。
「うん……あ、そうだ」
ぱちん、と亮介は指を鳴らした。
「冴子ちゃんに聞いたんだ、ほら……おまえが秘密主義にした理由ってのをさ。だけど、どうしても納得出来ないんだって言うんだよね。絶対まだ裏があるから、機会があったら問い詰めておけって」
「……ちょっと待て、なんで冴子ちゃんなんだ!?」
諒が眉の根をよせて口をはさんだ。亮介が、う、と詰まって目をそらす。
「……えーとそれは——……だからこの人が亜衣ちゃんだから、自分も冴子ちゃんじゃないと不公平だって、彼女が……」
「なーにーが、不公平だっ。なにがっ。それとこれとは問題が違うだろーが、全っ然っ」

「あら、それは別にいいじゃない、水沢君」
亜衣が横から話に参入した。
「水沢君だって、いつの間にか崎谷君に諒、なんて呼んでもらってるし、人のこと言えないと思う」
「……そ、それはまた何か違う……」
亮介は頭を抱えた。
「神原さん……キミってばワタシのことを応援してくださってるんじゃなかった？」
「今となってはライバルだもの」
「違うっっ！　そういう話じゃないっ」
諒と亜衣の間に割りこんで、亮介は必死に話をひきずり戻した。
「ふーんだ、この色男」
ぺん、と平手でその頭をはたいて、諒がにっと笑った。
「窓、開けといてね」
「……」
突然言われて、えっ、と見返す。
ジャージの胸を張って、偉そうに諒は亮介を見下ろした。
「だからさ……だからさあ、言ったじゃん、俺は亮介の部屋が好きだからさ……」

「あ……」

「特にさ、窓がいいんだよね、あの部屋はさ」

諒の瞳に、優しげな色が浮かんでいる。

「……だってさ、亮介は……あの部屋の窓を開けてさ、何か待ってたじゃん。何かよくわかんないけど、すげえ待ってたじゃん……」

「……」

「俺さあ、遠くからあの窓見た時、なんか凄く……あの向こう側に行きたいって思ったもん。絶対入れてくれると思った……どんな奴でも、何をひきずってても、絶対入れてくれるって思って……だから、だからさ、そういうことだよ」

冴子に答えるとしたら、そういうこと。

諒はいたずらっぽい眼で、小さくそう言う。

「けど、冴子には内緒ってことで」

「……俺、そんなに大きい人間じゃないよ」

嬉しくなりながら、亮介は言い返した。

「きっと、寂しかっただけだ」

「今は違うじゃん？」

得意気な台詞。

「それでも、さ……窓はずっと開けといてほしいわけ。俺、今日の夜には東京出ちまうけどさ、戻る先は絶対あの窓って決めてあるからさ」
「今日!?」
亜衣が声をあげた。
「本当に急なのね……」
「そういうもんざんす。青春ですからね、ええ」
やたら老人くさくしみじみと諒は頷き、はたと校舎の大時計を見上げた。
「おお、いかん。一年D組のサッカーの試合の記録を取らねば。てなわけで失礼」
言ったと思うと、すたすたと校庭を横切って行ってしまう。
亜衣は心底残念そうにそれを見送った。
「今日だなんて……それじゃ、送別会も無理ね……」
「大丈夫」
案外明るい声で、亮介が答えた。
「だってきっとあいつ、あっという間に戻ってくるよ」

荷物なんて、ポケットひとつで足りる量だった。

どうせ必要なものは向こうですべて揃う。
日が落ちるころには、諒はとうに上野に着いて、特急列車のシートに身を埋めていた。
窓べりにひじをついて、ぼんやりとホームを眺める。考えることはいくつかあったが、とりあえずそれはあと回しにして。
なんにせよ、今度の仕事はさっさと片づけてこよう、と思う……。
「しけてるわね」
どすん、とすぐ隣のシートにどでかい荷物が放り出された。凄まじく嫌な直感が働いて、がばっと諒は振り向いた。
「その暗いのなんとかしてよ。せっかくこんな美女がご一緒しようってのに」
「……なっ」
荷物の主は、まぎれもなく……。
「な、な、なんだおまえは!?　来んでいいっ！」
「おだまり！」
ぴしゃりと冴子ははねつけた。勝ち誇ったように言う。
「忍さまのお許しはもらったわよ」
「しっ、忍は甘いっ！　おまえに甘すぎるっ!!」
慌てふためいて腰を浮かす諒をそっちのけで、冴子は巨大なスーツケースを無理やり網棚に

押し込んでいた。発車のベルが鳴りはじめる。
「おまえな、おまえ、おい聞いてんのか!?」
「はい、お弁当」
「だっ……だからー！」
「これ、ウーロン茶。みかんもあるわよ」
「遠足じゃないんだ、遠足じゃ！」
「あら、似たようなもんでしょ」
ベルが鳴り止んだ。めまいを感じつつ、諒は反射的にホームに目をやった。
絶句。
ホームの柱の横に、ひときわ人目をひきながら——立っているのは、斎伽忍その人である。
諒の顔を見ると、鮮やかに微笑して、片手をあげた。
「あ……あんの野郎……っ」
諒は窓ガラスに張りついた。ガタン、と車両が揺れ、列車が動き出す。
「てめえっ、やっぱり面白がってんじゃねえかっ」
諒の神経を逆なでするが如く、直前を通過するちょうどその瞬間、彼がひと言、呟いた。声はなくとも、わかった。
グッドラック。

実に楽しげに笑っている。

「だーっ、あいつはっ！」

諒はがん、と拳で窓枠を叩いた。

「馬鹿野郎っっ。絶対、絶対、ぜっったいすぐに帰ってきてやるっ！」

叫びは空しく宙にちぎれて、消えたのであった。

――おわり――

あとがき

あとがきであります。

まずは、初めまして。これが若木の一冊目の本になります。本当に出てくれて嬉しさ無限大です。ああよかったなあ。しみじみ。

正直言ってこんなに長い小説を書くのは初めてだったので、中盤からは書いても書いても終わらなくて、気がついたらハタチの夏は去っておりました。残暑のさなか冷房のない四畳半でぐしゃぐしゃと字を書きちらしては「うわああっ、もう嫌だっ、こんな下手な文章を見ているのは嫌だあっ」と泣いていたのは私です。うーん青春だ。（なんなんだっ）

修行が足りないんだよね、とにかく……。しかし本当に全力は尽くしているので、面白い話に……なっているといいんですが。

さて、ことのはじまりは『AGE』という作品が第十三回コバルト・ノベル大賞で佳作

入選してしまった（！）という事件でして。

死ぬほど小説書きになりたかった人間なので、それはもう今までの人生で最高最大の事件でしたが。

とるものもとりあえず編集部へお邪魔して、ボロッと「SFっぽいものを書くんです」と言ったら、実はえらく驚かれてしまったという。『AGE』ってごくごく普通の高校生が主役の青春小説（本当かなあ）だったので、あれを読んだ方は確かに若木が今回のようなものを書くとは思わなかったでしょうね。逆に今回の話を読んでくださったみなさまが『AGE』（活字になっていないんだ、これが。いずれ文庫の形にしていただけるそうです）を見たら「おやっ？」と思われるだろうし。

まあしかし、若木にとってはどちらも大切な世界なので——これからもいろんな話を書いていきたいと願っていたりするわけです。

そうだっ、キャラクターについて少しばかり言っておこう。

まず斎伽忍さんですが（なんでまずなんだよ、と諒ちゃんのチェックが入りそうだな）彼は雑誌コバルトに書いた短編のほうにゲスト出演しております。受賞第一作ということで何がなんだかわからずに書いた話でね！……89年夏の号の『秘密の歌姫　闇の騎士』というのがそれです。

前々から妖魔退治みたいな話を書こうと思ってはいたんですよね。しかし特にこれといった設定はなかった。ま、そのうち——とか思っていたら、ある日突然手が勝手に斎伽忍という名を書いて、とたんにばたばたっとオーラバスターの話まで決まってしまったというわくつきの人です。はっはっ。本編でモデルがどーのと言っているのは実は短編のフォローだったりします。

そういえば短編を読んで忍さんのイラストを送ってくださった方がいましてねー、これがすっごく嬉しかったです。そういうの大好きなんです。ありがとうございました。みなさん、気が向いたらイメージイラストなど送ってくださいね。楽しみにしてます。

話変わって主役のふたりについて。さすがに主人公だけあって亮介ちゃん悩みっぱなし、諒ちゃんいじめられっぱなしで、考えてみたら可哀想、みたいな。（かげでほくそ笑む若木。……そういう奴です）今回は亮介の事情がメインで、諒のことはよくわからなかったかも知れませんね。案外奥の深い奴なので、またこの連中の話を書いて、諒ちゃんをいじめたいなあと……あ、あれ？

それにしてもこの話はメインキャラが多くて、ダブルヒロインの亜衣ちゃんと冴子ちゃん、お笑いコンビの（嘘です、嘘っ！）希沙良と十九郎を加えて、全部で七人になるんですね。全員、大好きで大切なキャラクターなので……うーん、やはり諒と亮介はあっという間に再会する運命なんでしょうかね。

で——大切な話を本にしていただいて読んでいただいて、若木は本当に幸せ者です。小説を書くんだっ！　と、それしか頭になくて、周りにいろいろ迷惑かけて、わがまま言って、泣いたりわめいたりしたこと、情けなく馬鹿だと思うけれど、それを支えてくれて、ハッパをかけて、前へ押し出してくれた人たちのおかげで、私は今ここにいます。

いくつありがとうを言っても足りない。

だから、頑張ります。もっともっと頑張る。

てなわけで、そろそろ枚数もありませんが。

杜真琴さま、イラストを引き受けてくださってありがとうございました！　無理にお願いしてしまって申し訳ないです。シャープできれいで可愛い絵で、ララを開いて「イメージだ——」とか思ってしまったわけです。すみませんっ。でも嬉しいです！

前田珠子さま、本当にお世話になってます。もう、私前田先生のファンに恨まれても仕方ないんじゃないかと思うほどお世話になってる……がーん。（しかしこんなに趣味が合うとは知りませんでした）シリーズ、頑張ってくださいね。また遊んでやってください。

そして、編集部の川野さま——いつもいつもすみません。わがままな奴だし。感謝しています。

最後に、読んでくださったみなさまへ。
どうもありがとうございました。
もしよかったら、感想のお手紙をください。（若木じゃなくて、登場人物（キャラクター）宛の手紙でも良いです）きっとお返事が行きます。
では、再会を期（き）して。

若木未生

追伸　この作品を、誰よりも先に読んでくれたふたりの妹さんたちにささげようっ。

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101—50　東京都千代田区一ツ橋2—5—10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ。射手座、A型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年４月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。趣味は絵を描くこと、コンサートに行くこと。N響と森高千里とユニコーンが現在のお気に入りで、自らをミーハーと断言する。尊敬する人物は、筒井康隆。



天使はうまく踊れない

COBALT-SERIES

1989年12月10日　第１刷発行
1993年３月20日　第19刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社

〒101-50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
（3230）６２６８（編集）
電話　東京（3230）６３９３（販売）
（3230）６０８０（制作）

印刷所　株式会社美松堂印刷所
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1989
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611362-7 C0193

〈好評発売中〉集英社文庫 コバルトシリーズ



いとしのレイラ
少年！スター誕生編

男の子になりすまして、ロックグループのオーディションを受けた玲羅が合格しちゃった!?

いとしのレイラ2
恋のかけひき情熱！編

人気急上昇の玲羅のもとに“好きです„と告白しにきた女の子。彼女は昔、恋敵（ライバル）だったのに…。

いとしのレイラ3
涙でつづるハッピー・エンド編

ＴＶ出演した玲羅が、ついに停学!?おまけに、行方不明の父まで現れて、頭の中は大パニック。

I Love Youは
ビートにのせて。
美少年(!?)レイラ
の恋のロック物語(ストーリー)。

島村洋子の本

「いとしのレイラ」シリーズ



〈好評発売中〉

集英社文庫 コバルトシリーズ

お化粧伝説
お化粧伝説ぱーと2
オール・マイ・ラヴィング
オール・マイ・ラヴィングSIDE-B
さよならオール・マイ・ラヴィング
抱きしめたい
雨のお嬢さまストリート
夢のおぼっちゃまミルキー・ウェイ
恋のお姫さまパラダイス
星のプリンス・サマービーチ
初恋日記
あの娘におせっかい



あったかハートで
青春の恋と
友情を描いて
いま大人気！

島村洋子の本



コバルト・ノベル大賞
募集中!

〈入選作〉 正賞の盾と副賞100万円

〈佳作〉 正賞の盾と副賞50万円

〈選考委員〉 岩館真理子／菊地秀行
高橋源一郎／氷室冴子 (50音順・敬称略)

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。

この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売!

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。